〆金參百貳圓參拾八錢貳厘貳毛

從是先き運上所は海上に於ける諸般の取締は單に押送船の新造を以てのみ滿足するに足らすとなし之と同時に小蒸瀛船の購入に就て請求する處ありき

大阪港之儀ハ入港船艦天保山ヨリ一里餘モ沖合ニ停泊イタシ天保山ヨリ運上所迄一里餘モ有之距離遠隔之地形殊ニ川口ハ聊之風立ニモ逆浪甚敷押送リ船而已ニテハ右等ノ節急場ニ間ニ合不申不都合ニ付小蒸瀛船壹艘買入之義先以御許可相成度候左候ハヽ臨時小蒸瀛賣却船在之節其機ニ應シ廉價ニ御買入取計度候間此段先以相伺置候也

壬申八月

陸奥租稅頭殿
松方租稅權頭殿
古谷簡一殿

厚東樹臣

然るに租稅寮に於ては小蒸瀛船の購入は時機尚早しとして之か認許を與へさりし

第十六號

本月五日十二號附ヲ以大阪港之儀ハ遠淺ニテ入港之船艦天保山ヨリ凡一里餘モ沖中ニ碇泊致シ稅關トハ彼是二里餘モ距離懸隔之地形殊ニ川口ハ聊之風ニテモ逆浪烈敷時宜ニ寄リ押送船耳ニテハ急速ノ間ニ合兼不都合ニ付小蒸瀛船壹艘御買入之義先以御許可相成度段々御申越之趣致承知候右同港之義ハ即今御修繕中ニモ有之今後落成之上ハ定而港内運搬之便利ヲ起シ或ハ小蒸氣船相用候テモ不及哉モ難計左候テハ即御今買入相成候而モ冗費ニ屬シ可申旁當分相見合候方可然存候此段御報申入候也

壬申八月十二日

古谷簡一

厚東樹臣殿

遂に小蒸瀛船購入の議は之か成立を見すして止めり爾來大阪稅關に於ける監視用船は三隻の押送船を以て之れに充てられ常に之れを天保山出張所に繫留せしむ其後明治十三年四月に至りて先きの押送船の內破損使用に適せさるものあるを以て府下西成郡南傳法村浦田善太郎なるものに命して新船壹隻を造らしめたり試みに見積書を揭けて當時の形狀價格等の參照に供へんとす

明治十三年四月

大阪天保山御役所御用船壹艘

日本形

長　四間五尺六寸　　深　二尺二寸　　巾　五尺七寸

一杉敷板三枚　長四間（巾壹尺ア貳寸）壹枚ニ付金壹圓拾六錢六厘此金參圓四拾九錢八厘

一杉上下側四枚長五間（巾壹尺八寸ア壹寸貳分）壹枚ニ付金貳圓參拾七錢五厘此金九圓五拾錢

一檜木友ノトリテ長三尺（巾貳寸ア貳寸）此金六拾錢

一杉ヘキリ板　長貳間二枚（巾壹尺ア壹寸二ア）壹枚ニ付四拾錢此金八拾錢

一クス木見ヨシ壹本　長八尺巾八寸ア二寸五分此金壹圓貳拾錢

一松トコ　壹本　（長四尺五寸巾八寸）角此金七拾錢

一帆檣　壹本　長三間四寸角此金五拾錢

一舵　壹丁　此金壹圓五拾錢

一惣板子　長貳間拾貳枚（巾八寸ア壹寸貳分）壹枚ニ付貳拾錢八厘此金貳圓五拾錢

一檜木船ハリ　胴長六尺　巾六寸ア三寸五分　トモ　長五尺五寸巾四寸角　ヲモテ同四尺五寸巾
同上　胴ノツキ同五尺七寸ア三寸巾四寸　壹本ニ付四拾錢此金壹圓六拾錢
一檜木コベリ貳本　長五間（巾三寸 ア二寸）壹本ニ付五拾錢此金壹圓
一五寸釘　九貫目百目ニ付八錢貳厘此金七圓參拾八錢
一アカノベ板　百六十目此金參拾六錢八厘
一同ベオ　數貳百本　百本ニ付六錢此金拾貳錢
一大工手間　四十人壹人ニ付貳拾五錢此金〆拾圓
惣〆四拾壹圓貳拾六錢六厘

（圖ハ署ス）

爾來稅關所屬の御用船はすべて此當時の船形を襲用し從て朽つれは從て新造し特に船名を付せず舊稱を逐ふて單に御用船と呼へり

八、水夫　運上所開局の當初天保山番所に水主頭（第二編第一章參照）を置て部下水夫の取締をなさしめたりしも當時に於ける水夫の員數に於ては又記錄に徵すへきものなし只故老の言によれは開局以來明治五年の末に至る迄は諸藩の備入外國船等の出入口頗る頻繁なるものありしを以て尋問巡邏の事に忙はしく一隻の御用船を遣るに猶六人を要するが如き隨ふて水夫の員數も多きを要し常に十四五名を下らさりし降つて明治四五年の頃に至りては外國船の出入も年を逐ふて漸く減少せるを以て水夫も減員せられ六年の初屋形船の廢せられたるときに於ては僅かに四名を剩するに至れりと云ふ而して當時水夫の取締に就て特に何等の規定なく單に番所長の命唯是れ奉するのみなりし後六年一月監吏課章程の發布に伴ひ同二月始めて横濱にへて稅關水夫規則を定めて之を各稅關に配布して慣ふ處あらしむ

稅關水夫規則

第一條

稅關中ニ雇ヒアル水夫ハ稅關所在ノ小蒸汽船及ヒ小艇ノ用ニ供スルモノニシテ密商脫稅ヲ監視防遏スル監吏課ニ附屬スル者ナレハ常ニ其長官ハ勿論監吏ノ示令ニ順從シ部中能ク懇和シ各自勉勵其職ヲ盡スヘシ

第二條

水夫若シ密商脫稅ヲ視認ムトキハ速ニ當直吏長ニ報知スヘシ其功ニ寄テハ相當ノ賞ヲ與フヘシ最トモ傍觀スルカ或ハ默シテ見免スモノアラハ至當ノ罰ヲ加フヘシ

第三條

稅關所在ノ蒸汽船幷ニ哨船小艇日々琢磨洒掃ヲ爲サヽレハ機關ノ運轉ヲ害シ且ツ其船ノ進力ヲ妨ケ隨テ船躰ニ腐敗ヲ釀シ亦体裁ヲ失ヒ外客ノ蔑視ヲ被ムルニ至ラン故ニ船躰ハ清潔ヲ要シ機關船具ハ丁寧ニ取扱ヒ破損セサル樣注意スヘシ

第四條

內外國ノ船舶入港スルトキハ大監吏尋問トシテ出張スル爲メ速ニ出船ノ支度ヲ爲シ其示令ヲ待ツヘシ

第五條

外國船出入港ノ節ハ番號札ヲ揭卸スヘシ且ツ其番號船名月日衛符ニ認メ屯所內ノ塗札ニ張付置クヘシ御國船ノ衛符モ同樣タルヘシ

第六條

監吏夜中海上巡廻ノ爲メ小艇ニテ二時間每ニ出張ス其時々水主貳名或ハ三名乘組示令ニ順ヲ其進

退ヲ爲スヘシ且ツ毎朝夕船庫ノ封印開鎖ノ節ハ其期前ニ出船ノ用意ヲ致シ置クヘシ

第　七　條

水夫ハ居常外國人ニ接近スル故ニ禮節ヲ守リ服飾ヲ潔シ言語動作ヲ正クスヘシ最モ各船ニ到リ舷下ニ居ルトキハ殊更ニ相愼ミ其船夫ト猥リニ交語スヘカラス然リト雖トモ彼ヨリ若シ事ヲ尋ル時ハ懇切ニ教示スヘシ

第　八　條

稅關長次官監吏課長ニ出逢フトキハ歩ヲ止メ正面ニ向ヒ右手ヲ擧ケ左手ヲ直垂シ行禮スヘシ監吏ニ逢フ亦右手ヲ擧テ禮ヲ爲スヘシ敢テ傲慢無狀アルヘカラス

第　九　條

水夫十七名ハ毎日總員在營シ日沒船庫鎖封ノ後ハ半數則チ七名（器械方ヲ除ク）無缺員奇偶宿直スヘシ若シ病氣等ニテ缺員スルモノハ至當ノ罰アルヘシ

第　十　條

毎朝第八時惣員屯所柵外ヘ整列シテ吏長或ハ大監吏ノ檢査ヲ受クヘシ若シ此人員改メニ漏ル、者ハ其日ノ給料ヲ引去ルヘシ亦其事情ヲ糺時ニ依テハ罰責ヲ加フヘシ

第　十　一　條

屯所中ハ常ニ清潔ニ爲サヽレハ健康ヲ害シ且ツ体裁ヲ失フ故ニ朝夕掃除シ醜クカラサル樣致スヘシ

第　十　二　條

制服靴等都テ圖表ノ如ク期月ヲ立テ渡スヘシ平常能ク注意シ醜態ヲ顯ハスコト勿レ若シ毀損スレハ直ニ自費ヲ以テ修覆ヲ加フヘシ

但シ公事ニ係ル非常ノ毀傷ヲ得タル時ハ課費ヲ以テ修整致スヘシ

第　十　三　條

在營中ハ制服ヲ脫スルヲ禁ス亦制帽ヲ着シテ草履下駄傘及ヒ跣足等ハ嚴禁タリ若シ此規則ヲ犯サハ罰金ヲ出サスヘシ

第　十　四　條

荷船客船等艀下會社ヲ立ル素ヨリ水主ノ關スル所ニ在ラサレトモ御雇水主ノ威焰ヲ以テ必ス社中ニ威權ヶ間敷事申出ヘカラス

第　十　五　條

休憩中屯所ニ於テ高聲雜談ヲ爲シ或ハ俚歌ヲ唱ヒ或ハ酒宴ヲ催スコト嚴禁タリ若シ法ヲ犯ス者ハ至當ノ罰ヲ加フヘシ

第　十　六　條

市中商店等ニテ威權ヶ間敷儀等申掛ケ或ハ買掛ケ押買都テ無理粗暴ノ擧動アルヘカラス若シ此令ニ背ク者ハ嚴重ノ罰ヲ加フヘシ

右規則ヲ確定ス各自能ク之ヲ遵守シ必違背スルコト勿レ

明治六年二月

租稅權頭　中島信行

（服制ノ事ハ後ニ出ツ）

九、配置　明治五年初めて監船巡警の兩課を設くるや監船課は特に其職制及ひ監船吏規則等を制定し天保山（舊船番所）に分課を置て船舶の乘監貨物の積卸其他海上に於ける諸般の取締をなさしめ監視監吏を波止場（川口）天保山（舊船番所）及安治川（舊船番所）の三ヶ所に配置して關稅警察の事に從はしむ當時監船吏の配置に關しては左の如く規定せり

規　則

第一、天保山遠見番所へ監船吏一員出張スヘシ
　但日出ヨリ日沒迄
第二、監船吏總員本課ニ出張スヘシ
　但宿直兩員ニシテ一員ツヽ交換徹夜勤番スヘシ
第三、安治川出張監船吏晝夜兩員トスヘシ
　附夜中交番一員ハ不寢番スヘシ
第四、分課長幷檢官互ニ交換宿直シ日出ニ船ヲ見屆ケ且ツ日沒歸船ヲ待テ日中ノ事情ヲ聞キ日記ニ載ス可シ
第五、外國船入港ノ節ハ分課長或ハ檢官直ニ尋問ヲ爲シ歸課飜譯ノ上各課へ廻達ス可シ
第六、監船吏日出ヨリ日沒マテ外國船へ乘組規則之通リ事務取扱フヘシ日沒歸課之節封印ヲ爲シ置ヘシ朝乘船ノ節前日封印ノ異同有無ヲ檢閱スヘシ
第七、監船吏非番ノ向ハ朝第七時出勤直ニ受持ノ外國船へ前監吏ト交換可致事
第八、各國軍艦入港ノ節ハ是迄尋問セストイヘトモ入出港及ヒ船名ハ日記ニ載書シ置クヘシ
（備考　本規則中天保山遠見番所トアルハ船番所ニアラスシテ開港ノ當初出入船舶哨望ノ爲メ別ニ燈臺ノ近傍ニ設置セラレタルモノ翌六年二月之ヲ撤セリ）

次て同年十月監船吏巡警卒を海陸監吏と改稱し翌六年一月監吏課章程の發布と共に監吏心得書（次章に揭出す）を配布し初めて大監吏以下其管掌事務によりて各配置に就かしむ爾後再三監吏心得書を改正すると共に多少其配置を變更する處ありしを以て今左に項を分ちて其配置に關する概要を記せん

（一監吏課（川口波止場）　當時川口波止場は東西の二區に分たれ現在稅關所屬の波止場を東波止場と稱し元安治川橋の下流に沿ふて新たに波止場を建設し之を西波止場と呼ひ大阪府の所屬たりしを而して監吏課は即ち西波止場の西端なる元大阪府に屬せし番小屋を以て之れに充られ吏長（屬兼任）を置て之を主宰し大監吏（員數不詳）を宿直せしめて陸上勤務者の監督其他本課に關する一切の事務を處理せしむ小監吏（員數不明）は悉く本課に出務して見張立番巡廻等總て陸上の勤務に就けり

第一號監區　立番　傳信機局脇ヨリ稅關前波止場中央マテ
第二號監區　立番　英國拾壹番館西角稅關側波止場中央ヨリ西波止場中央迄
第三號監區　見張巡廻　本課居留地川岸及ヒ梅本町

但各號監區を四名宛晝夜二時間又は一時間交代にて隔日宿直勤務せしむ

如斯監區を定め陸上の勤務に就かしめたりしか翌七年八月居留地集議所より第三號監區一部の巡視を中止せんことを交渉して曰

貴關監吏衆向後當居留地內巡行御差止被下候樣御取計有之度旨同會議所取締中ヨリ依頼ニ付右及御掛合候也

千八百七十四年八月廿日　　居留地集議所書記　フランク、メシヨル

大阪稅關御中

本より肯くへきにあらさるを以て直ちに之を拒絶せり即ち

本月廿日附貴翰致落手候然ハ居留地會議掛リボリスコムミッテーヨリ申立候趣ヲ以テ當關監吏居留地巡廻之儀差留呉候樣御掛合之處右ハ全ク輸出入物品陸揚積出し方等不規則不相成樣爲取締巡邏爲致候儀ニ付折角御申越ニ候得共差留難出來段御報申進候樣長官申付候右御回答ヲヨヒ

候謹言

七年八月廿四日

大阪稅關長代理
租稅大屬　植村昌茂

居留地會議掛書記役
フランク、メシヨル貴下

後八年に至り監吏心得書を改正すると同時に其陸上勤務者の監區をも左の如く改正せり

立番住地　巡廻區部

第一號監區　立番　傳信局脇ヨリ本課西地境迄

第二號監區　立番　本課西地境ヨリ元長州濱西迄

第三號監區　巡廻　梅本町蘭五番舘前波止場ヲ初メ居留地川岸古川筋ヨリ及ヒ梅本町竹林寺迄

但各號ヲ二名宛晝夜二時間交代ヲ以テ隔日宿直勤務セシム

然るに明治十年五月監吏總長以下の官名を廢し更に監吏監吏補を置き翌六月監吏課を監視課と改稱に及ひ監吏補の配置を本課詰海上勤務陸上勤務の三とし監視課長は監吏（一名屬兼勤）を以之に充て本課詰を本課及天保山出張所に配置し海上勤務は悉く天保山出張所に於てせしめたり當時陸上勤務の監區は左の如かりし

第一號監區　本關前波止場東詰ヨリ元長州濱西詰迄

第二號監區　梅本町元蘭五番舘前波止場ヲ始メ居留地川岸古川筋ヨリ及ヒ梅本町竹林寺迄

但各號ヲ四名宛晝夜二時間交代ニテ隔日宿直勤務セシム

降て明治十九年十一月監區を改正し新たに木津川巡回を加へしむ即ち左の如し

陸上勤務

第一號監區
第二號監區）　晝夜　三名

木津川巡回　晝　午前一回　午後一回　一名

右毎日四名ノ本務ニテ内一名晝間木津川巡回ノ上日沒退課ノ事

但當分一名增員迄隔日巡廻ノ事

(二)天保山出張所　曩きに監吏課の新設となり翌六年監吏心得書を規定と共に中監吏已下若干を天保山出張所に派出せしめ監船海上巡回入津哨望の三部署を定め各海上勤務に服し密商逋稅の危險に備へしむ

一海上巡廻　四名

但二名宛隔日交代セシム

一入津哨望　二名

但一名宛晝夜二時間又ハ三時間ノ交代ヲ以テ隔日宿直セシム

一監船　若干名

但碇泊船ノ數ニ應シテ毎日配布シ隔日交代ニテ宿直セシム

後八年中監吏三名宛（時により四名）をして毎日交代宿直せしめ監船哨望巡回の勤務に服せしめ十年六月更に本課詰（監吏補）なるものを本課及ひ天保山出張所に配置せしめ船舶の哨望、艙口、封鎖の立會及ひ海陸勤務者の監督に任せしめたり翌十一年一月海上勤務の部署配置に付て左の如く達せり

其港監吏補海上勤務方ハ以來晝兩員夜一員宛相詰可申尤病氣等ニテ缺員之節ハ見計ヲ以テ事務差閊無之樣減員候共不苦候事

第七篇　關稅警察　組織及配置　百五十五

入港船ノ爲在來ノ人員ニ而事務差閊ニ可及節ハ當港（神戸）監吏補ヨリ臨時勤務申附候間直ニ其旨電信ヲ以報知可取計候事

十一年一月廿五日　　長岡稅關長

大阪稅關田嶋八等監吏殿

（三）安治川監所（湊屋新田）　所謂運上所時代に於ける安治川船番所は當時安治川を上下せる船舶艀艇の檢査所として專ら拔荷乘拔け等の監視に任し特に番所設置の當初にありては鐵鎖を河流に引きて船舶航行の自由を許さす故に俗に之を呼て鎖番所と云へり明治五年七月運上所の租稅寮の主管に歸するや船番所は大阪府の所轄する處となりしも運上所は依然其廳舍を借受け監船吏二名（晝夜隔日交代）を派して監視事務を取らしむ翌六年一月港內取締規則の發布に伴ひ大阪府は再ひ之を船改所に充て沿海通航船に對する船稅の徵收積荷檢查等に關する事務を開始し之を安治川國品改局と呼へり同年二月稅關は其監吏心得書の第八則に

一中監吏二名宛安治川國品改局へ出務し晝夜外品ノ輸出入ニ注意シ都テ稅關ノ許可ナキ貨物ハ留置キ速ニ本課へ報スヘシ

と規定し其廳舍の一隅を割ひて其事務を執らしめたり降て明治八年九月稅關長より左の如く達し以來中監吏の派出を中止せり

安治川船改所免狀改之儀當分之內等外吏ヲ以爲取扱候ニ付以來中監吏ハ同所へ出頭ニ不及等外吏ハ從前中監吏之取扱致居候通事務可取扱候事

明治八年九月十八日　　關長

是より先き神戸稅關より安治川船改所に於ける監吏詰所營繕の件に關して上請して曰く

第三百五十號

大阪安治川筋船改所へ監吏詰所繼足之儀伺

大阪港ニ輸入スル品ハ多分神戸港滯泊ノ各國商船ヨリ稅未納ニテ日本艀船へ移シ運搬致候ニ付一應大阪川口ニ於テ相改可申テハ四流ノ川口殊ニ稅關迄ハ里程モ隔リ不取締ニ有之候爲メ當寮所轄以來ハ安治川筋大阪府船改所ノ內一間借受監吏ヲ爲詰候テ右荷物改メ方爲致居候處先般內國西洋形船舶ハ取締方各開港場共稅關所轄ニ相成候ニ付テハ阪府ニ於テ是迄二ケ所ニ於テ取扱居候事務安治川而已ニ一ケ所相纏メ就テハ人員モ相增隨テ稅關ニ借受候席モ手狹相成錯雜相生差閊不勘乍去右事務ハ其荷物彼等ヲ區別スル而已ニテ船ハ齊シク日本形ニ付船改所ト一所ニ無之テハ取締モ其効ヲ得ス故ニ稅關ニ於テ別ニ一局ヲ相設ケ候儀ハ實際不都合ニ付從前ノ通阪府船改所へ別紙圖面ノ如ク繼足シ監吏詰合取扱候得共事務差扣無之見込ニ付右繼足ノ儀同府へ及打合候處何等差閊無之趣回答申越依テ繼足ノ目論見ヲ以テ御入費爲積候處別紙仕樣帖ノ通金百七拾七圓六拾壹錢參厘ニテ出來候樣申出候間何卒右金額別途御出方ヲ以營繕御許可相成候樣致度此段積帖差添相伺候也

八年九月九日

租稅頭松方正義代理

吉原重俊殿

茲に於て本省は同年十二月に至り

第六十九號

伺之趣許可可相成候條費額金百七拾七圓六拾壹錢參厘ヲ目途トシテ繼足方着手可致尤モ右金額ノ儀ハ歲費豫算內ヨリ相渡スヘク候條受取方申出追テ皆出來候上ハ精算帖相添其旨可屆出候事

神戸稅關

租稅權頭　長岡義之

八年十二月四日

租稅權頭　吉原重俊

と指令認許し了り茲に該工事に着手し監視事務の擴張を見るへかりしに後其何の理由によれるや否やを詳にせすと雖とも該工事の着手を見るに及はす翌九年一月稅關は大阪府に通知して曰く

辰第拾六號

貴府御所轄安治川船改所へ是迄海外輸出入之荷物爲檢査當關吏員出張爲致置候處事務之都合モ有之當分之內右同斷出張之儀ハ停止致候間爲御心得此段申進候也

九年一月二十五日

大阪稅關長

租稅權助　長岡義之

船番所の當初より依然監視官吏を配置せらるゝに至れり

十二年再ひ監所の配置を見るに至れり

(四)四日市大阪稅關出張所　明治二十二年七月特別輸出港規則の發布と共に伊勢國四日市港を大阪稅關所管の特別輸出港と指定せられ同年十一月始めて同港高砂町に出張所を設置するに及ひ所長(屬)の任命と同時に雇監吏二名の在勤を命して專ら監視事務を執らしめき

第二章　警察事務

十、監吏心得書及改正　五年の當初新たに巡警卒監船吏の設置と共に關稅警察事務の一般は依然船番所時代の例規慣行を逐ふに過ぎさりしも五年の末造監吏課の新設となり更に海陸監吏の分稱となり監船其他海上事務は一切海監吏をして之に衝らしめ唯神戸大阪を往復せる小蒸汽船にして川口波止場より旅客貨物の積卸をなすものに對しては陸監吏を乘監せしめたりしも取締上遺憾尠からさるものあるを以て翌六年一月外國人所有之小蒸汽船は一切海監吏を乘監せしむる事となし稅關より

左の如く各國領事に照會せり

第三號

神戸港往復小蒸汽船入出之度々荷物卸等是迄監吏ヲ以テ取締爲致來候處追々船數モ相增不取締之廉モ有之候間以來他船同樣碇泊中海監吏爲乘込候間其段貴國商人共へ御布達有之候樣致度此段御掛合申進候謹言

明治六年一月　日

各國領事宛

瓜生租稅助

六年一月監吏課章程の發布によりて茲に關稅警察機關の變革を見るに及ひ大阪稅關は監吏執務に關する規定及雜則を規定し在職中遵守すへき事項を網羅せり之を監吏心得書と命す

監吏心得書

大監吏

尋問

第一則

外國ノ船舶(軍艦ヲ除クノ外)更ニ入港スル時ハ大監吏直ニ尋問簿ヲ携ヘ其船舶ニ到リ禮讓ヲ正クシテ船司ニ應接シ右ノ簿冊ヲ出シ國名船號及ヒ船司ノ名船夫ノ數船客ノ員積込ノ貨物出帆ノ地名日月時刻等詳細ニ自記セシメ且堅固狀ノ有無ヲ糺シ以テ其簿冊ニ記シタル原文ヲ譯シ之ヲ(某)吏長ニ報シタル上稅關諸課ニ廻達シ又之ヲ塗札ニ掲記スヘシ

第二則

入港スル船舶ノ來由ヲ尋問シ若シ其船漂流或ハ困難ニ遇フト聞ク時ハ詳ニ其情實ヲ糺シ速ニ其顚末ヲ(某)吏長ニ報スヘシ

第三則

入港ノ船舶尋問ノ上條約未濟國ノ船ナレハ貨物ハ勿論船司ヲ始メ船夫其他船客ノ者ニ至ルマテ斷然上陸ヲ禁シ速ニ之ヲ（某　吏長ニ報スヘシ

監　船

海上巡廻　中　監　吏

入津哨望

安治川國品改局出張

第四則

大藏省輸出米積入ノ外國船ヘ中監吏一名宛日出前三十分ヨリ日沒迄乘込居リ密商脫稅ハ勿論總テ稅關ノ免許狀ニ照準シ諸荷物ノ揚卸ニ專ラ注意スヘシ最モ大藏省輸出米積入ノ船ハ同省官員乘込居ルカ故ニ中監吏ハ乘込致サスト雖トモ若シ他ノ貨物等揚卸スヘキ時ハ乘込居ルヘシ其行作タルヤ宜シク甲板上ニ在テ體裁ヲ正フシ耳目ヲ配リ彼ノ障碍ニ成ラサル樣ニシ且ツ猥リニ談話等致シ彼ノ蔑視ヲ受ケサルヲ要スヘシ

第五則

監吏二名宛晝夜交替シ諸碇泊船ノ近傍ヲ巡廻シ監吏乘込無キ船舶ハ殊更ニ注意ヲ加ヘ其動靜ヲ監察シ都テ怪ムヘキ景況ヲ見認メタル時ハ直ニ其船ニ到リ詳細ニ尋問シ時宜ニ依テハ一名其船ニ留リ一名ハ其顚末ヲ本課ニ報スヘシ

第六則

諸停泊船ノ艙口ヲ開鎖スルハ監船監吏ノ課タリ然レトモ監吏乘込ノ無キ船ハ巡廻監吏ノ課トス總テ之ヲ鎖封スルハ夕日沒ノ時ニ於テシ開封スルハ日出前三十分ヲ以テ期トス其開封ノ時前日ノ固封異同有無ヲ檢閱スヘシ

第七則

入津哨望ハ中監吏一名宛晝夜二時間或ハ三時間ノ交換ヲ以テ能ク外國船ノ出入ニ注目シ都テ船舶入出スル時ハ直ニ大監吏ニ報スヘシ

第八則

中監吏二名宛安治川國品改局ヘ出務シ晝夜外國品ノ輸出入ニ注意シ都テ稅關ノ許可ナキ貨物ハ留メ置キ速ニ本課ヘ報スヘシ

立番　小　監　吏

巡廻

第九則

監吏ハ稅關前ヨリ居留地川岸梅本町迄見張所立番位地及巡廻等左ノ如シ

第一號　傳信機局脇（傳信局脇ヨリ稅關前波止場中央マテ）

第二號　英國拾壹番館西角（立番英國拾壹番館西角稅關前波止場中央ヨリ西波止場中央マテ）

第三號　（見張本課居留地川岸巡廻及ヒ梅本町）

第十則

各號ヲ四名宛ニテ隔日ニ宿直警衛シ每朝第九時ニ總テ交換シ配布所ノ交替ハ晝夜共二時間或ハ一時間ヲ以テスヘシ

第十一則

第一號ヨリ第三號マテ見張立番巡廻等各自ノ區部ヲ日擊注意シ假令隣號タリトモ事件差起リタルトキハ速ニ協力スヘシ若シ故ナクシテ私ニ地位ヲ轉スルモノハ之ヲ總長ニ報シ相當ノ罰ヲ加フ

但巡邏中町家ヘ立寄リ私用ヲ便スルヲ禁ス若シ之ヲ犯ス者ハ罰本文ニ同シ

雜　則

第　十　二　則

監吏ヲ拜命スルトキハ必ス第一ニ監吏課章程監吏心得書及有稅無稅品ノ辨別ヲ暗誦スヘシ

第　十　三　則

監船當直海上巡廻及各號位地ヘ出務中ハ殊ニ禮節ヲ重スヘキハ勿論吸烟讀書及ヒ猥リニ人ト談話スルヲ禁ス

第　十　四　則

休憩中ハ吸烟讀書談話スルヲ許シタリト雖トモ高聲ニテ讀書シ或ハ無益ノ雜談ニ時間ヲ費シ或ハ戶外ニ出テ恣ニ吸烟スル等ヲ禁ス唯言行ヲ愼ミ他局ノ誹謗ヲ受ケサル樣各廉耻ヲ以テ維持奉職スヘシ

第　十　五　則

出務中ハ必ス他人ト談話ヲ禁スルト雖トモ職務上ノ事故カ或ハ他ヨリ事ヲ尋ヌルトキハ懇切ニ說諭敎示スヘシ

第　十　六　則

屯營中ハ常ニ淸潔ニ爲サヽレハ健康ヲ害シ且体裁ヲ失フ故ニ監吏休憩中ハ專ラ之ニ注意シ室中ノ醜態ヲ露サヽルコトヲ要ス

第　十　七　則

每朝定メラレタル時限迄ニ總員交換スヘシ若シ遲刻スル者ハ至當ノ罰ヲ充ツヘシ

第　十　八　則

監船巡廻立番共交代ノ都度々々吏長机上ノ桁箱ニテ已ノ姓名札ヲ揚卸スヘシ

第　十　九　則

監船巡回及立番等勤務中ノ事故ハ大小巨細ヲ論セス歸局ノ時都テ日誌ヘ記載スヘシ

第　二　十　則

失火其外非常ノ節ハ總員出關スヘシ

第　二　十　一　則

當直中病氣或ハ不得止事故アツテ同伍ノ者ヘ一時賴合ヲ爲スハ不苦ト雖トモ前以テ課長ヘ屆置クヘシ

但急病等ハ此例ニアラス

第　二　十　二　則

病災等ニテ出務ナシ難キ時ハ前夜其事故ヲ本課ニ報スヘシ又當日ニ至リ俄ニ病發スルモノ都テ出務時限迄ニ申牒スヘシ若シ其報遲延ニ及フ時ハ快癒ノ上至當ノ罰ニ處スヘシ當病三日ヲ過キ猶出局爲シ難キ時ハ醫師容體書相添ヘ屆出ヘシ

但長病ノ者ハ七日間每ニ醫師容體書提出スヘシ

第　二　十　三　則

病氣ニテ勤務ヲ欠クトキハ左目ノ如ク償金ヲ出スヘシ此金ハ課中ニ貯備シ精勤勉務ノ輩ヘ賞與スヘシ

三日以內　一日金貳拾錢　　十日以內　一日金拾錢　　十一日以內　一日金五錢

第　二　十　四　則

課中貯備トシテ左ノ金額ヲ日給ノ內ヨリ積置クヘシ

大監吏　一ケ月　貳　圓　　中監吏　一ケ月　壹圓五拾錢　　少監吏　一ケ月　壹　圓

第二十五則

右貯備金ハ手簿ヲ整シ之ニ揭載シテ各自ニ判然ナラシムヘシ

第二十六則

監吏ヲ轉職スル時カ或ハ事故アリテ免役スルトキハ右積置ノ金ニ相當ノ利足ヲ加ヘ渡スヘシ

第二十七則

罪アリテ職ヲ脫スルトキハ其非ニ因リ積置ノ金額或ハ半數ヲ沒收スヘシ

右監吏心得規則長官ノ許可ヲ經テ確定スル所ナリ各自能ク之ヲ遵守シ必ス違背スルコト勿レ

明治六年二月

監吏課長

かくの如く外國船舶に對する尋問は大監吏をして之をなさしめ中監吏は陸上に於ける見張立番巡回等配置せられて乘監艙口の開鎖及海上巡邏に關する事務を執り小監吏は陸上に於ける見張立番巡回等の職務に就かしむ當時安治川監所は專ら出入の船舶艀艇を監視すると同時に特に外國貿易品を積載せるものは其輸出入免狀に對照して貨物の檢査を行ひ異狀あらは之を押へて本課へ通報し異狀なきものは其免狀に裏書をなして其通航を許せり然るに後三月(六年)之を廢せしむ

從來安治川國品改局出張監吏輸出入品免狀へ裏書致來候處以來輸出入共裏書致スニ及ハス此段及通達候也

但輸出入共無免狀品ト免狀ニ相違アル品ハ取押候儀從前ノ通可被心得事

明治六年三月廿日

監吏課長

之れと同時に輸出品に關する免狀取扱方に對して

是迄碇泊ノ外國船ヘ積込品免狀取扱ノ儀區々ニ相成不都合ヲ付以來本免狀ハ荷主ニ渡シ置キ貨物積卸ノ上ハ渡シ置キタル監吏宛ノ免狀ハ取揚ケ右預ノ本免狀ハ下渡シ可申候且監船ノ監吏ハ監吏宛ノ免狀視檢致候迄ニテ取揚ルニ不及尤古免狀見認ノ捺印ハ是迄ノ通可取計事

但貨物船積半途ノ節ハ監船監吏ニ於ル監吏宛ノ免狀裏ヘ裏書致シ右貨物積切候迄ハ荷主ヘ渡置可申事

と訓示し同年五月に至り安治川監所に於て直に物件の留置等をなすは物議釀生の憂あるを以て之を改正せしむ

安治川出張監吏ニ於テ外國輸出入免狀表ノ違ヒ又ハ無免狀ノ事故ヨリシテ其品留置却テ彼ヨリ訴出ルト雖トモ其品遠隔ニ滯在スルヲ以テ稅關緩速ノ御處置ニ遲々ノ不都合ヲ釀生ス以來表ノ違無免狀品也共一切安治川出張所ニ留置コト難相成晝間ハ勿論譬夜中ト雖一名其船ニ上乘シ本課ヘ可屆出事

但本文輸出入品共都テ時宜ニ應シ安治川關所ヘ留置キ詳細書輸ヲ以テ本課ヘ報知シ或ハ荷物ニ添輸ヲ爲シ差廻スコトモアルヘシ

明治六年五月十四日

監吏課

後同年十一月稅關長より更に左の如く達せり

安治川監吏見張所ニ於テ其稅關陸揚可致品ハ其免狀ヘ裏書鈐印致候樣昨日達示置候得共各港ニテ預稅等ノ免狀ニテハ裏書二樣ニ相成不都合ト存候間其儀ハ相廢シ監吏改ノ品ヲ證シクル往復帳ヲ必ス無怠御撮扱有之度此段更ニ申進候也

六年十一月十四日

而して翌七年七月に至り再ひ其免狀に對する裏書をなさしむることゝなせり

安治川口見張ニテ荷船着船屆出候節荷主持參ノ免狀表ト現物ト相違之有無ヲ較正シ左ノ書式ニ準ラヒ相違ノ有無ニ拘ラス裏書ノ上免狀ハ荷主ヘ差戻スヘキコト

書　式

一表書ノ通積荷見屆候也

月　日

一表書何百數之內何拾何數積荷見屆候也

月　日

右之通伺之上取極候事

明治七年七月十六日

中監吏印

中監吏印

副吏長

大監吏

越えて八年(月日不詳)監吏心得書を改正して其詳細を極む

監吏心得書

第一則

商船(外國航海ノ船ヲ云)入港セハ直ニ當直ノ大監吏入港待ノ中監吏一名(郵船ハ二名)ヲ引卒シ尋問簿ヲ携ヘ其船ニ至リ禮讓ヲ正クシテ船司ニ面接シ其國名船號噸數及ヒ船司ノ姓名乘組人員幷船客ノ個數積入ノ貨物出帆ノ地名其月日船中諸般ノ事故等詳細ニ尋問シ且堅固狀ノ有無ヲ糺シ之ヲ右ノ簿冊ニ記載シ其簿冊ノ旨ヲ第一號ノ書式ニ挿記シ課長及各課ニ回報シ又之ヲ木牌ニ揭示ス

第二則

入港商船ヲ尋問ノ上若シ其船漂流或ハ困難ニ遇フト聞クトキハ詳ニ情實ヲ糺シ速ニ其顚末ヲ課長ニ報スヘシ

第三則

入港商船ヲ尋問ノ上條約未濟國ノ船ナレハ貨物ハ勿論船司ヲ始メ乘組人其他船客ノ者ト雖トモ斷然上陸ヲ禁シ速ニ之ヲ課長ニ報スヘシ

第四則

入港商船ヲ尋問ノ上船中人畜傳染病アラハ檢官來船迄一切人畜ノ出入ヲ嚴禁シ速ニ其旨ヲ課長ニ報スヘシ

第五則

入港商船ヲ尋問ノ上多量ノ火藥爆發品等ヲ積入ラセルモノハ其繫場ノ位地ヲ併セ速ニ之ヲ課長ニ報スヘシ

第六則

入港商船ニハ捺印科ヨリ其手數濟ノ報知ニ從ヒ直ニ水夫頭取ヲシテ其船番數ノ標札(番數ハ一週期毎ニ之ヲ改ム)ヲ揭ケシメ又同科ヨリ出港手數濟ノ報知アラハ同人ヲシテ右標札ヲ取除カシム

第七則

積荷ハ檢査課ヨリ回報ノ總數ト其船乘勤監吏ノ手簿トヲ照應シテ毎日卸荷ノ高ヲ較計シ凡九分方卸濟ニ至ラハ其殘數ニ本船實荷ノ違同ヲ以テ其旨ヲ檢査課ニ報告スヘシ尤モ當港ニ陸揚スヘキ荷物若荷主ノ都合ニ因リ直ニ其船ニテ他港ヘ廻漕スル時ハ其荷主更ニ其手數ヲナセハ船中「其ビル、ヲフ、レーヂンク」アルヘシ之ヲ船司ニ乞ヒ一見實否ヲ證スヘク若シ又本船出港手數ノ際迄モ事故アリテカ或ハ怠慢ニテ荷主ノ船卸シノ手續ヲモ篤ト心付置クヘシ

第八則

中監吏內卸シ免狀ヲ以テ卸荷取扱セシハ其監吏ノ手簿ト本免狀トヲ照應差較シテ殘數ヲ記シ翌日之ヲ其船乘勤ノ監吏ニ附授スヘク又船積品內積ヲ取扱ヒシモ同上ノ如クスヘシ

第九則

船移荷物ハ卸セシ甲船監吏ノ手簿トヲ照應シテ移荷ノ濟否及ヒ違同ヲ校スヘシ

第十則

哨船及ヒ通船等常ニ注意シテ小破ノ內修理ヲ加ヘ且船具ノ散セサル樣水夫ヲ指揮督責スヘシ

中監吏

第十一則

天保山支局ニハ每日晝夜三員宛（時ニ依リ四員トナス）在テ商船ノ入港ヲ哨望シ密商脫稅ヲ看破防遏スヘク其內一名ハ間斷ナク時間ヲ尅ミ海上ヲ視察シ諸碇泊船ノ近傍ヲ巡回シ其動靜等遺漏ナク注意スヘク最モ船積免許ノ塲處外ヨリ積來ル諸品ハ勿論漕來ル船或ハ夜中或ハ入港手數前及ヒ出港手數後ニ船卸ノ荷物等總テ怪ムヘキ景況ヲ見認アレハ詳細ニ之ヲ尋問シ其荷物ハ船ト共ニ之ヲ天保山支局ニ留置キ速ニ其旨ヲ課長ニ報スヘシ

第十二則

鄰船ニハ晝夜兩員宛同會社ノ倉船ニハ晝夜一員宛其他港內ノ碇泊諸船ニモ日出三十分前ヨリ日沒ノ時迄一員宛必ス乘船シ荷物積在ノ場所及ヒ其箇數幷商物船用品ノ區別等ヲ概視豫算シ密商脫稅ハ勿論諸荷物揚卸ニ專ラ注意監視スヘク其行作タルヤ身ハ常ニ甲板上ニ在テ体裁ヲ正シクシ耳目ヲ配リ彼ノ障碍ヲナサス又猥リニ談話等ヲナシ彼カ監視ヲ招サル樣心ヲ用ユヘシ

第十三則

乘勤中卸荷ハ陸揚免狀ニ照シ之ヲ卸サシメ且其旨ト艀ノ號數ヲ手簿ニ筆記シ皆卸ノ上免狀ニ見屆ノ證印ヲナスヘク若シ右品多數或ハ船積ノ都合ニテ其日內ニ卸シカタキハ內卸免狀ヲ附與シテ本免狀ハ手簿ト共ニ之ヲ天保山支局ニ差出スヘク又船積品モ同上ノ如シト雖トモ內積品ハ其內積免狀ヲ荷主ニ附與セサルナリ

第十四則

監吏乘船中現ニ無免狀ニテ荷物船卸ヲ爲ントスル者アラハ一應懲切ニ規則ノ次第ヲ示諭スヘシ若示諭ヲモ聽カス擅ニ船卸シ之ヲ支留スル能ハサルトキハ巡廻監吏或ハ艀船ノ水夫ヲ以テカ又ハ自ラ其旨ヲ速ニ天保山支局或ハ直ニ本課ニ報知スヘシ

第十五則

荷物船卸ニ付テハ運賃積ノ物カ或ハ船客ノ提携品カヲ詳ニ辨知シ免狀ノ有無ヲモ區別スヘシ假令提携品ハ其實商物タリトモ保護ハ船客ノ自任ナレハ上陸シテ免狀ヲ受ケ來ルコト能ハス是ニ反シ運賃積ノ品ハ其實僅ノ見本タリトモ積荷目錄ニ揭載アレハ免狀ヲ受ケ得テ後船卸スルハ當然タリ

第十六則

各船ノ艙口ヲ開鎖スルハ監船監吏ノ課タリ之ヲ鎖封スルニ及ハス出前ニ於テスヘシ尤空艙ハ鎖封スルニ及ハス

第十七則

船中異狀或ハ天保山支局ヘ報知スヘキ急事アラハ呼子笛ヲ以テ巡廻監吏ニ暗號シ其船ヲ呼フヘシ巡廻監吏モ右暗號ヲ聞カハ速ニ本船ニ至リ其事ヲ辨スヘシ

第十八則

安治川監所ニハ每日晝夜二人宛在テ神阪兩港ノ間運送スル外國人ノ荷物及ヒ碇泊ノ商船（或ハ商船ヨリ積卸スル貨物ヲ改メ密商漏稅ヲ看破防遏スヘク若シ其貨物ニ附屬スル免狀ナキカ或ハ怪ムヘキ事由アルハ詳細ニ之ヲ尋問シ輸出品ハ其監所ニ留置キ輸入品ハ直ニ稅關ニ屆ケ共ニ其旨ヲ課長ニ報スヘシ

第十九則

艀ヲ以テ運搬スル輸出入ノ貨物ハ其箇數記號等免狀ニ照應檢閱シ違却ナケレハ免狀ハ式ニ倣ヒ裏書ノ上荷主ニ附與シ晝夜共通船差許スヘシ

第二十則

艀ヲ以テ運搬スル輸出ノ貨物既ニ積出シノ後事故アリテ之ヲ積戻ス時ハ其免狀ノ裏書ヲ消シ通船ヲ許シ且其旨ヲ本課ニ報スヘシ若シ風波ヲ避ル爲メ一時積戻ス者ハ其免狀ノ裏印ヲ消シ追テ積出ストキ更ニ檢印ノ上通船ヲ許スヘシ

小監吏

第貳拾壹則

稅關前波止場ヨリ居留地川岸梅本町迄立番巡廻位置三箇所ヲ設ク左ノ如シ

立番位地	巡廻區部
第一號	立番傳信局脇ヨリ本課西地境迄
第二號	立番本課西地境ヨリ元長州濱西迄
第三號	巡廻梅本町隅五番館前波止場ヨリ初メ居留地川岸古川筋ヨリ及ヒ梅本町竹林寺迄

第貳拾貳則

各號ヲ二名宛ニテ隔日宿直警衛シ每朝第九時ニ總員交換シ配布所ノ交換ハ晝夜共二時ヲ以テスヘシ

第貳拾三則

第一號ヨリ第三號マテ巡廻立番各自ノ區部ヲ巡廻注意シ密商脫稅ヲ防遏スルハ勿論稅關（壹番貳番）ノ波止場ヨリ船積引取ノ荷物ハ稅關手數濟ノ有無ヲ監視シ且川蒸滊船艀船ノ輻輳舟路ノ壅塞等ヲモ指

第貳拾四則

假令隣タリトモ事件差生セシトキハ速ニ之ニ協力スヘク且職務上ノ義ニ付隣號ニ通知ヲ要スルトキハ速ニ之ヲ通知シ再ヒ其位置ニ復スヘク若シ故ナクシテ私ニ其位地ヲ轉離スル者ハ相當ノ謝怠ニ處スヘシ

第貳拾五則

若巡査ノ在ラサル處ニテ賊徒ヲ取押タル時ハ所持ノ贓物ヲ添ヘ速ニ巡回ノ巡査ニ引渡シ其旨ヲ課長ニ報スヘシ

第貳拾六則

監吏ヲ拜命セハ先第一ニ監吏課章程及ヒ心得書幷有稅無稅禁制品ノ類別ヲ諳誦シ且各國條約書稅關慣行法書ヲモ熟讀通了スヘシ

第貳拾七則

奸主密商脫稅ヲ謀ルハ畢竟監吏職務上怠惰アルヲ窺ヒ機ニ投シ其利ヲ得ントスルナレハ監吏ニ於テ最モ恥辱トスヘシ故ニ密商脫稅ヲ發覺スルヨリモ奸主ヲシテ其欺詐ヲ施スニ隙ナカラシムル樣平常勉勵アランヲ要ス

第貳拾八則

密商脫稅ヲ看破セルトキハ穩ニ規則違背セシ箇條ヲ好主ニ諭シ其品ヲ取押ユヘシ若シ奸主說諭ヲ聽カス擅ニ品物ヲ持去ントシ不得已力ヲ以テ之ヲ制スルアルトモ其品物ノミ取押ヘ決テ之カ爲ニ奸主ノ身体ニ手ヲ觸レ或ハ拘留スル等ノコトアルヘカラス

第貳拾九則

在港ノ船舶火災或ハ困難等アルトキハ休憩ノ中少監吏各力ヲ盡シテ之ヲ救助スヘシ若シ荷物ノ流失スルヲ見當ラハ本課ニ送致シ其仔細ヲ課長ニ報スヘシ

第三拾則

監船當直海上巡廻及各號位地ヘ出務中ハ殊ニ禮節ヲ重ンスヘキハ勿論喫烟讀書及ヒ猥ニ人々ト談話スルヲ禁ス

第三十一則

在船中船司或ハ士官等ニ自然親昵ニ及フトモ品物商品及ヒ贈品ヲ受ル等ハ堅ク之ヲ禁ス若シ所持品彼ヨリ乞出ツル時ハ其譯課長ニ報シ指揮ヲ受クヘシ

第三十二則

出務中必ス他人ト談話ヲ禁スルト雖トモ職務上ノ事ヲ尋ヌルトキハ懇切ニ說諭敎示スヘシ

第三十三則

出務中睡眠ヲナスニ於テハ是非ヲ問ハス謝怠ニ處スヘシ

第三十四則

監吏巡廻立番共交代ノ都度々々吏長机上ノ桁箱ニテ自己ノ名牌ヲ揚卸スヘシ

第三十五則

歸課ノ節ハ出務中異狀ノ有無ヲ課長ニ告白シ且事務ノ明細ヲ日誌ニ記載スヘシ

第三十六則

監船巡回及ヒ立番ノ者明番ノ日ハ交替ノ後必ス本課ニ來リ交代前後別條ナキヤ否ヤ届ノ上退散スヘシ各所ヨリ直ニ退散スルヲ禁ス

第三十七則

出務中ハ勿論休憩中戶外ニ出レハ必ス帽ヲ戴クヘシ亦ヅボンノ隱ニ手ヲ差入ルヘカラス

第三十八則

休憩中ハ喫烟讀書談話スルヲ許シタリト雖モ高聲ニテ讀書シ或ハ無益ノ雜談ニ時間ヲ費シ或ハ戶外ニ出テ恣ニ吹烟シ又時ナラスシテ飮食スル等ヲ禁ス唯言行ヲ愼ミ他局ノ誹謗ヲ受ケサル樣各廉耻ヲ主トシ以テ奉職スヘシ

第三十九則

課中ハ常ニ淸潔ニ爲サヽレハ健康ヲ害シ且体裁ヲ失フ故ニ監吏休憩中專ラ之ニ注意シ室中ノ醜態ヲ露サヽルヲ要ス

第四十則

當直中病氣或ハ不得止事故アリテ同伍ノ者ヘ一時賴合セヲ爲スハ不苦ト雖モ前以テ吏長ヘ届置クヘシ尤モ急病等ハ此例ニアラス

第四十一則

失火其他非常ノ節ハ總員出課スヘシ

第四十二則

每朝出勤退關ノ途中下駄傘ハ勿論自服着用スルヲ禁ス

第四十三則

每朝出局ノ時限ヲ遲延ノ者ハ謝怠ニ處スヘシ

第四十四則

病災等ニテ出務ナシ難キトキハ前夜其事故ヲ課長ニ報スヘシ若當日卒然病發スルトキハ其趣旨速ニ課長ニ報スヘシ其報出局定時限ヨリ遲延ニ及フコト一時ニ至ルモノハ快愈ノ上謝怠ニ處スヘシ

第四十五則

中少監吏病氣ニテ缺勤スルトキハ大監吏臨時宿所ニ到リ狀態檢閱ノ上其當然ヲ筆記シ課長ニ報スヘシ

第四十六則

病氣ニテ缺勤三日ヲ過ルトキハ病院診察書ヲ課長ニ出スヘシ

第四十七則

病氣ニテ缺勤スルトキハ左目ノ如ク償金ヲ出スヘシ此金ハ補務ノ輩ニ配與スヘシ

三日以內　一日　金貳拾錢　十日以內　一日　金拾錢　十一日以外　一日　金五錢

第四十八則

課中貯備トシテ左ノ金額ヲ月給ノ內ヨリ積置クヘシ

大監吏　一ケ月　貳圓　中監吏　一ケ月　壹圓五拾錢　小監吏　一ケ月　壹圓

第四十九則

右貯備金ハ手簿ヲ製シ之ヲ揭載シテ各自ニ判然タラシムヘシ

第五十則

監吏轉職スルトキカ或ハ事故アリテ免役スル時ハ右積置ノ金ニ相當ノ利息ヲ加ヘ渡スヘシ

右監吏心得書確定スル者也各自夫レ之ヲ遵守シ敢テ違背スルコト勿レ

明治八年　月

然るに明治十年五月職制の改正によりて監吏課を監視課と改稱するに及び先きの監吏心得書を監吏補心得書と題して更に增補改定する處あり

今般監吏補心得書別冊ノ通制定致候條遵行可被致尤內國船ヘ對シ取扱向ノ義ハ追テ相達候迄從前ノ通可被相心得此段相達候事

明治十年七月廿六日

別冊

大阪稅關　長岡義之

本課詰

第一則

當務者ハ常ニ本課ト天保山詰所ニ在テ商船入出港ノ哨望艙口封緘ノ立會海上陸地ノ巡廻休憩監吏補ノ取締等ヲ主トルヘシ

第二則

每日出課ノ交代ハ朝第九時ヲ以テ定期トス

第三則

商船（外國航海ノ船ヲ云フ以下之ニ倣フ）ノ入出港ヲ認メハ直ニ之ヲ監吏ニ通報シ當直ノ者尋問監吏ニ隨從其船ニ到リ艙口ノ箇數積荷ノ有無等ヲ見質シ夜中ナラハ直ニ其艙口ニ封緘ヲ施スヘシ

第四則

商船艙口ノ開鎖ニハ必ス之ニ臨監スヘシ其要タルヤ萬一破封等ノ事アルニ際シ之カ證ヲ擧クルノ爲ナレハ每ニ其封緘ニ粗漏ナキカ或ハ安全ナルヤノコトニ意ヲ注キ若シ破封シタル時ハ其事由ヲ詳細ニ質スヘシ

第五則

海陸時ヲ尅シ間斷ナク巡廻シテ其勤務者監視ノ及ハサル所ヲ補充スヘシ故ニ其心得方ハ海陸勤務ノ條ニ就テ知ルヘシ

第六則

海陸勤務者ノ休憩中非儀喧噪或ハ心得違ノ輩ナカラン樣兼テ之ヲ忠告シ且之ヲ說諭シ同僚ヲ相和熟セシムヘシ若シ力及ハサルモノハ其旨監吏ニ告白シ又監吏ヨリ其見聞ノ仔細ヲ尋問スルニ當ラハ其實ヲ以テ之ニ報告スヘシ

第七則

哨船及ヒ通船等ハ常ニ注意シテ修理ヲ加フヘキモノハ監吏ニ報シ且船具ノ散セサル其取扱ノ暴ナラサル樣水夫ヲ指揮督責スヘシ

第八則

商船ニ畜類ヲ蒙養スルアラハ之ヲシテ封緘ヲ破却セシメサル樣注意スヘキ旨初日封緘ノ際ニ當リ其船司ニ通告シ置クヘシ

海上勤務

第一則

勤務者ハ各商船ニ乘組ミ章程第一條ノ件々ヲ監視禁遏スルノ事ヲ主トルヘシ

第二則

商船ニハ日出三十分前ヨリ日沒ノ時迄其事務ノ繁閑ニ依リ一員若クハ二員乘勤スヘキ故ニ朝第九時ノ交代ヲ以テ常ニ天保山詰所迄出課シ其配布ニ就クヲ定期トス

第三則

船中荷物積在ノ場所及ヒ其箇數幷商物船用品ノ區別等ヲ概視豫算シ諸荷物揚卸ヲ監視スヘキハ勿論密ニ陸揚センカ爲メ船中艙外ニ隱匿セル荷物或ハ無許ニテ密ニ船積セシ品ノ有無ヲモ專ラ注意スヘシ

第四則

卸シ荷ハ陸揚免狀ニ照シ之ヲ卸サシメ且其旨ト艀ノ號數ヲ手簿ニ筆記シ皆卸ノ上免狀ニ見屆ケノ證印ヲナシ其貨主ヘ返付スヘシ若シ右品多數カ或ハ最前積込ノ都合ニテ其日內ニ卸シ難キモノハ更ニ內卸シ免狀ヲ附與シテ本免狀ハ手簿ト共ニ之ヲ本課ニ差出スヘキ又船積品モ同上手續ノ如シト雖モ皆積幷內積共其免狀ヲ荷主ニ附與セサルナリ

第五則

積卸免狀中記號箇數等實物ニ符合セサルモノハ免狀書載ノ誤謬ナルヤ否ヤヲ精覈ニ穿鑿スヘシ若我筆者ノ誤謬セシ證アルモノハ其事ヲ取扱置キ然シテ之ヲ本課ニ報スヘシ我誤謬ノ故ヲ以テ貨主ヲシテ其害ヲ蒙ラシムルナカランヲ要ス

第六則

現ニ無免狀ニテ荷物船卸ヲ爲ノトスル者アラハ一應懲切ニ規則ノ次第ヲ示諭スヘシ若示諭ヲモ聽カス擅ニ船卸シ之ヲ支留スル能サルトキハ巡廻ノ者或ハ艀船ノ水夫ヲ以テカ又ハ時機ニ依リ自ラ其旨ヲ速ニ本課ヘ報知スヘシ

第七則

荷物船卸ニ付テハ運賃積ノ物カ或ハ船客ノ提携セル品カヲ詳ニ辨知シ其免狀ノ附貳スルヤ否ヤヲ區別スヘシ假令提携品ハ其實商物タリトモ保護ハ其船客ノ自任ナレハ上陸シテ免狀ヲ請ケ更ニ來ルコト能ハス是ニ反シ運賃積ノ品ハ其實僅カノ見本タリトモ積荷目錄ニ揭載アレハ免狀請ケ得テ後船卸スルハ當然タリ

第八則

漂流或ハ困難ニ遇フ船若求ムルコトアラハ課長ノ指圖ヲ受ケ成ヘク懲切ニ取扱遣スヘシ

第九則

條約未濟國ノ船ナレハ貨物ハ勿論船司ヲ始メ乘組人其他船客ノ物タリトモ課長ノ指圖ナクシテ必ス船ヨリ卸スヘカラス

第十則

船中ニ人或ハ禽獸類ノ傳染病ニ罹ルモノアルトキハ檢官來船ノ上課長ヨリ指圖ヲナス迄ハ一切其病ニ關スル人或ハ禽獸ノ出入ヲ嚴禁スヘシ

第十一則

多量ノ火藥爆發品ヲ搭積セルモノハ他ノ船舶ノ災害ニ罹ラサル樣篤ク注意スヘシ

第十二則

各船ノ艙口ヲ開鎖スルハ當務者ノ課タリ之ヲ鎖封スルハ必ス日出前ニ於テスヘシ尤モ空艙ハ鎖封スルニ及ハスト雖モ更ニ荷物積入ルヽトキハ艙內精査ノ上之ヲ爲サシムヘシ

第十三則

船艙ノ封緘ハ元來夜中輸出入ノ荷物ヲ密ニ積卸ナサシメサル爲メ之ヲ施スモノナレハ開艙ニ臨ミ豫シメ輸入荷物積在ノ位置ヲ審カニ記臆シ鎖封ノ時ニ至リ其日陸揚ノ荷物ヲ暗算シ其位置變換ノ形態ヲ察シ曾テ卸サヽル荷物ノ目前ニ不在ノモノアレハ其所以ヲ質シ其轉移セルトコロヲ檢スヘシ且艙外ニ荷物ノアルアレハ其處ニ就キ封印ヲ檢スヘシ然レトモ若シ居室或ハ人々出入頻繁ノ處ニシテ鎖封スヘカラサレハ之ヲ艙裡ニ搬ハシメ然シテ後封印ヲ施スヘシ

第十四則

船中異狀或ハ本課ニ報知スヘキ急事アラハ呼子笛ヲ以テ巡廻者ニ暗號シ其船ヲ呼フヘシ

陸上勤務

當務者ハ川筋左ノ貳區ノ地ニ配布シ監守ヲ主トルヘシ

第一號

本關前波止場東詰ヨリ元長州濱西詰迄

第二號

各號ヲ四名宛ニテ隔日ニ宿直勤番シ每朝第九時ニ總員交代スヘシ監所ノ交代ハ晝夜共二時間ヲ以テ定期トス

梅本町元關五番館前波止場ヲ始メ居留地川岸古川筋ヨリ及梅本町竹林寺迄

第三則

第壹號第貳號共各自配布ノ監所ヲ巡廻注意シ章程第一條ノ件々ヲ禁遏スルハ勿論波止場上ヨリ船積引取リノ荷物ハ稅關手數濟ノ有無ヲ監視スヘシ

第四則

假令隣號タリトモ事件差生セシトキハ速ニ之ニ協力スヘク且職務上ノ義ニ付隣號ニ通知ヲ要スルトキハ速ニ之ヲ通知シ再ヒ其位地ニ復スヘク故ナクシテ私ニ其位地ヲ轉離スルヲ許サス

第五則

監所交代ノトキハ其都度ニ本課机上ノ桁箱ニテ自己ノ名牌ヲ揚卸シ且手簿ヲ請取出務スヘシ

第六則

歸課ノ節ハ出務中筆記ノ手簿ヲ當直監吏ニ差出シ且異狀ノ有無ヲモ告白スヘシ

第七則

監所出務中若シ巡查ノ在ラサル處ニテ賊徒ヲ取押ヘタルトキハ所持ノ贓物ヲ添ヘ速ニ巡廻ノ巡查ニ引渡シ歸課ノ上其旨ヲ當直監吏ニ報スヘシ

第八則

監所ニ在テ本課ヘ通知スヘキ件ノ歸課迄難攔モノアラハ巡廻者ニ依託シ通報スヘシ然レトモ之ヲ得サルトキハ稅關中ノ誰レニ寄リ之ヲ本課ニ通スルモ妨ナシ

第九則

波止場上塵芥ノ積堆アラハ仕役ノ仲仕ニ指圖シ之ヲ掃除セシメ又ハ荷役ニ用ナキ或ハ所用ヲ果セシ船等波止場岸ニ繫維シ荷役若クハ船客昇降ノ障碍ヲナスモノハ之ヲ除去セシムヘシ

雜則

第一則

監吏補ヲ拜命セハ必ス先ツ監視課章程及ヒ心得書並有稅無稅禁制品ノ類別ヲ諳誦シ且各國條約書稅關慣行法書港則ヲモ熟讀通了スヘシ

第二則

章程第一條ニ揭載ノ如ク監視ノ要ハ密商脫稅ヲ謀ル者或ハ之ニ關スル條約ノ明條ヲ違犯スルモノ幷ニ稅關ノ成規及ヒ慣法ニ抵觸スル者ヲ監視禁遏スルニ在レハ其取締ハ不正者ノ爲ナルヲ以テ豫メ正者ト不正者トヲ鑑別シ勉メテ貿易ノ障碍ヲ來ス勿レ

第三則

奸主密商脫稅ヲ謀ルハ畢竟海陸監守者ノ職務上怠惰アルヲ窺ヒ機ニ投シ其利ヲ得ントスルモノナレハ監吏補ニ於テ最モ恥辱トスヘシ故ニ密商脫稅ヲ發覺スルヨリモ奸主ヲシテ其欺詐ヲ施スニ隙ナカラシムル樣平常勉勵アランヲ要ス

第四則

密商脫稅ヲ看破セシトキハ穩ニ規則ニ違背セシ箇條ヲ奸主ニ諭シ其品ヲ取押ユヘシ若奸主說諭ヲ聽カス壇ニ品物ヲ持去ントシ不得已力ヲ以テ之ヲ制スルコトアルトモ其品物ノミ取押ヘ決テ之カ爲メニ手ヲ奸主ノ身体ニ觸レ或ハ之ヲ拘留スル等ノコトアルヘカラス

第五則

在港ノ船舶ニ火災或ハ困難等アルトキハ休憩ノ監吏補ハ各力ヲ盡シテ之ヲ救助スヘシ若シ荷物ノ流失スルヲ見當ラハ本課ニ送致シ其仔細ヲ課長ニ報スヘシ

第六則

監所ヘ出勤中ハ殊ニ禮儀ヲ重ンスヘキハ勿論喫烟讀書及ヒ猥リニ人ト談話スルヲ許サス尤モ職務上ノ事故カ或ハ他ヨリ事ヲ尋ヌル時ハ懇切ニ說諭敎示スヘシ

第七則

乘船中船司或ハ士官等ニ自然親昵ニ及フトモ品物商品及贈品ヲ受ル等ハ堅ク之ヲ許サス若シ所持品彼ヨリ乞出ルトキハ其譯課長ニ報シ指揮ヲ受クヘシ

第八則

監所出務中ニ睡眠ヲナスハ勿論或ハ物陰ニ潛居シ監視ノ用ヲ虛フシ若クハ私用ヲ辨スル等ノコトヲ許サス

第九則

監吏補退散ノ時ハ必ス本課ニ來リ各自其取扱シ事蹟ヲ報告シ然シテ後ニ去ルヘシ各所ヨリ直ニ限散スルヲ許サス

第拾則

出務中ハ勿論休憩中ト雖モ戶外ニ出ツルニ帽ヲ戴カス或ハ袴ノ隱ニ手ヲ挿入ル、如キ非儀ヲナスヘカラス

第拾一則

休憩中ハ喫烟讀書談話スル事妨ナシト雖モ高聲ニテ讀書シ或ハ猥談ヲ爲シ或ハ戸外ニ出テ恣ニ吹烟シ又時ナラスシテ飲食スル等ヲ許サス唯言行ヲ愼ミ他口ノ誹謗ヲ受ケサル樣各廉恥ヲ重ンシ以テ奉職スヘシ

第拾二則

課中ハ常ニ清潔ニ爲サヽレハ健康ヲ害シ且体裁ヲ失フ故ニ監吏補休憩中專ラ之ニ注意シ室中ノ醜態ヲ露サヽルヲ要ス

第拾三則

在課中病氣或ハ不得止事故アリテ仝伍ノ者ヘ一時賴合ヲ要スルトキハ前以テ本課ヘ屆出テ其事ヲ爲スヘシ

第拾四則

失火其他非常ノ節ハ總員出課スヘシ

第拾五則

毎朝出勤退關ノ途中下駄傘ハ勿論褻服ヲ着スルヲ許サス

第拾六則

毎朝出課ノ時限ヲ遲延スルヲ許サス若シ疾病災害等ニテ出務ナシ難キ時ハ前夜其事故ヲ課長ニ報スヘシ若シ當日卒然病發スルトキハ其趣旨ヲ速ニ課長ニ報スヘシ其報ハ必ス出課定時限ヨリ後一時內ヲ怠ルヘカラス

第拾七則

監吏補病氣ニテ欠勤スル時ハ監吏臨時ニ其宿所ニ至リ狀態檢閲スルコトアルヘシ

第拾八則

病氣ニテ欠勤三日ヲ過ルモノハ病院診斷書ヲ課長ヘ差出スヘシ尤猶欠勤ノ時ハ一週間毎ニ其容体書ヲ差出スヘシ

第拾九則

病氣或ハ事故アリテ欠勤ノ者ノ償金ハ等級ニ應シ平均ノ割ヲ以テ之ヲ毎月末ニ精勤者ニ配與スヘシ

第貳拾則

病氣全快シテ出務セラルヽニ際セハ前以テ其旨本課ヘ屆出ヘシ

第貳拾壹則

公務中ハ制服沓靴ノ外他ノ衣類履物ヲ着スルヲ許サス

第貳拾貳則

制服ハ公事ニ關シ事情不得止ヨリ毀傷スル分ハ檢査ノ上換與スルコトアルヘシト雖モ己ノ懶惰ヨリシテ之ヲ生スルモノハ自費ヲ以テ修補スルハ勿論常ニ汚垢ノ洗濯等ハ自辨タルヘシ

附錄

入港商船ノ尋問幷其取扱ノ要領

入港ノ商船ニハ當直監吏直ニ尋問簿ヲ携ヘ其船ニ至リ該船司ニ面接シ其國名船號噸數及ヒ船司之姓名乘組ノ人員幷船客ノ個數積入ノ貨物出帆ノ地名其日月船中諸般ノ事故等詳細ニ尋問シ且堅固狀ノ有無ヲ糺シ之ヲ右ノ簿冊ニ記載シ其心得書ヲ附與シ(初テ入港船ノミニ限ル)終テ本課ニ歸リ其簿冊ノ旨ヲ第一號ノ書式ニ挿記シテ各課ニ回報シ本課ノ木牌ニモ之ヲ掲示ス

捺印掛ヨリ其船入港ノ手數濟ノ報知セハ直ニ水夫頭取ヲシテ該船ニ番數ノ標札(番數ハ一週季毎ニ之ヲ更ム)ヲ掲ケシメ又同掛ヨリ出港手數濟ノ報知セルトキハ同人ヲシテ右標札ヲ取除ク

商船積荷取扱ノ要領

積荷ハ目錄掛ヨリ回報ノ總數ト其船乘勤者ノ手簿トヲ照應シテ毎日卸荷ノ高ヲ較計シ凡九分方卸濟ニ至レハ其殘餘ト本船實荷ノ違同ヲ校シ全數卸濟ノトキハ第五號書式ヲ以テ其旨ヲ目錄科ニ報告ス尤當港ニ陸上ケスヘキ荷物若シ荷主ノ都合ニ因リ直ニ其船ニテ他港ヘ回漕スルトキハ其荷主更ニ其手數ヲナセハ船中ニ其「ビル、ヲブ、レーヂング」アル故ニ之ヲ船司ニ乞ヒ一見實否ヲ証シ若シ又本船出港手數ノ際迄モ事故アリテカ或ハ怠惰ニテ荷主ノ船卸セサル荷物アレハ其仔細ヲ訊問且船司ニテ船卸シノ手續ヲモ篤ト心付置コトヽス

船中ノ現貨積荷目錄ト符合セス其數欠虧セルトキハ詳カニ其事由ヲ質シ若シ運漕中損傷セルモノハ必ス其破片査滓ヲ撿シ或ハ其損傷貨物ニ付船司之カ償却ヲ爲セシノ證書ヲ觀其欠虧ノ根因ヲ探ルモノトス若シ現貨ハ已ニ他港ニ陸揚セシヲ誤テ目錄中ニ記載セシトノモノナレハ其貨主ノ姓名及ヒ引渡日等聞取リ船司ノ簿冊ニ就テ其信否ヲ明ニス總テ貨物本船積載ノ際ハ監視課ノ擔責ナレハ其過剩欠損共ニ之ヲ注意シ其事ノ情狀ヲ明知スルハ言ヲ竢ス

內卸シ免狀ヲ以テ卸荷取扱シモノハ其監吏補ノ手簿ト本免狀トヲ照應差較シテ殘數ヲ記シ翌日其船ノ乘勤者ヘ之ヲ附授スルモノトス其船積品ノ內積取扱セシモノモ仝上ノ如クナリ

船移ノ荷物ハ卸セシ甲船ノ監吏補手簿ト積シ乙船ノ監吏補手簿トヲ照應シテ移荷ノ濟否及ヒ其違同ヲ校スルモノトス通船及艀船ハ無號旗ニテ營業相成ラサル大阪府ノ規タリ故ニ之ニ違フ者ハ仝縣ニ通知スルモノトス

爾來此監吏補心得書は監視事務の金科玉條として遵奉せられたるも降而明治十九年一月稅關監視課職制幷に章程の廢止と共に更に監吏、監吏補心得書と題して左の如く改定したり

大阪稅關監吏補心得書

第壹章　總則

第一條　監吏、監吏補ハ內外人民ノ密商脫稅ヲ謀ル者或ハ謀ラントスルモノ或ハ之ニ關スル條約ノ明條ヲ犯スモノ幷ニ稅關ノ成規慣行法ニ抵觸スルモノヲ監視禁遏スルノ職務ナレハ茲ニ之ヲ實踐スルニ就テノ心得書ヲ制定シ事務履行上ノ心得ヲ指示シ宜ク熟讀復誦各自其盡スヘキ所ニ通曉シ以テ事務ヲ擔當スヘシ

第二條　稅關ハ輸出入貨物ノ稅金ヲ徵收スル所ニシテ監視課ハ即チ其一分科ナリ故ニ苟モ此ニ奉職スルモノハ先ツ貿易章程新定稅目慣行方法港則等ノ諸例規ニ通曉シ各其責任ヲ一身ニ負担シ勉メテ精密ニ警監スヘシ決シテ粗漏緩慢ノ所置アルヘカラス

第三條　入港ノ商船ニハ當直監吏直ニ尋問簿ヲ携ヘ其船ニ到リ該船司ニ面接シ其國名船號噸數及ヒ船司ノ姓名乘組ノ人員幷船客ノ個數積入ノ貨物出帆ノ地名其日月船中諸般ノ事故等詳細ニ尋問シ且堅固狀ノ有無ヲ糺シ之ヲ右ノ簿冊ニ記載シ其心得書ヲ附與シ（初度入港ノ船ニ限ル）終テ本科ニ歸リ其簿冊ノ旨ヲ第一號ノ書式ニ挿記シテ各科ニ回報シ本科ノ本牌ニモ之ヲ揭示ス

第四條　捺印掛ヨリ其船入港ノ手數濟ノ報知アラハ直ニ水夫頭取ヲシテ該船ニ番數ノ標札（番數ハ一週季毎ニ之ヲ更ム）ヲ揭ケシメ又同掛ヨリ出港手數濟ノ報知アラハ同人ヲシテ右標札ヲ取除カシムヘシ

第五條　積荷は目錄掛ヨリ回報ノ總數ト其乘勤者ノ手簿トヲ照應シテ毎日卸荷ノ高ヲ較計シ凡九分方卸濟ニ至レハ其殘數ト本船實荷ノ異同ヲ校シ全數卸濟ノトキハ第五號ノ書式ヲ以テ其旨ヲ目錄掛ニ報告ス尤モ當港ニ陸揚スヘキ荷物若シ荷主ノ都合ニヨリ直ニ其船ニテ他港ヘ回漕スルトキハ其荷主更ニ其手數ヲナセハ船中ニ其「ビル、オブ、レージクン」アル故之ヲ船司ニ乞ヒ一見實否ヲ證シ若シ又本船出港手數ノ際迄モ事故アリテカ或ハ怠慢ニテ荷主ノ船卸セサル荷物アレ

ハ其仔細ヲ訊問且船司ニテ船卸ノ手續ヲモ篤ト心付置クヘシ

第六條　船中ノ現貨積荷目錄ト符合セス其數缺虧スルトキハ詳ニ其事由ヲ質シ若シ運漕中損傷セルモノハ必ス其破片査滓ヲ檢シ或ハ其損傷貨物ニ付船司之カ償却ヲ爲セシノ證書ヲ見其缺虧ノ根因ヲ探ルヘシ若シ現貨ハ已ニ他港ニ陸揚セシヲ誤テ目錄中ニ記載セシトノモノナレハ其貨主ノ姓名及ヒ引渡日等聞取リ船司ノ簿冊ニ就テ其信否ヲ明ニスヘシ總テ貨物本船積載ノ際ハ監視科ノ擔責ナレハ其過剩缺損共ニ之ヲ注意シ其事ノ情狀ヲ明知スルハ言ヲ俟タス

第七條　內卸免狀ヲ以テ卸荷取扱ヒシモノハ其監吏補ノ手簿ト本免狀トヲ照應差較シテ殘數ヲ記シ翌日其船ノ乘勤者ヘ之ヲ附授スヘシ其船積品ノ內積取扱セシモノモ同上ノ如シ

第八條　船卸ノ荷物ハ卸セシ甲船ノ監吏補ノ手簿ト積シ乙船ノ監吏補ノ手簿トヲ照應シテ移荷ノ濟否及其異同ヲ校スヘシ

第九條　通船及艀船ハ無號旗ニテ營業相成ラサル大阪府ノ規則タリ故ニ之ヲ違フ者ヲ認メハ本科ニ報告スヘシ

第十條　監吏補ハ筐中ノ品ヲ檢閱スルノ權ヲ有セスト雖モ奸詐ヲ發覺スルニ當リ若シ其品ヲ知ラサレハ押止ミ難キ場合ニ於テハ時機ニ應シ之ヲ檢閱スルヲ得ヘシ然レトモ踈暴ノ所爲ナキハ勿論濫リニ檢閱スル等ノ事アルヘカラス

第十一條　好者密商脫稅ヲ謀ルハ畢竟海陸監者ノ職者上怠惰アルヲ窺ヒ機ニ投シ其利ヲ得ントスルモノナレハ監吏補ニ於テ最モ注意シ好者ヲシテ其欺許ヲ施スニ隙ナカラシムル樣平常勉勵スヘシ

第十二條　密商脫稅ヲ看破セシ時ハ隱ニ規則ニ違背セシ箇條ヲ好者ニ諭シ其品ヲ取押ユヘシ若シ好者說諭ヲ聽カス擅ニ品物ヲ持去ントシ不得止力ヲ以テ之ヲ制スルコトアルトモ其品物ノミ取押ヘ決シテ之カ爲メ手ヲ好者ノ身体ニ觸レ或ハ之ヲ拘留スル等ノコトアルヘカラス

但犯人該貨物ヲ自己或ハ他人ノ家屋等ニ搬入シタルヲ確認セハ其家ニ就キ案內ヲ乞ヒ荷主又ハ運搬人ニ面會シ同道シテ該品ヲ稅關ヘ持來ルヘキ旨ヲ懇切ニ諭スヘシ然レトモ聽從セサル場合ニ於テハ本手順ヲ以テ照會スヘキモノナレハ速ニ其旨ヲ監吏ニ申告スヘシ

第十三條　在港ノ船舶ニ火災或困難等アルトキハ休憩ノ監吏補ト各力ヲ盡シテ之ヲ救助ムヘシ若シ荷物ノ流失スルヲ見當ラハ之ヲ撈シテ本課ニ送致シ其仔細ヲ課長ニ報スヘシ

第十四條　監所ヘ出勤中ハ殊ニ禮儀ヲ重ンシ喫烟讀書及ヒ猥リニ人ト談話スルヲ許サス尤職務上ノ事故或ハ他ヨリ事ヲ尋スル時ハ懇切ニ說諭敎示スヘシ

第十五條　乘船中船司或ハ士官等ニ自然親昵ニ及フトモ品物商品及ヒ贈品ヲ受ル等ハ之ヲ許サス若シ所持品彼ヨリ乞出ル時ハ之ヲ課長ニ報シ指揮ヲ受クヘシ

第十六條　監所出務中ニ睡眠ヲ爲スハ勿論或ハ物蔭ニ潛居シ監視ノ用ヲ虛フシ若クハ私用ヲ辨スル等ノコトヲ禁ス

第十七條　監吏補退散ノ時ハ必ス本課ニ來リ各自其取扱シ事蹟ヲ報告シ然シテ後去ルヘシ各所ヨリ直ニ退散スルヲ許サス

第十八條　出務中ハ勿論休憩中ト雖モ戶外ニ出ルニ帽ヲ戴カス或ハ袴ノ隱シニ手ヲ挿入ル、如キ非儀ヲナスヘカラス

第十九條　休憩中ハ喫烟讀書談話スルコト妨ナシト雖モ高聲ニテ讀書シ或ハ猥談ヲ爲シ或ハ戶外ニ出テ恣ニ吹烟シ又ハ時ナラスシテ飮食スル等ヲ許サス唯言行ヲ愼ミ他人ノ誹謗ヲ受サル樣各廉恥ヲ重ンシ以テ奉職スヘシ

第二十條　課中ハ常ニ淸潔ニ爲サヽレハ健康ヲ害シ其體裁ヲ失フ故ニ監吏補休憩中專ラ之ニ注意

シ室中ノ醜態ヲ露サヽルヲ要ス

第二十一條　在課中病氣或ハ不得止事故アリテ同伍ノ者ヘ賴合ヲ要スル時ハ前以テ本課ヘ屆出其事ヲナスヘシ

第二十二條　失火其他非常ノ節ハ總員出科スヘシ

第二十三條　每朝出勤退關ノ途中下駄傘ハ勿論蓑服ヲ着スルヲ許サス

第二十四條　每朝出科ノ時限ヲ遲刻スルヲ許サス若シ疾病災害等出務ナシカタキ時ハ前夜其事故ヲ科長ニ報スヘシ若シ當日卒然病發ルトキハ其趣旨ヲ速ニ課長ニ報スヘシ其報ハ必ス出課定時限ヨリ後一時內ヲ怠ルヘカラス

第二十五條　監吏補病氣ニテ缺勤スルトキハ監吏臨時ニ其宿所ニ至リ狀態檢閱スルコトアルヘシ

第二十六條　病氣ニテ缺勤三日ヲ過クルモノハ病院診斷書ヲ課長ニ差出スヘシ尤猶缺勤ノ時ハ一週間每ニ其容體書ヲ差出スヘシ

第二十七條　監吏補ハ日課本務ノ定員ハ缺クヘカラサルヲ以テ若シ病氣或ハ事故アリテ其務ヲ缺クモノアラハ休憩ノ同僚ヲシテ代務セシメ其缺ヲ補ハシム故ニ缺勤者ヨリ左ノ金額ヲ徵シ以テ代務者ノ謝トス此代務料ハ成規ノ通每月末ニ精勤者ニ配與スヘシ

但事故アリテ俸給全額ヲ給セサルカ又ハ減額ノトキハ代務料ヲ徵セスト雖モ其減額ヲ追給スルニ至テハ更ニ之ヲ徵スヘシ

缺勤償金表

一等 二等	主稅監吏補	三日已下一日每　貳拾錢
三等 四等	主稅監吏補	四日以上一日每　拾五錢 十一日以上一日每　拾貳錢 三十一日以上一日每　拾八錢

第廿八條　病氣全快ンテ出務スヘキニ際セハ前以テ其旨本課ヘ屆出スヘシ

第廿九條　公務中ハ制服沓靴ノ外他ノ衣類履物ヲ着スルヲ許サス

第三十條　監吏補制服幷外套雨衣等ノ保存期限ハ一ヶ年トシテ總テ現品ヲ以テ給與シ若シ保存期限中轉免スルトキハ直ニ其現品ヲ返納スヘシ

但制服ハ公事ニ關シ事情不得止ヨリ毀傷スル分ハ檢査ノ上換與スルコトアルヘシト雖トモ已ノ懶惰ヨリシテ之ヲ生スルモノハ自費ヲ以テ修補スルハ勿論常ニ汚垢洗濯等ハ自辨タルヘシ

第二章　科長

第三十一條　總則第一條ニ遵依シ課中一切ノ事務ヲ管理スヘキヲ以テ其擔保ノ責任ヲ有ス故ニ奸詐ヲ看破スルニ當リ適宜ノ處分ヲ爲スヲ得ルモ若シ違犯者强暴ヲ行ヒ或ハ固ク非理ヲ執ルトキハ其身體ニ係ルカ又ハ其名譽ニ關スル如キハ直ニ之ヲ行フヲ得ス必ス指令ヲ請クヘシ

第三十二條　心得書及賞罰例ノ條件又ハ慣例ノ事務等實際施行上ニ就キ其當否及所見ヲ陳說スヘシ

第三十三條　當直監吏、監吏補以下ヲ督率指揮シ其陳述スル所ヲ取捨シ又監吏補ノ能否勤惰ヲ視察シテ之ヲ具申スヘシ

第三章　本課詰監吏補

第三十四條　當務者ハ常ニ本課ト天保山詰所ニ在テ商船入出港ノ哨望封緘ノ立會海上陸地ノ巡廻休憩監吏課ノ取締等ヲ主トルヘシ

第七篇　關稅警察　警察事務

第三十五條　每日出課ノ交代ハ朝第九時ヲ以テ定期トス

第三十六條　商船（外國航海ノ船ヲ云フ下之ニ倣フ）ノ入出港ヲ認メハ直ニ之ヲ監吏ニ通報シ當直ノ者尋問監吏ニ隨從其船ニ至リ艙口ノ個數積荷ノ有無等ヲ見質シ夜中ナラハ直ニ其艙口ニ封緘ヲ施スヘシ

第三十七條　商船艙口ノ開鎖ニハ必ス之ニ臨檢スヘシ其要タルヤ萬一破封等ノ事アルニ際シ之カ證ヲ擧クルノ爲ナレハ每ニ其封緘ニ粗漏ナキカ或ハ安全ナルヤノコトニ意ヲ注キ若シ破封シアルトキハ其事由ヲ詳細ニ質スヘシ

第三十八條　海陸時ヲ尅ミ間斷ナク巡廻シテ其勤務者監視ノ及ハサル所ヲ補充スヘシ其心得方ハ海陸勤務ノ條ニ就テ知ルヘシ

第三十九條　海陸勤務ノ休憩中非義喧噪或ハ心得違ノ輩ナカラン樣兼テ忠告シ且之ヲ說諭シ全僚ヲ相知熟セシムヘシ若力及ハサルモノハ其旨監吏ニ告白シ又監吏ヨリ其見聞ノ仔細ヲ尋問スルニ當ラハ其實ヲ以テ之ニ報答スヘシ

第四十條　哨船及通船等ハ常ニ注意シテ修理ヲ如フヘキモノハ監吏ニ報シ其船具ノ散セサル其取扱ノ暴ナラサル樣水夫ヲ指揮督責スヘシ

第四十一條　商船ニ畜類ヲ蒙養スルアラハ之ヲシテ封緘ヲ破却セシメサル樣注意スヘキ旨初日封緘ノ際ニ當リ其船司ニ通告シ置ヘシ

第四章　海上勤務監吏補

第四十二條　當務者ハ各商船ニ乘組ミ總則第一條ノ件々ヲ監視禁遏スルノ事ヲ主トルヘシ

第四十三條　商船ニハ日出三十分ヨリ日沒ノ時迄其事務ノ繁閑ニ依リ一員若クハ二員乘勤スヘシ故ニ朝九時ノ交代ヲ以テ常ニ天保山詰所迄出科シ其配布ニ就クヲ定期トス

第四十四條　船中荷物積在ノ場所及ヒ其個數幷商物船用品ノ區別等ヲ概視豫算シ諸荷物揚卸ヲ監視スヘキハ勿論密ニ陸揚センカ爲メ船中艙外ニ隱匿セル荷物或ハ無許ニテ密ニ舷積セシ品ノ有無ヲモ專ラ注意スヘシ

第四十五條　卸荷ハ陸揚免狀ニ照シ之ヲ卸サシメ且其旨ト艀ノ號數ヲ手簿ニ筆記シ皆卸ノ上免狀ニ見屆ノ證印ヲナシ其貨主ヘ返付スヘシ若シ右品多數カ或ハ最前積込ノ都合ニテ其日內ニ卸シ難キモノハ更ニ內卸シ免狀ヲ附與シテ本免狀ハ手簿ト共ニ之ヲ本課ニ差出スヘシ又船積品モ同上手續ノ如シト雖モ皆積幷內積共其免狀ヲ荷主ニ附セサルナリ

第四十六條　積卸免狀中記號個數等實物ニ符合セサルモノハ免狀書載ノ誤謬ナルヤ否ヤヲ精覈ニ穿鑿スヘシ若我筆者誤謬セシ證アルモノハ其事ヲ取扱置キ然シテ之ヲ本課ニ報スヘシ我誤謬ノ故ヲ以テ貨主ヲシテ其害ヲ蒙ラシムルナカランヲ要ス

第四十七條　現ニ無免狀ニテ荷物船シヲニ爲サントスル者アラハ一應懇切ニ規則ノ次第ヲ示諭スヘシ若之ヲ聽カス擅ニ船卸シ之ヲ支留スル能ハサルトキハ巡廻ノ者或ハ艀船ノ水夫ヲ以テカ又ハ時機ニ依リ自ラ其旨ヲ速ニ本課ヘ報知スヘシ

第四十八條　荷物船卸ニ付テハ運賃積ノ物カ或ハ船客ノ提携セル品カヲ詳カニ辨知シ其免狀ノ附貳スル否ヤヲ區別スヘシ假令提携品ハ其實商品タリトモ保護ハ其船客ノ自任ナレハ上陸シテ免狀ヲ請ケ更ニ來ルコト能ハス是ニ反シ運賃積ノ品ハ其實僅カノ見本タリトモ積荷目錄ニ揭載アレハ免狀請ケ得テ後船卸スルハ當然タリ

第四十九條　漂流或ハ困難ニ遇フ若シハ求ムルコトアラハ課長ヲノ指圖ヘ受ケ成ヘク懇切ニ取扱ヒ遣ハスヘシ

第五十條　條約未濟國ノ船ナレハ貨物ハ勿論船司ヲ始メ乘組人其他船客ノ者タリトモ科長ノ指圖

ナクシテ必ス船ヨリ卸スヘカラス

第五十一條　船中ニ人或ハ禽獸類ノ傳染病ニ罹ルモノアルトキハ檢官來船ノ上課長ヨリ指圖ヲナス迄ハ一切其病ニ關スル人或ハ禽獸ノ出入ヲ嚴禁スヘシ

第五十二條　多量ノ火藥爆發品ヲ搭載セルモノハ他ノ船舶ノ災害ニ罹ラサル樣篤ク注意スヘシ

第五十三條　各船ノ艙口ヲ開鎖スルハ當務者ノ課タリ之ヲ鎖封スルハ夕日沒ノトキニ於テシ開封スルハ必ス日出前ニ於テスヘシ尤空艙ハ鎖封スルニ及ハスト雖モ更ニ荷物積入ル、時ハ艙內精査ノ上之ヲ爲サシムルヘシ

第五十四條　船艙ノ封緘ハ元來夜中輸出入ノ荷物ヲ密ニ積卸ナサシメサル爲メ之ヲ施スモノナレハ開艙ニ臨ミ豫シメ輸入荷物積在ノ位置ヲ審カニ記臆シ鎖封ノ時ニ至リ其日陸揚ノ荷物ヲ暗算シ其位置變換ノ形態ヲ察シ曾テ卸サル、荷物ノ目前ニ不在ノモノアレハ其所以ヲ質シ其轉移セルトコロヲ檢スヘシ且ツ艙外ニ荷物ノアルアラハ其所ニ就キ封印ヲ緘スヘシ若シ居室或ハ人ノ出入頻繁ノ所ニシテ鎖封スヘカラサレハ之ヲ艙裏ニ搬ハシメ然シテ後封印ヲ施スヘシ

第五十五條　內港廻漕船更ニ外國航海船トナルトキハ其船內ヲ檢セシ上荷物ノ積入ヲ爲サシムヘシ

第五十六條　船中ノ異狀或ハ本課ニ報知スヘキ急事アラハ呼子笛ヲ以テ巡回者ニ暗號シ其船ヲ呼フヘシ

第四章　陸上勤務監吏補

第五十七條　當務者ハ川筋左ノ二區ノ地ニ配布シ監守ヲ主トルヘシ

第一號　本關前波止場東詰ヨリ元長州濱西詰迄

第二號　梅本町元關五番館前波止場ヲ始メ居留地岸古川筋ヨリ及梅本町竹林寺迄

第五十八條　各號ヲ四名宛ニテ隔日ニ宿直勤番シ每朝第九時ニ總員交代スヘシ監所ノ交代ハ晝夜共二時間ヲ以テ定期トス

第五十九條　第一號第二號共各自配布ノ監所ヲ巡廻注意シ總則第一條ノ件々ヲ禁遏シ波止場ヨリ船積引取ノ荷物ハ稅關手數濟ノ有無ヲ監視スヘシ

第六十條　假令隣號タリトモ事件差生セシトキハ速ニ之ヲ通知シ再ヒ其位地ニ復スヘク故ナクシテ私ニ其位地ヲ轉離スルヲ許サス

第六十一條　監所交代ノトキハ其都度本科机上ノ桁箱ニテ自己ノ名牌ヲ揚卸シ且手簿ヲ請取リ出務スヘシ

第六十二條　歸科ノ節ハ出務中筆記ノ手簿ヲ當直監吏ニ差出シ且異狀ノ有無ヲモ告白スヘシ

第六十三條　監視中若シ稅關ニ係ル貨物ヲ盜奪セル賊徒ヲ取押ヘタルトキハ其賊徒ハ巡查ニ引渡シ贓物ハ其場ニ取押ヘ置キ速ニ之ヲ本科ニ報スヘシ

第六十四條　監所ニ在テ本科ニ通知スヘキ件ノ歸科迄難擱モノアラハ巡廻者ニ依託シ通報スヘシ然レトモ場合ニ於テハ稅關中ノ人ナレハ之ニ託シテ本部ニ通スルモ妨ケナシ

第六十五條　波止場上塵芥ノ積堆アラハ仕役ノ仲仕ニ指圖シ之ヲ掃除セシメ又荷役ニ用ナキ或ハ所用ヲ果セシ船等波止場岸ニ繫維シ荷役若クハ船客昇降ノ障碍ヲナスモノハ之ヲ除去セシムヘシ

禮節表	關長ヨリ	課長ヨリ	監吏ヨリ	監吏補ヨリ
關長ヘ		歩ヲ止メ帽ヲ脫ス	歩ヲ止メ正面帽ヲ脫ス	歩ヲ止メ正面左手ヲ直垂シ右手ヲ擧ゲ

課長（	帽ヲ脫ス			
監吏（	帽ヲ脫ス	帽ヲ脫ス	步ヲ止メ帽ヲ脫ス	步ヲ止メ右手ヲ擧ク
監吏補（	右手ヲ微擧ス	帽ヲ微脫ス	帽ヲ微脫ス	步ヲ止メ帽ヲ脫ス

此改正心得書の發布と共に同年八月特に海上勤務に關する心得書を達示して曰く

海上勤務心得書

內國航海船ヨリ舶來品船卸シノ際疑敷ト見認メ候節ハ貨物ノ送狀ヲ一見シ同地（長崎馬關）商人ヨリ日本商人宛ノ品ナレハ最早同國品ト見做シ船卸差許シ引取申付候テモ可然反之荷主外國人ナレハ海上勤務者ノ付箋ヲ以稅關迄回漕爲致候樣御心得有之度

船卸濟上荷取入候後檢印ノ有無ヲ取調候事彼我ノ手數混雜致候ニ付疑敷品ト見認候廉有之節ハ可成船卸ノ際篤ト點檢有之度尤回航船乘初モ無之義ニ付尋問ノ際ニテモ其邊御注意相成候樣致度且本商人ニテ我商人宛ノ送狀ナレハ當稅關（廻漕後又候陸揚候モ甚手數ニテ商人ノ迷惑甚敷候間可成疑敷品ト見認候物ハ船卸之際御注意確證之上稅關（回漕御申渡有之度此段御注意ニ申述置候也

明治十九年八月　　監視課

同年十一月前章配置の項に於て述へたる如く陸上勤務の配置區域を變更して別に木津川巡廻監視補に誨ゆる處ありきのを置くに當りこれに關する心得書を配布し巡廻監視補に誨ゆる處ありき

木津川巡廻線路幷心得

一陸上勤務者ノ內ヨリ每日一名ツヽ、（午前九時ヨリ午後日沒マテ）監視課詰ニ在テ午前一度午後一度ツヽ木津川々內ヲ巡廻シ船舶ノ出入碇泊ヲ調查積荷異狀アルトキハ該船ニ就テ取調之事

一入港船アルヲ見認候節ハ船司ヨリ尋問爲差出日記入ノ上受取本課（報告ノ事

一木津川巡廻ノ際ハ本課揭牌ノ船名ヲ手簿ニ記載シ碇泊船ト對照シ若シ碇泊不在ノ船アラハ其旨本課（報告スヘシ此時ヲ以テ出港ト見做シ候故成（ク詳細ニ調查スヘキ事

一巡廻位地ハ木津川筋及船圍場（ドック）內下流ハ千本松ヲ限リトス

一巡廻者午前午後ノ巡廻ヲ終テ日沒退課之事

右概略取極メ伺相濟候得共猶脫漏之箇條ハ追々取極メ候事

明治十九年十一月一日　　監視課印

十二、變亂と稅關の警戒　　明治七年の始め暴徒佐賀に蜂起せるを以て兵器彈藥の輸出入若くは暴徒の交通を防壓するの目的より我政府は沿海の府縣に訓令して市井の警戒及ひ出入船舶の取締を嚴にせしめ大藏卿大隈重信は特に各港稅關に對して訓示して曰く

頃日來佐賀縣貫屬士族暴徒漸次猖獗之趣相聞候ニ付其稅關出入ノ船舶乘組之者等態々視察致シ若不審之者及ヒ異狀等有之候ハヽ地方官廳打合事由取糺可申彌疑敷事蹟聊有之者其者拘留致置候而モ不苦候條萬端取締筋手拔無之樣厚注意可致候此段相達候也

明治七年第二月十九日　　大藏卿　大隈重信

玆に於て在神戶稅關長より左の如く達せり

別紙寫ノ通リ大藏卿ヨリ御達有之候間爲心得相達候併是等ノ儀ニ付テハ取締向ハ地方官ニ可有之義ニ付全體拙者ヨリ大阪府（可打合筈ニ候得共差懸リ不能其儀候間御手元內海權參事宅（被出浮候等之事由有之節之取扱方猶武器火藥類外國人輸入候歟又ハ內國人輸出候時ハ其旨府廳（可申通等總テノ手順心得迄ニ兼テ承リ合被置度此段申入候也

二月廿五日　　長岡租稅權助

植村租稅大屬殿

尙々內國人火藥武器類輸出入イタシ候時ハ取押置坂府へ直ニ被掛合度候猶副吏長吉田一學へモ
御達之趣旨被申含無拔目注意イタシ度候也
茲に於て稅關より之を大阪府に協議する處あり直に之を稅關長に復命せり
佐賀縣士族等暴動一件ニ付大藏卿ヨリ御達書相添御申越之趣承知仕候早速內海氏へ面會及打合候
處此程正院ヨリ御達之次第モ有之今廿七日ヨリ四川番所へハ不及申外務課へモ別段官員出張川蒸
汽船客悉ク爲相改候ニ付萬一外國船不審之者乘組居歟又者異狀等有之候ハヽ右派出官員へ通達可
致內外人武器類輸入出ノ義ハ御沙汰ノ通リ外國人ナレハ差止候譯ニハ不至候へ共直ニ其旨府へ通
達致シ內國人之分ハ留置打合セ返答ヲ得テ取計候樣致度歟之義ニ有之將昨日相伺置候火藥庫之義
ハ未タ御指圖ハ無之候へトモ是亦內々打合セ候處邏卒之義ハ市民之入費ニテ取設ケ誠ニ當時人少
僅ニ三百人程ニテ市中取締ニ分派スルニモ猶不足ニテ愈御布達通リ諸官省出張派出可致義ナレハ
鎭臺ニ依賴ノ外無之トノ事ニ付此ノ一事ハ閣下ヨリ御指圖次第改テ可及御相談旨相答置申候此段
不取敢申上置候也
二月廿七日

植村大屬

長岡租稅權助殿

然るに同年五月佐賀變亂の鎭定と共に大藏省より左の達示を以て終に之か警戒を解かしむ

神戶、大阪稅關

先般佐賀縣貫屬士族暴動ニ付其港稅關出入之船舶乘組ノ旅人等取締筋厚注意可致旨大藏卿ヨリ二
月十九日附ヲ以被相達候ニ付其旨申入置候處最早夫々就縛致鎭定候間平常之通相心得可申尤去月
四拾三號御達ノ趣ハ注意致居可申旨今般大藏卿代理大藏少輔吉田淸成ヨリ被相達候條其意ヲ可被
得候此旨相達候事
明治七年五月四日

租稅頭　松方正義 印

降て明治十年再ひ西南の亂に遭遇し大阪稅關は直ちに出入船舶の警戒を嚴にし天保山派出所に左の
如く達示せり

入港ノ西洋形船ハ勿論和船ニ至ルマテ港內及ヒ其局近傍川筋ニ繫纜スル船舶ハ盡ク監吏乘船シ彈
藥銃刀都テ武具類之有無篤ト取調若迂論ノ者ハ最寄警察署出張所或ハ鎭臺へ速ニ報告引渡シ尙其
顚末直ニ本關へ報知可致旨五島六等屬ヨリ通知有之候條此旨御承領相成度候也
十年二月八日

本課當直　大監吏

天保山詰大監吏御中

次て同年四月京都行在所より戰時船舶出入幷密賣取締方心得を公布し之を各官廳に達示して曰く

行在所達第八號

各官廳

戰時船舶出入幷密賣取締方別紙之通相心得嚴重取締可致此旨相達候事
明治十年四月三日

太政大臣　三條實美

戰時船舶出入幷密賣取締方心得

一各稅關ニ於テハ輸出入物品嚴重調査致スヘキハ勿論戰時定期郵便船ノ外其港出口ノ商船ハ其國
名種類（蒸氣或ハ風帆力）船名船司ノ噸數ト出帆ノ時限トヲ詳記シ每日船舶出港時限ノ終期ニ於テ之ヲ該所
ノ海軍ニ通知シ且ツ其向フ所ノ各港稅關幷其通過スヘキ瀨戶々々ノ海軍又ハ其他相當ノ官吏ニ
電報スヘシ
一兼テ探偵ノ上疑フヘキ聞ヘ有之船舶幷ニ戰時賣買禁止ノ品則チ彈藥銃劒等ノ物ヲ載セタル船舶

出港スル時ハ卽時前條ニ準シ夫々報告スヘシ右物品積込ノ者ハ其品柄分量トモ詳カニスヘシ

一各稅關及瀨戶々々ノ役所ニ於テ此通知ヲ得ル時ハ直ニ海軍ノ出張官吏及ヒ夫々見張ノ者ニ傳ヘ置キ其適當ノ時期ニ於テ達スルヤ又ハ通過セシヤ否ニ注意シ瀨戶々々ノ見張ヨリハ其通過ノ刻限ヲ其向フ所ニ通シ置ヘシ瀨戶ニ於テ兼テ通知アル船ノ內適當ノ時限ニ通過セサル者アレハ之ヲ最近ニアル海軍出張官吏ニ告クヘシ港ニ在リテハ其適當ノ時限ニ達セサル者アレハ之ヲ該處ノ海軍出張所ヘ通知スヘシ

一各港ヨリ外國ノ港ニ向フモノハ其稅關ヨリ其處在留ノ領事官及ヒ其通過スヘキ瀨戶ノ之ニ當ル官吏ヘ第一條ニ準シ電報シ本港ノ海軍出張ノ官吏ニ通知シ領事官此通知ヲ得ル時ハ其適當ノ時間ニ着スルヤ否ニ注意シ其如何ヲ其出タル港ノ稅關ニ通スヘシ稅關ハ卽チ海軍官吏ニ通知スヘシ

一領事官在留ノ各港ヨリ我各港ヘ向ケ出帆スル船舶及ヒ戰時禁物ヲ載セタル船舶ハ第一條第二條ノ振合ヲ以テ其向フ所ノ港ノ稅關ニ電報スヘシ稅關ハ直ニ之ヲ其通過スヘキ瀨戶々々ニ通シ之ヲ注意セシメ併セテ該處ノ出張海軍ニ通スヘシ

一海軍ニ於テ以上ノ通知ヲ受クルトキハ第一第二第三條ニ係ルモノハ之ヲ其處ノ海軍出張所ニ連絡セル各處ノ海軍ニ通知シ第四條第五條ニ係ルモノハ其處ノ海軍出張所ヨリ各處ノ海軍出張所ニ通知スルノ用意アルヘシ

一外國船ハ兼テヨリ未開港場ニ至ルヘキ故ナキヲ以テ其線路ヲ考ヘ之ヲ查問シ其疑フヘキ依據アル者ハ直ニ之ヲ差押ユヘシ又內地各船舶ノ反賊ノ地ニ往來スル者ハ直ニ之ヲ差押ユヘシ上文ノ報知ハ唯其搜索ノ道ヲ精シクスルノミニシテ本條ノ處置ハ其報知ノ如何ニ關スル事ナカルヘシ

一戰時禁物ヲ載セタル船舶各港ニ着スルトキハ稅關ハ其詳細ヲ地方官ニ通知シ地方官ハ警察官ニ傳ヘテ其出入賣買ノ取締ヲ爲シ併セテ海陸兩軍卿ニ通知スヘシ

之れを標準として大阪稅關は戰時船舶出入取締方に付監吏取扱振概略なるものを規定して之か取締に衝らしむ

戰時船舶出入取締方に付監吏取扱振概略

一入出港船報知方ノ儀ハ日々午後五時迄ニ本關へ可相達事

但シ其後ニ入出スル者ハ翌朝交換ノ節報知可致事

一安治川筋途中ニ繫纜スル船舶ハ中監吏其繫場所ニ至リ彈藥銃釰之有無一應取調可致該船出港ノ際同樣注意可致事

一船舶出港之際當關ヨリ該船仕向先稅關或ハ該地警察宛ノ免狀入封書之有無取糺若シ所持不致者ハ出港可差留事

然るに同月太政大臣は先きの取締心得書は詮議の次第ありとして一般の施行を停止せしめ左の如く達せられたり

行在所達第十一號寫

各官廳

行在所第八號ヲ以戰時船舶出入幷ニ密賣取締心得相達置候處右ハ詮議之次第有之一般施行ニ不及尤モ精々注意致シ事實疑敷見認ル船舶ニ限リ該規則照準取締可致此旨更ニ相達候事

明治十年四月二十九日　　太政大臣　三條實美

後月變亂の裁定と共にすへての警戒を解きぬ

十二、犯則調查及處分　外人に關する犯則事件に對し稅關官吏の職權は旣に記述したるか如く（第一期第三篇第五章參照）各國通商條約又は貿易章程に反せさる限りは臨檢搜查訊問或は船車倉庫

の封鎖又は物件の差押等必要の處分を爲す事を得ると雖も罰金の徵收物件沒收の如き最後の處分は皆其國領事の裁斷を仰かさるへからさるの地位にあるを以て單に些末の事件と雖とも吾當局の處分に對し渠等外人は常に言を左右に托して之を領事に訴へ領事も亦自國商民を曲庇して吾の要求を拒絕するか如き往々暴論橫議を逞して容易に其處分を決する能はさる事ありしは蓋し渠等外人か夫の所謂「治外法權」てふ一種の利器を擁して常に頑強抗辯せるを以て我當局者の之に對する處置に往々困難なるものありし

又內國人に對する處分の如きも吾特別法に定められたるもの、外は悉く通商條約貿易章種に照準して處分したり當時より內國人の違法處分に關し當稅關よりの伺及ひ租稅寮の指令に據れは此間の消息を知るに最も便なり

內國商人其貨物ヲ外國ヨリ或ハ外國輸出入致候節海關稅ヲ減セント謀リ或ハ脫荷等致シ候者ハ是迄各國條約面ニ基キ處分致候從來ノ慣行ノ所右ハ一般人民ヘ御布告有之ニモアラス右處分方前段御達シモ無之候得共自今後モ右樣違反ノモノハ從前之通處分致候フ可然哉若シ各國條約ニ基キ處分可然儀ニ候ハヽ其犯罪ニ隨ヒ罰金取立或ハ其品取上ケ等ノ儀ハ當關限リ處分致シ可然哉又ハ本縣裁判廳ニ於テ處置可致儀歟且其罰金取上ケ品々取扱方等品々決指令有之候樣致度此段相伺候也

八年八月廿七日

松方租稅頭代理　租稅權助　長岡義之

朱書

第四十三號

伺之趣ハ當分從前慣行ノ通取計置且罰金或ハ沒收品等取扱方ノ儀外國人同樣處分可被致事

八年十月二十五日

松方租稅頭代理　吉原租稅權頭

然れとも大阪稅關に於ける犯則事件は開港以來比較的僅少にして特に重大なる事件ありしを聽かすと雖も當時外人の輸出樟腦虛僞の申告事件は其結果遂に中央政府を煩すに至り幾多小事件中に在りて稍々耳を傾くるに足るものあれは當時の記錄に依りて左に之を揭けん但惜むらくは最後中央政府の手に於て處置せる結果は記錄に缺くを以て之を知るに由なきを

輸出虛僞ノ申告事件　明治七年十月廿九日當港在留ノ英國「エドワルド、フキセル」商社ニ屬スル樟腦百貳拾八箱ヲ輸出セントシ番頭樋口靜次郎ヲシテ當稅關ニ輸出申告ヲナシタリシカ檢查ノ結果某量目ニ於テ非常ノ過剩アルコトヲ發見シタリ稅關ハ之ヲ以テ虛僞ノ申告ヲナシタルモノトナシ貿易章程第五則ニ依リテ百貳拾五弗ノ過料ヲ課セントシ一時其物件ヲ抑留シタリ「フキセル」商社ハ之ニ對シ其申告面ト相違シタルハ一時ノ誤リニシテ有心故造ニアラサル旨ヲ陳述シテ曰ク

於大阪西歷一千八百七十四年第十月三十日

大日本帝國稅關長代理

植村君

昨日當社中番頭樋口ナル者㊞印樟腦百貳拾八箱神戶港迄輸出ノ爲メ貴關ヘ願出候節同人願出或ハ同品之斤量正味壹萬貳千九百四拾三斤ト記載候處全ク壹萬四千百貳拾九斤四分一ニ有之此差分壹千百八拾六斤四分一之過剩相立此稅貳拾壹鎭三分五厘即メキシコ弗ニ直シ凡七弗過失ト有之候

當社中ノ儀ハ大阪港ヨリ許多ノ商物ヲ船積イタス者ナレハ僅々七弗ノ所得ノ爲メニ稅關ヲ欺キ大金ヲ失フ危險之所置ヲ可致哉否其邊足下ノ御推考ヲ相仰候

我輩ハ是迄稅關ヘ正當之稅納致シ來居候併シ今般ノ儀ハ全ク誤リニハ候得共我輩ノ過失ナルコトヲ承知ノ上ハ直ニ承服致實ニ樟腦量目相違致シ候段ハ甚タ歎息之至リニ候然リト雖モ我輩或

ハ番頭タリトモ稅關ヲ欺カント謀リ有心故造セシニハ非ス全ク一時ノ誤リニテ衆人ハ勿論稅關官吏タリト雖モ樟腦百貳拾八箱ノ斤量算計ニ於テ誤リ無之トハ申難ク候前件ノ如キ誤リハ全ク足下ヲ欺カント謀リシ事ニ無之候得共色々御繁勞相掛ケ候段悔悟致候右之次第御承引ノ樟腦相當之稅銀御取立御所置濟相成度致懇願候右樟腦大阪ニ御留置相成候テハ神戸ヘ其爲船舶爲相待置候間我輩ヘ入費且損亡相懸リ候若我輩之願望ヲ御採用無之候ハヽ我輩ヘ對シ領事ヘ御訴ヘ相成候共不苦候其期ニ臨ミ全ク稅關ヲ欺ント謀リシニ非ス只一時ノ謬ナルコトヲ申立之外又更ニ怖恐スルコト無之右御面倒相懸候段慨歎ノ次第ニ候得共不取敢御速答相俟候謹言

エドワルト、フキセル商社

之に對して稅關は直ちに回答して曰く

貴番頭儀樟腦輸出之際不直ノ屆書差出候儀ニ付御歎息云々今朝書面ヲ以テ御申越ノ處右事件ニ付テハ何レ足下ノ領事館ヘ出訴ニ及フヘク儀ニ付何分御依賴ノ次第於拙者ハ乍御氣毒採用致シ難ク此段御報告申進候謹言

十月三十日

植村昌茂

フキセル氏商社御中

而して一面直ちに稅關長より英國領事に照會して曰く

在阪貴國商フキセル氏商社手代樋口靜次郎儀一昨廿八日同商社代理トシテ樟腦百二十八箱此斤量壹萬貳千九百四拾參斤同社ノ印ヲ捺シ輸出願書差出候ニ付昨廿九日輸出之際臨檢查致シ候處當關平均ニテハ壹萬參千九百二拾餘斤餘ニ相成凡九百七拾斤餘ノ過上相立右ハ全ク收稅ヲ欺ン ト相謀候儀ニ被存候間稅則第五條ニ照依シ御處置有之候樣致度此段御掛合オヨヒ候謹言

明治七年十月三十日

英國代辨領事

エ、エー、エンネスリー貴下

英領事は吾要求に對し正當裁斷を下したりし乎否や試に左の回答を見よ

去三十日付貴翰忝相誦然ハ大阪港在留「フキセル」商會番頭樋口靜次郎ナル者去月二十八日樟腦若干船積之節稅關ヲ欺クノ所存ヲ以テ僞之告書差出候趣致承知候處別紙ノ通手續書差出シ返答ニ及右同社之辨解尤之儀ト被存候ニ付何卒樟腦船積御許容之方可然奉存候謹言

英國副領事

エ、エー、エンネスリー

長岡租稅權助

稅關長官

長岡租稅權助殿

（別紙）

エドワルド、フキセル商社樟腦九百七十斤ノ稅金ニ付稅關ヲ欺カント企テタルコトナシリ訴認セシニ依リ同商社ヨリ答文

第一、エドワルト、フキセル商社ハ更ニ稅關ヲ欺カント企テタルコトナシ

第二、九百七十斤ノ誤アル樟腦百二十八箱ハ固ト大阪ニ於テ買求メ神戸灣ニ在ル「コンテスト」船ヘ積入可申樟腦貳拾萬斤之中ニテ既ニ餘ノ分ハ正直ニ納稅ヲ爲シタリ

第三、エドワルド、フキセル商社ハ大阪ニ於テ盛大ナル輸出家ナリ然ルニ僅ニ九百七十斤ノ樟腦ノ稅銀五弗六十一セント程ノ小金ニ付テ稅關ヲ欺ク抔ト見做サレテハ不當之事ニ候

第四、エドワルド、フキセル商社ニ於テ姦計ヲ爲ス可キノ證據ナシ全ク「コンテスト」船樟腦ヲ

積入ル、爲ニ許サレタル期限近々ニ盡キ日本國ヲ出帆スルニ付船積ヲ差急ク故倉卒ヨリ輿リシ失誤タル事明ナリ

第五、大阪商業ノ爲委任セシ扱人ナル「レップル氏」不幸ニシテ今度ノ失誤差輿リシ時不在ナリシニ付右同樣扱人ナル「ブロウン」氏此難事ヲ聞クヤ否直ニ大阪へ向ケ出發其誤ヲ正サントセシニ稅關官吏同氏來ル遲キヲ咎メタリ

第六、稅關ハ只エドワルド、フキセル商社ニ困難ヲ蒙ラセンコトヲ好ミシ樣ニ見ヘタリ何トナレハ豫メ嫌疑ヲ避ケン爲ニ餘分ノ金高ヲ預ケ置樟腦積入ヲ願ヒシモ稅關ニテハ之ヲ許サヽルヲ以テナリ

大阪千八百七十四年十一月六日

エドワルド、フキセル商社

此處僞の申告は「フキセル」商社に於て主張するか如く果して有心故造にあらす一時の錯誤に出てたりとするも稅關は其事實を以て反則行爲と見做し領事に向て成規の處分を要求したるは固より正當の事に屬す然るに領事は單に一片の手續を徵し愈々其辯解を正當なりとして吾の要求を付けんとす且つ其所謂手續書第六に「稅關は只「エドワルド、フキセル」商社に困難を蒙らせんことを好みし樣に見へたり云々」の如き曲論を表白するに至れり玆に於て稅關は再ひ領事に交涉して曰く

先月二十八日貴國人フキセル商社樟腦輸出之際僞之告書差出候儀ニ付同月三十日附書翰ヲ以テ御所置之儀御懸合ニ及置候處右ハ全ク收稅ヲ減セント謀リシニ無之船積差急候テ一時之過ニ出候趣之同商社ヨリノ答書相添へ船積差許候樣六日附ノ貴簡ヲ以テ御回答之趣一應承知候得共同商社申出ノ僞ト不僞ハ敢テ商社ノ大小其稅高之多寡ニ因テ分別ヲ爲シ又船積ヲ差急ク爲ニ生セシ誤タルノ申譯ハ承引難致元來願書ハ貿易定則第三則中第六則記載之如ク其正當ヲ證スル爲メ荷主姓名ヲ自記セハ過誤アルヘキノ理更ニ無之若相違ハ過誤ヲ以テ口實トシ法網ヲ漏ルコトヲ得ハ衆人之ニ倣ヒ有心故造スト雖モ其罪ニ座スルノ者ナカルヘシ況ンヤ今般同商社輸出樟腦ノ一事ハ固ヨリ過誤タルノ確證ハ無之實ニ有心故造ト被存候其故ハ別紙廉書之通リニ有之候間右ニテ御了解貿易定則第五則ニ基キ至當ノ御處分有之度此段再及御掛合候拜具

大阪稅關長

租稅權助　長岡義之

英國代辨領事

エ、エー、エンネスリー貴下

（別紙廉書寫）

第一、最前商社代理人樋口靜次郎ナル者ヨリ屆タル斤高ハ樟腦百廿八箱此量目壹萬貳千九百四十三斤然ルニ稅關ニ於テ右之內二十六箱掛ケ改メ見込ヲ以テ風袋引去リ平均スレハ願高ヨリ九百七十七斤餘過剩セリ

第二、靜次郎儀其願高十量目不足之發覺セシヲ聞キ稅關ニ來リ千百七十八「ホント」（我八百八十三斤半ニ當ル）誤テ量目不足ノ屆ケ書差出候段申出タリ

第三、其後同商社ヨリ差越セシ書面中ニハ千百八十六斤半ハ願書ヨリ過剩之由書載セリ稅關ニ於テ改メタル量目ハ未タ皆懸セサレハ其正量ヲ知リ難キト雖モ靜次郎ヨリ再度改定セシ量目ヲ尙是ニ比スレハ三百三斤ノ差ヒ有之候是レ靜次郎之詐僞ナルコト明白ナリ

第四、第三條ニ記セシ如ク同商社ヨリ稅關ニ差越セシ書面中ニハ千百八十六斤半トシ今又貴下へ差出セシ答ニハ當關ノ算計ヲ基本トシ九百七十斤ト記シタリ是詐僞ヲ重ヌルニ非スヤ

右條之如ク前後不合ノ申立ハ全ク有心故造ト被存候也

如斯吾か再三の交渉に對し領事も聊か覺る處ありしか「フキセル」商社より過料として金三十弗を徵し一件書類と共に吾に回送し來れり今其書類は之を記錄に遺するを以て茲に示すことを不得と雖とも翌十二月十日稅關より領事に交渉したる文書によれば

本月貴國人エドワルド、フキセル商社輸出樟腦僞之告書一件御裁判書へ洋銀三拾弗相添へ御差越シ致披見候然ル處右輸出願書ハ同商社ノ代理人其僞リ無キヲ證シ姓名ヲ記シ有之義ニ付御裁判書中租稅ヲ減セント謀リシ僞ノ充分ナル證據無之トノ御處分ハ難得其意拙者ニ於テハ貿易規則第三則ニ違反セル上其斤數ノ相違ハ稅關ニ於テ發覺シ且同商社ヨリ過斤之員數再三齟齬ノ申立等全ク僞リノ告書ト證明致候且又洋銀三十弗ノ過料ハ條約幷ニ貿易規則中何レノ條欵ニ基キ御處決相成候義歟更ニ難了解旁以テ此件御裁判振拙者不同意ニ付直ニ東京租稅寮へ申立公判ヲ可仰ト存候依テ右下命有之迄ハ御差越ノ過料難請取則差進候間貴館へ御預リ置被下度此段回答旁申進候拜具

明治七年十二月十日

英國代辨領事
エ、エー、エンネスリー貴下

大阪稅關長
租稅權助　長岡義之

依之觀之英國領事は其裁判書と共に過料三十弗を徵して回付し來れるは明なり然れとも其過料三十弗は何の標準によりて之を徵せしやを知らすと雖とも彼日英貿易章程第五則に「日本運上役所ノ規則ニ違ヒタル僞差出シ積荷目錄ヲ出シ並ニ證書ニ名前ヲ記セシ輩ハ其犯ス毎ニ百二十五「ドルラル」ノ過料ヲ日本役へ納ムヘシ」との規定に依るも領事に於て之を斟酌增減するの權を有せす且つ其「御裁判書中租稅ヲ減セント謀リシ僞ノ充分ナル證據無之モノトノ御處分ハ云々」に徵するも明に領事は犯則者を曲庇し私擅の裁決を與へたるものとして稅關は之に不同意を通告したるは寧ろ適當の措置と云ふへし同月十五日「フキセル」商社より何の故を以て物件の渡方を拒否するやの質問に對し

本日附以貴翰何故樟腦渡シ方相否ミ候哉御問合ノ處右事件ハ委細貴國領事館へ申遣シ有之候間同館ニ於テ御聞有之度此段及御報候也

と答へ更に同十八日を以て英領事宛左の文書を發送せり

昨日附貴翰ヲ以テ貴國人フキセル商社樟腦渡方等縷々御申越ノ儀ニ付過刻御面晤候得共尙以書中申遣候右ハ本月七日付ニテ當事件御裁斷書御差越ノ後一昨々十五日同商社ヨリ稅金納方之手續不被致別紙之通樟腦十箱丈ケ罰金引當トシテ十箱稅關へ可相預筋ハ無之同商社之申立難致了解依テ右等爲念貴下へ御打合之上可取計トシテ殘置餘之百十八箱渡方被相願候得共罰金引當ト相心得候內却テ御投翰行違ト相成不都合ノ段氣ノ毒ノ至リニ候勿論同商社ヨリ新ニ願書被差出稅銀被相納候ハヽ當關オキテハ何時モ通關可取計候間其段同商社へ御通達被下度候

一、貴館ノ御裁斷承允不致再吟味ヲ乞ハ貴館ヲ經テ上海ニ在ル上等裁判所へ可訴トノ御指示ニ候得共右ハ上局ノ下命ヲ不得シテ直ニ拙者取扱權無之依テ東京租稅寮へ上控致候儀ニ有之候

右回答旁申進候拜具

明治七年十二月十八日

大阪稅關長
租稅權助　長岡義之

英國代辨領事
エ、エー、エンネスリー貴下

又一面フキセル商社に通知して曰く

當關上屋代ノ假ニ納屋入爲致置候貴商社樟腦今以テ其儘ニ致シ有之候處右場所當關要用之儀有之候ニ付明廿四日中ニ可明渡候自然右荷物當關ヘ預ケ置度候處爲ニ候ハヽ、更ニ借庫入可被相願此段申進候也

大阪稅關　植村租稅大屬

フキセル商社御中

如斯稅關は領事及「フキセル」商社に對し物件引取を督促する所ありしか同廿八日を以て英領事より左の如く交涉し來れり

兵庫大阪ニ在ル英領事館ニ於

千八百七十四年十二月廿八日

一　樟腦之儀ニ付稅關長ヨリ「フキセル」商會ヘ御遣シ有之候三通ノ書翰ヲ正シク拙者ヘ差出シ候

一　第一之書翰ハ本月十五日附ニテ植村氏右之英商社ヘ御遣シ有之候書翰ニテ如何ノ次第ニ而樟腦御留有之候哉ヲ知ルコトヲ同氏ニ同社ヨリ願ヒシ書翰ノ返事ニ有之候

一　他ノ二通ノ書翰ハ本月二十三日及二十六日附ニテ大阪稅關ヘ有ル荷物ヲ同商社ヘ速カニ請取可申樣御掛合有之候書翰ニ有之候

一　此事件ニ付依賴ノ義有之候ハヽ、最初拙者ヘ御申越シ有之然シテ同社ハ拙者ノ指示ヲ受可申候

一　本月十日附ノ拙者ヘノ貴翰ハ本月七日附之拙者書翰ヘノ返翰ニテ右拙者書翰ハ此事件ニ付裁判有之裁判書之寫シト且同商社ノ番頭或ハ書記ニヨリテ誤ラレシ失錯ノ爲メニ被告人ヘ申付ケシ過料參拾弗ヲ相送リ且被告人ヘ右樟腦御渡シ方依賴ニ御承允無之却テ過料御戻有之御書翰ニハ最早東京稅務ヘ御申達有之上裁ヲ仰クトノ御掛合ニ有之候

東京政府ト應對且勘考ノ爲メ公使ヘ右事件之往復書類相送候後本月十八日附ノ書翰ニテ御掛合有之候ニハ貨物ヲ通關スルニハ稅關ニテ御取計可有之旨ノ御掛合有之候扱テ拙者ヨリ被告人ヘ樟腦御渡有之候樣願置候本月七日附ノ書翰ト貨物ヲ御渡有之候トノ本月十八日附ノ書翰トノ間ニ此事波ス事ヲ云フカ御取計有之ニ多クノ時間有之候且此領事館ニテ裁斷有之候翌日一日ニテモ荷物御置キ有之候道理無之候貴下專權ノ御取計ヨリ本月十六日附ノ書翰ヲ貴下ヘ呈候樣立至リ候右書翰ハ貴下御留置相成候樟腦ノ掛目幷利益ヲ得ルヘキ賣却ノ好機會利足並ニ惣テ生シタル公使ヘ申立置事損失ヲ御引請有之候樣申上置候

右事件ニ付公使ヨリ本月二十六日ニテ書翰落掌致候右書翰ニテ「フキセル」商社ノ樟腦ヲ稅關ニテ御留置有之ヨリ生セシ損失ハ貴下ヘ御引請ノ儀ヲ公使ヨリ同意ノ趣申越候且右貨物遲延ナク御渡方有之候樣外務卿ヘ公使依賴致置候趣申越候且右貨物ヲ請取リ候樣同社ヘノ指示ト貴下ヘ申立候稅關ヘ對シテノ罰金ノ金高ヲ速カニ承リ置候樣申越候

一　拙者當領事館ニテ裁斷致候裁斷ヲ御照會無之三十「ドル」ノ過料ヲモ御返却有之候間右商社ヘ返却致シ候事ト裁思致候依之同社ヨリ輸出稅而已ヲ相納可申候

エ、エー、エンネスリー

稅關長　長岡義之貴下ヘ呈ス

之れに由て見れば領事は稅關か頗る强剛の態度を持し容易に裁決を容れざるを見て一方には自國公使に報して直ちに我政府と交涉を開始せしめ一方に於ては夫の過料として一旦徵したる三十弗も稅關か領事に返送し來りしは當然犯則者に下戻すへきものなりとし頗る巧妙の口調を以て「フキセル」商社を庇護せんとしたるか如き殊に況んや稅關か反則事件の爲め一時其物件を抑留した

るに藉口して之か損害を要償せしめんと擬するか如き其姧黠實に驚かさるを得んや之に對し稅關は一矢を酬へて曰く

「フキセル」商社樟腦ノ儀ニ付本月廿八日附ノ貴翰正ニ落掌致候然ハ右樟腦之儀ハ唯「フキセル」商社之過失ヨリ甚敷事ノ面倒煩雜ヲ相生シ候事ヲ憂慮罷在候加之同社貴國ノ領事館或ハ貴國ノ裁判廳ヲ輕侮シ規法背犯スルノ取扱ヲ以テ強テ右過失ヲ遁避セント相謀候儀有之可申ト憂慮罷在候本月廿八日付ノ貴翰ニテ御申越ノ儀ニ左之通回答致候貴下右事件ノ起因ハ事實無相違段演述ニ及有之候

本月十五日「フキセル」商社ヨリノ貴翰ノ儀ニ付本月十六日附貴翰ヲ以テ御申入ノ旨趣本月廿日附之書翰ヲ以テ回答ニ相及置候右ハ「フキセル」商社更ニ願書相認メ稅銀相納候得ハ通關可差許候間同社へ其旨御申通被下度御掛合申進置候處貴下並「フキセル」商社ヨリモ何タル返事モ承リ不申候且右樣ノ儀ニ付テモ平常ノ捷速ヲ以テ同社へ正シキ願書相認納稅ノ上荷物引取方相運候樣最早御申渡シ有之候儀ト存候然ル處右樣遲延致候儀ハ全ク同社ノ怠慢ヨリ意外ニ無益ノ面倒相懸リ已ニ本月廿三日ニモ右樟腦之儀ニ付同社へ書翰ヲ以テ申遣置候所同社ヨリ何等ノ返書モ落掌致不申依テ猶又本月廿六日催促ニ申遣候

右樟腦ハ稅關士官ニテ取押候儀無之只「フキセル」商社右樟腦ノ斤量ニ付僞リノ告書差出申候事故ヲ以テ右樟腦ヲ抑留セシ事由ニ篤ト御注意有之度候且又右樟腦抑留ノ儀ニ付同社ヨリ正シキ不服ノ告訴モ無之候併シ本月十六日付ノ御翰ハ不服ノ道理ヲ以テ御遣シニ相成候哉則右十六日附ノ御翰ニハ早速十八日附ヲ以テ左ノ通回答致置候貿易規則第三ケ條ノ五六則ニ記載有之候通「フキセル」商社ヨリ更ニ願書相認メ至當ノ稅銀相納候ハヽ荷物通關可取扱段回答ニ及置候「フキセル」商社ヨリ右樟腦船積ノ願ニ僞リ有之事書面差出シ候而已ニテ他ニ願書差出候儀并稅關士官へ納稅致候儀更ニ無之候間右樟腦ヲ抑留セルヨリ相生候損失并ニ傷耗ニ關シ稅關又ハ我政府へ對シ法律公報ニ憑依シ右之義訴告致候道理更ニ無之儀ニ御座候

御條約書ニ附載セル貿易規則ノ第六ケ條ニ背戻セルモノヽ、罰則ニ背戻セルモノヽ、罰則ト御定ニ相成候過料三十弗共御封込ニテ本月七日御差越ニ相成且右等規則ノ第六ケ條ニ背戻ノ儀ニ付當稅關ヨリ訴告一件ノ御裁斷書御封込御座候

込御差越ノ一條ニ付本月十日付ヲ以テ差進候貴翰へ答書旨趣尙篤ト辯解可致候拙者ハ貴下ノ御裁判不服故此事件東京租稅寮ヨリ示合有之候迄ハ右金額ハ貴下迄預置候テ決シテ返戻致シ候儀ニハ無之候

拙者ニ於テモ心服不致シテ御裁決ニ扶諸且過料請取候樣難相成候旁以事情柄ニ依リ此事件租稅寮へ上申セスシテ一己ニ取計候譯ニハ至リ兼候ニ付右樣相計申候右之始末ハ本月十日付ノ書翰ヲ以テ申述候旨趣ニ御座候亦十八日付書翰ニテモ東京租稅寮ヨリ示合無之テハ貴政府ノ上等裁判所へ右事件直ニ告訴致候ハ拙者ノ權力ニ無之儀申進置候

樟腦ヲ抑留セルニ依テ損失幷傷害ヲ生セシ右補償申立候ニ付右返答トシテ唯々左ノ通申述候テキセル商社前以自身荷物手數ノ節御條約幷附貳セル貿易規則ニ背戻セスハ荷物モ抑留スル如キモ荷物ハ至當ニ手數サヘ有之候ハヽ斯樣ナル儀差起リ不申候事ノ困難ハ相生シ不申且何時ニテモ荷物ハ至當ニ手數ノ三拾弗ヲモ御返却ニ付最早右過料同商本月廿八日附ニテ御裁斷ノ趣御申越之儀拙者甚憂慮罷在候則其憂慮ノ次第ヲ左ニ申進候

御書翰中拙者當領事館ニテ審判致候裁斷ヲ差置其過料ノ三拾弗ヲモ御返却ニ付最早右過料同商社へ差戻之儀當然ト裁思致候旨御認有之候右樣ノ事件ハ拙者一己ノ所存ヲ以テ唯貴下ノ裁斷ヲ承諾スル權無之ニ付此事件ノ決答ハ於拙者難致依テ御裁思相否申候

貴國御裁判廳ノ御決裁ニ從ヒ「フキセル」商社ヨリ右廳へ其金額ヲ御納メ候ニ有之然ラハ上裁ノ

上右過料ヲ差置或ハ調定有之候ハヽ、相決候迄ハ安政五年第七月十八日於江戸調印有之候御條約第ケ九條ニ基キ右御裁斷ニ相成候丈ノ金額ハ我政府へ可收金額ニ有之候依之右事件ノ再答モ無ク被告人「フキセル」商社ヨリ納メシ過料ヲ同社へ於貴下御返却有之候ヲ拙者確ト不承服之儀申進置候

右回答ニ及置候拜具

明治七年十二月三十日

大阪稅關長

租稅權助　長岡義之

英國代辨領事

エ、エー、エンネスリー貴下

如斯縷々數百言丁寧反覆其妄を辨したりと雖も領事は吾か言ふ處に耳を借さす更に之を反駁して曰く

兵庫大阪ニ在ル英領事館ニ於テ千八百七十五年一月六日

君

一、去月廿八日附ニテ貴下へ呈シ置候書翰ノ回答去月三十日附貴翰落掌致候

一、拙者簡易ニ唯一二ケ條注目ノ事件ニ限リ態ト申上候ニ各事件ヲ長々シク御申越有之候得共右ハ既ニ前翰ヲ以テ委細說明セシ事柄ニ有之候間茲ニ贅スルニ及ハスト勘定致候

一、貴下ノ御書翰ニ曰ク右樟腦ハ稅關士官ニシテ取押候儀ニ無之唯「フキセル」商社僞ノ告書ヲ差出候事故ヲ以ヲ右樟腦ヲ抑留セシ事ト御認メ有之候

一、稅關ハ貿易規則第五ケ條ニ基キ此樟腦ヲ抑留スル權無之候商物ハ相當ノ稅金相納候上ハ通關御差許シ置テ後僞リ告書ノ儀ハ治定可致事ト存候右ハ過料ノ一事ニテ其品取揚ヘキ事ニ無之候依之十一月廿八日迄貴下一己ノ御存意ヲ以テ樟腦御所有相成候間右荷物抑留ヨリ「フキセル」商會ニ於テ損失セル斤量ノ不足商賣ノ時機ヲ失セシ不利幷利足等都テ貴下ニテ御引請可有之儀ト勘考致候

一、書翰ニ御書載有之候ニハ當裁判廳ニテ裁斷セシ過料ヲ租稅寮ヨリ示令有之迄ハ三十弗貴下へ預ケ置候儀ニテ決シテ返戻セシ譯ニ無之ト被認候ハ甚迂遠ニシテ明瞭ニ無之候

一、當領事館ノ裁判ニ貴下御承服否ニ拘ラス貴下ノ御勝手ニ依リ貴下ノ政府へ御上申有之候迄當領事館ニテ裁斷相濟貴下へ納メシ過料ヲ御預ケノ御勘考候得共右樣ハ難相成一旦御落掌之上過料御返却ニ有之候ハ當領事館ノ取計ニ少シモ關係無之候間過料右ハ棄損ニ裁思致候

一、「フキセル」商社ニ於テ右荷物最初輸出之節條約幷ニ貿易規則ニ揭載之通當然之手數有之候ハヽ、荷物抑留相成候如キ面倒ハ生シ不申ト御申越候得共稅關士官右樟腦抑留無之上船積御差許相成僞リノ告書ヲ差出セシ過料ノ事件ハ跡ニテ當領事館ニ於テ治定ヲ乞ハレ候ハヽ、稅關へ對シ此抑留シタルヨリ生シタル損失ハ不申立候謹言

英國代辨領事

エ、エー、エンネスリー

大阪稅關長

長岡租稅權助　殿

之に對して稅關は又

去月三十日附拙翰之回答トナシ本月六日付貴翰御差越落掌致候然ハ貴國人「フキセル」商社樟腦之儀ニ付テハ已ニ去月三十日附ヲ以テ直ニ貴國裁廳ノ公法幷ニ貴國法律ノ公道ニ基キ拙者ノ取計ヲ解說スル爲メ充分次第抔ヲ辯明致置候

拙者三十日付ノ貴翰ニ同商社ノ請求罰金ハ其道理無之儀ヲ縷述申進置候
然リト雖トモ尚貴下ノ御投翰ヘ左之通回答致候
御書翰ニハ貿易規則第五ヶ條ニ基キ稅關ニテ右樟腦留ムル權ハ無之ト御認メニ候得共貿易規則
第五ヶ條ニ基キ稅關士官樟腦ヲ指留不申候乍併右規則ノ第三條ノ六則ニ違背致候間通關難差許
依テ右樟腦滯リ候樣相成候次第ハ左ニ申述候
右規則ニ輸出セントスル荷物ハ船ニ輸送スル以前日本稅關ヘ積入ヘキ船名幷荷物ノ記號番號其
品ノ員數種類量目代價等書記セル告書ヲ差出スヘシ右告書ハ書面ノ通聊僞リナキ由ヲ其輸出入
證明可致ト記載有之候
貿易規則ノ此六則ヲ違反セル過料ハ卽チ規則ノ第五ヶ條ニ有之候間右五ヶ條ニ基キ僞リノ告書
ニ記名致シ差出候ニ付條約面之通百二十五弗ノ過料「フキセル」商社ヨリ差出候樣貴下ノ裁判廳
ヘ訴出置候
右訴ハ決シテ他ノ罰金ニテハ無之第五ヶ條ニ記載有之候過料ノ義ニ候
貴下ノ御裁判廳ニ於テ右樟腦ノ量目同商社ノ告書ニ認メ有之候ヨリ其量目過上セシコトハ事實
相違モ無之段御裁斷有之同商社ニテモ右ニ承服致夫故ニ同商社ヨリ過料三十弗ノ御取立方御裁
決有之右過料ト其後同商社ヨリ貴下ノ裁判廳ヘ相納候儀ニ可有之候
「フキセル」商社ヨリ稅關ヘ差出セシ告書幷其證明ハ全ク僞リニ相違無之依テ右告書ハ不正ニシ
テ據ヘキ屆ケニ無之同商社ヨリ右告書ノ外更ニ告書ヲ稅關ヘ差出候儀無之稅關士官ハ他ノ眞正
ノ告書ヲ請取不申テハ如斯相違量目ノ書記シ有之不正ノ告書ヲ以テ稅金取立候儀難出來右樟腦
ニ付同商社ヨリ眞正ノ告書ヲ稅關ヘ請取候事無之然レハ明瞭ニ正シキ告書モ不差出且稅金モ納
メスシテ右樟腦ノ滯リ右ニ付テ損耗等ノ償金ハ法律公道ニ於テ更ニ請求セラルヘキ道理無之候
三十弗過料ノ儀ニ付テハ十二月三十日附ニテ申進置候得共貴下ヨリ御申越ニ付尙又回答ニ及ヒ
候
拙者右過料貴下ヘ差越シ候次第柄ハ十二月十日附及ヒ三十日附拙翰ニ委敷記載致置候右ハ安政
五年七月十八日江戸ニ於テ御取結ニ相成候貴國ト我國トノ御條約第十九ヶ條ニ再ヒ御注意有之
度右條約ニハ左ノ通書載有之候
此條約ニ基キ過料取揚ケモノ、類ハ都テ日本政府ヘ屬スヘシト有之候間法律上ノ正直善良ヲ以
テ貴下御裁判廳ヘ相納候過料ハ卽我政府ノ所有ニ屬シ候間右過料貴下ノ御裁思ヲ以テ棄捐又ハ
「フキセル」商社ニ御返却有之候儀ハ屹度不服ヲ申進置候謹言

大阪稅關長
租稅權助　長岡義之

明治八年一月十八日
英國代辨領事
エ、エー、エンネスリー貴下

要するに稅關は反則事實の發見に依り一時其物件を抑留したるに止り「フキセル」商社に於て更に
相當の手數を爲せは直ちに通關を許すにも不拘商社は何等の手數をなさす徒苒時日を經過したる
ものにして其時日の經過によりて生したる損害は稅關に於て之を負擔すへきものにあらすとし且
つ彼過料三十弗の如きも處分確定に至る迄一時領事に委托したるものにして決して商社に戻した
るにあらすと辯し領事は一に之か反對に出て反則處分問題を措て新に損害要償問題に向て彼か論
鋒を一轉せんとせり則ち同日再ひ書を寄せて曰く

英國領事館ニ於テ千八百七十五年十月六日

一、新年ノ休日中稅關ニ於テ事務御取扱無之ニ付「フキセル」商社樟腦ノ儀モ速ニ不得申上候去

月廿八日樟腦ヲ大阪稅關ヨリ請取候時四箱ハ箱内ノ樟腦取出シ鹽入レ替有之候間同社右四箱ヲ請取ルコトヲ拒ミ稅關ヘ相殘シ置申候段同商社ヨリ請取候書翰ニ記載有之候一、惣テノ箱ニ樟腦ヲ入レ稅關ヘ預ケ候儀ハ相違無之ト「フキセル」商社申出候然レハ稅關ヘ預ケ中ニ右四箱樟腦ノ替リニ鹽入レ有之依テ右箱ヲ同社ヨリ請取候儀ヲ相拒ミ候ト勘考致候且去月七日ヨリ十八日迄ノ内歟又ハ去月七日ヨリ以前歟ニ稅關ヨリ右品物御留有之ニ付稅關ヨリ右之代價償金ヲ請求スルニ立至リ之

稅關長
長岡租稅權助貴下へ

英國代辨領事
エ、エー、エンネスリー

右に云ふ處の「四箱は箱内の樟腦取出鹽入れ替有之候間」云々は全く事實にして是より先き稅關より大阪府へ照會したる處によれは
英商「フキセル」商社所屬ノ樟腦百二十八箱先月中當關納屋中ニ差置有之候處此程渡方ノ際内四箱全ク鹽ナル事發覺シ就テハ夫是取調候處當府下富島町住大神丸岩吉持艀積込船繋中右岩吉雇船子藝州廣嶋籍今助ナル者所業ノ由ニテ已ニ脫走ニオヨヒ候段別紙寫ノ通申出右ハ當關關係ノ次第モ有之候間前書今助ナル者至急御探索有之候樣致度此段及御依賴候也
十二月廿二日

大阪府御中

大阪港稅關

今や彼我論難交涉の時に中り此事ありしは全く彼に好辭柄を與へたるものと謂ふへし然れとも稅關は翌七日附を以て右四箱引取方を領事に交涉したり

以書簡致啓達候然レ者貴國人「フキセル」商社樟腦之儀ハ昨年十二月廿八日附書翰ニテ御申越之通同商社ヨリ引取方申出候ニ付差許候處其四箱丈納屋前ヘ其儘差置場所差支ニ相成候間早々取片付相成候樣御示諭有之此段及御掛合候拜具
明治八年一月七日

大阪稅關長
租稅權助　長岡義之

英國代辨領事
エ、エー、エンネスリー貴下

之と同日附を以て領事は稅關か樟腦の通關を抑留したるは正に「フキセル」商社に對する損害を負擔すへきものとし同商社より領事に差出したる訴狀を添付して正式に其賠償を要求し來れり

第四號

於英國領事館千八百七十五年一月七日
別紙「フキセル」商會ヨリ差出候ニ付封込入御覽候右ハ大阪稅關ニ於テ百廿八箱ノ樟腦ヲ御留相成候ニ付同處ヘ罰金ノ義申出候書面ニ有之候右商社ハ右樟腦之代價右樟腦引退ケ鹽ヲ入置有之候
右罰金之儀吟味致候處至當ニ有之候總高二百九十八弗五拾九「セント」ノ罰金ヲ當領事館ヘ御拂被下ヘク以上

大阪稅關長
長岡義之貴下

英代辨領事
エ、エー、エンネスリー

而して別紙則ち其「フキセル」商社の要求は如何

兵庫一千八百七十五年一月六日

貌列顚皇帝陛下兵庫領事エ、エー、エンネスリー君貴下

八百三十三番ヨリ七百五十番迄㊞印一百二十三箱ノ樟腦大阪稅關ニテ非法ニ押置ニ相成候ヨリ指生セシ損失總金高二百九十二弗ノ義ニ付此紙面ヲ以願立ノ旨申上候

右之演述ハ唯稅關ノ取扱方ヨリ指起リタル眞ノ損失ノミニ申立ニ御座候且又稅關ヨリ我等ヘ對シ告訴一條貴下ノ裁判廳ニテ御裁判ノ日ヨリ大阪稅關ニテ樟腦引渡ニ相成候時日迄之間ニ右樟腦ニ付我商社金ノ利息ヲ負候儀モ御承知有之度候

且又其時日間樟腦之價直十五弗ヨリ十三弗六十二セントノ差異ニ相成候段申上度候

其餘稅關ヨリ右樟腦請取候節其內四箱開展シ最初稅關ニテ取押相成候砌詰込有之候樟腦之代リニ鹽ヲ以テ詰變ヘ有之候段申上度候

且又稅關ヨリ我等ヘ對シ差向ラレタル請求ニ依テ貴下ニテ御裁判ニ相成候御裁書先方ヘ御渡シ後之事情篤ト御注意可被下稅關ヨリ右ノ樟腦引渡相成ヤ否東京租稅本寮ヘ上裁ヲ可請旨口演ニテ御告知ニ相成候

貴下ノ裁判ハ十二月一日ニ御裁決ニ相成候同十五日右ノ樟腦尙取押ニ相成候道理辨解爲可有之

貴下ヘ申出候得共稅關ヨリ十二月十八日迄樟腦引渡ニ不相成候

前件ニ付稅關ノ取扱甚以不法ニテ最初ニハ貴下ノ裁判ニ承服セスシテ被告人ヨリ稅關ヘ對シ請求申立候節ニ至リ右樟腦引渡候樣承諾ニ相成候兼テ以前右樟腦之吟味致置候處右之內四箱ハ箱中詰込品ノ代リニ鹽ヲ入レ置有之候

右ノ事件可然御辨判被下度御依賴ニヲヨビ候以上

エドワルト、フキセル商社

七百六番ヨリ八百三十三番迄㊞印ノ日本樟腦壹百二十八箱非法ニ取押之義ニ付斤量利息及相場ニ關スル損失等エドワルト、フキセル氏商會ヨリ大阪稅關長ヘ對シ告訴ハ及候申立書

㊞印七百六番ヨリ八百三十三番迄一百廿八箱ノ樟腦根元之斤量

正味一萬四千一百廿八斤半

斤量之減少正味斤量ニテ

一百六十六斤半

但シ百斤ニ付十五弗ノ價ニテ

〆貳拾四弗九拾八錢

相場變化ニヨリ損失〇一千八百七十四年十二月一日ヨリ仝十八日迄即稅關ニテ右樟腦引渡相否ノ時間中相場ノ差異ハ十二月一日ニ拾五弗ノ價値有之候ニ同十八日ニ至リ十三弗六十二「セント」ニ相變シ百斤毎ニ一弗三十八錢（セント）下落シ總斤高壹萬四千壹百二十八斤半ニ付其損金ハ

壹百九拾四弗九拾セント

毎百斤拾三弗ノ價ニシテ總金二千百十九弗貳拾九「セント」ノ利金一ケ月壹分ノ割ニテ十八日間ニ付

十二弗七十一セント

㊞印七百貳十壹番七百三十六番七百四十一番七百九十七番右四箱根元正味四百三十九斤半請置候處大阪稅關ニテ引渡ノ節ニハ鹽ヲ詰置有之依テ毎百斤拾五弗ノ價ニ付

六十五弗九十三セント

總〆

二百九十八弗五十九セント

問題の根本たる反則事件にして未た最後の處分を決せさるに先たち茲に端なく詰替問題の好口實を與へ渠「フキセル」商社は却て稅關は故なく樟腦を抑留して其引渡を拒否し加ふるに不法の取扱をなして非常の損害を生せしめたりと稱し領事も亦極力之を庇護して其主張を貫かしめんとするに至れり今渠等の主張するか如く果して稅關か不法の處置に出てたるか否やは上來掲くる所の彼我の文書を見れは自ら明瞭にして而も其要求する所の損害額は事實の計算に出てたりとするも之を以て直ちに稅關をして賠償せしめんとするか如き渠の無法も亦極まれりと云ふへし翌八日領事は更に吾に書を致して曰く

於兵庫大阪貌列顚皇帝陛下領事館兵庫一千八百七十五年第一月八日

大阪稅關ニ御留置相成候樟腦百廿八箱ノ内四箱引取可申樣イー、フキセル商會へ申渡方ノ儀ニ付當月七日ノ貴翰ノ御答トシテ「フキセル」商會ヨリ荷物大阪稅關ニテ御留置ニ相成候儀幷利金等之儀及ヒ大阪稅關ニテ右荷物御渡ニ相成候節以前詰込有之候樟腦ノ代リニ海鹽御詰變ヱ有之四箱ノ代價ノ儀ニ付稅關へ同商會ヨリ請求ノ申立書封シ込差進候昨日付ノ第四號ノ愚札ノ旨趣尙篤ト可申上候右ハ以前同商社ノ召使歐人「アロン」ト申者以前大阪稅關へ右荷物ノ手數ヲ請候節ハ樟腦詰リ居候事ニテ卽同人同稅關へ荷物差出候前相改候處總箱中ニ樟腦有之候趣拙者ノ眼前ニ於テ右ノ趣口書ヲ以テ之ヲ證セリ前件ハ全右荷物通關御障拒ヨリシテ自ラ其補償ヲ逃ルヘカラサル樣立至リ候故同商社ヨリ日本政府へ右之代價拂戻之儀請求致候儀至當ノ譯ト奉存候以

上

英國代辨領事

エ、エー、エンネスリー

大阪稅關長

長岡租稅權助貴下

如斯領事は渠「フキセル」商社の爲めに屢々吾に交涉して其賠償を迫り而かも反則事件に關する吾の要求に對しては旣に殆んと之を忘却せるもの丶如し茲に於て我稅關は同月十一日を以て先つ其無法を難詰し且つ渠か要求を拒絕して曰く

大阪稅關ヘ僞リノ告書差出セシ樟腦百廿八箱之高ニ生シタル損耗ヲ「フキセル」商會ヨリ申出シ勘定書相添御申越ノ本月七日附之貴翰落掌致シ候

去月三十一日附本月十一日附兩通ヲ以テ右樟腦滯リ之次第且ツ滯ヨリ同商社ニ受ケシ都テノ損耗ヲ引請ノ儀ハ難相成段申進置候

最初右樟腦之屆ニ僞リノ告書ヲ差出セシト貴下ノ裁判廳ニ於テ御取極有之已ニ貴廳ニ於テ同商會ヨリ參拾弗ノ過料差出シ候樣御裁斷有之候得共同商社ヨリ差出置候告書ハ不正ニシテ最早用立不申其告書之品物ニ付損耗被申懸候筋ハ無之候

「フキセル」商社右樟腦屆方ニ正敷告書差出シ有之候間右荷物ニ付法律上ニ於テ告書ヲ差出サルモ同樣ノ譯ニ有之候故同商社全ク貿易規則第三條ノ六則ニ記載シタル明文ヲ相守候義ヲ自ラ相怠リ候義ニ有之候

且又此節同商社ヨリ初テ二百九十八弗五十九セント稅關へ罰金之義訴出候處右ハ定テ正當ノ訴ト思考シテ貴廳へ訴出候事ニ可有之候

本月七日同商社ノ罰金申立ニ御差添ノ貴翰中右ノ罰金ヲ拙者吟味致候處事實相違無之尤ニ有之候間右惣高二百九十八弗五十九セント何卒當領事館へ御送リ可被下ト有之得候共右ニテハ其損

耗罰金ノ引受ハ猶更難相成其故ハ右罰金同商社ヨリ貴館ヘ訴出候儀承リ候ハ今般始メテニヲ且此事件ニ付正シキ吟味御取掛ノ御報知モ無之ニ付是迄承知不致候
貴下之裁判廳ニ於ヲ如何ナル道理又ハ如何ナル法則ニ基キ拙者右商二百九十八弗五十九「セント」ヲ貴下ノ領事館ヘ可相納哉且如何ナル正シキ御取計ヲ以ヲ右商ハ事實相違無之尤ノ儀ト貴下ノ裁判廳ニ於ヲ御決定有之候哉御告諭被下候樣偏ニ相願候拙者ハ右罰金ノ儀ニ付聢トシタル證據モ又原被告共正シキ說明ノ御聽糾モ又正シキ裁判廳ニ於ヲ裁判有之候儀未ダ承知不致候同商社ノ罰金ハ引請候儀決シテ難相成候ニ付右ニ拙者ノ道理申述候通リ貴下ノ領事館ニ二百九十八弗五十九「セント」ヲ指出候樣御申越ノ義ハ更ニ承諾難致候
右及回答候拜具
明治八年一月十一日

大阪稅關長
租稅權助　長岡義之

英國代辨領事
エ、エー、エンネスリー貴下

本事件に對する吾か當局は終始一貫毫も讓るなきの態度に出てしは元と正當の理由あるに由ると雖とも然れとも徒らに兩者相執りて下らさるを以て遂に之を中央政府の手に移し之か裁斷を仰くことゝし茲に稅關對領事館の交涉を中止せり

第三章　雜件

十三、服制及給與　大阪運上所開局の當初より明治六年の初めに至るまては所員一般に服制の定めなく官吏は羽織袴水夫以下の雜役は何れも法被股引等の如く要するに日本式の服裝を出てさりき

從是先き明治四年橫濱運上所に於て監船吏巡警卒を置くに當り服制規範なるものを定め初めて洋裝の服制を設く越へて翌五年十月監吏課の新設と同時に巡警卒監船吏を海陸監吏と改稱するに及ひ大阪稅關も亦監吏及ひ水夫定人足ひ服制を定めんとして先つ橫濱稅關に問ふ所あり橫濱稅關は直に之に回答して曰く

（前略）巡警監船兩課ヲ監吏課ト改稱ニ付制服ノ儀云々ト御申越ノ趣ハ先般於當關本寮ヘ申立是迄ノ巡警課ヲ海陸監吏ト相改候儀ハ本省回議濟ニ相成候得共右回議面末文ニ當稅關ニヲイテ當分試檢之上委當ヲ得候ハヽ正院ヘ相伺云々ト有之候ニ付當時海陸監吏之方法專ラ取設中ニ付彌委當ヲ得候上ハ尙本寮ヘ申立本省ヨリ正院ヘ伺濟相成候ヲ各開港場ヘ夫々御達シ相成候手續ニ付夫迄之處ハ是迄通御處分相成可然ト存シ是亦水夫定人足着服之儀ハ別紙之通ニテ代金ハ假定額金之內ヨリ仕拂候樣ニ有之候此段御回答オヨヒ候也

壬申十月十九日

大阪運上所御中

租稅權頭　中島信行

水主渡シ洋服御入用書

一金三十七兩永二百十文

冬服無印脊廣ズボン

但シ一人ニ付金貳兩永百九十文

租稅權頭　中島信行

內譯

一紺雲齋代銀六十四匁八分　ブツカブリ背廣一枚
但シ鯨一丈二尺遣一尺ニ付銀五匁四分　ズボン一ツ
一白生絲フランネル　金巾　代銀六匁　背廣筋地ズボン筋地背廣ズボン裏地
一淺黃木綿代銀二十五匁六分　鯨一丈六尺

但シ一尺銀一匁六分
一仕立手間牡丹紐共代銀三十五匁
但一人前金二兩永百九十文
定人足渡シ洋服御入用積書
一金二十九兩三分永百五十九文
但シ一人前金二兩一分銀三匁四厘ッヽ
此　譯
一紺木綿代銀三十三分五分四厘　背　廣　一　枚
但地遣ヒ鯨八尺六寸一尺ニ付銀三匁九分　同　裏　地
一花色木綿代十三匁六分八厘
但鯨三尺六寸一尺ニ付銀三匁八分　ズ　ボ　ン
一紺木綿代銀四十二匁九分
但切遣ヒ鯨尺一丈一尺一尺ニ付銀三匁九分
一花色木綿代銀二十二匁四分二厘　同　裏　地
但切遣ヒ鯨五尺九寸一尺ニ付銀三匁八分
一仕立手間牡丹鐵物付代二十五匁五分

但一人前々書之通

同年十一月横濱稅關に於て監吏課の新設に伴ひ前きの監船吏巡警卒の服制を廢し新に監吏總長以下階級に據れる一定の服制を定め次て翌六年一月監吏課章程の發布せらるゝに及ひ大阪稅關は同年二月横濱に倣ひて服制規範を定めたり之れ當關に於ける監視官吏服制の嚆矢なりとす

服制規範

第　一　條
一監吏服制圖式ノ如ク確定ス故ニ公務中他ノ衣服ヲ着スルコトヲ禁ス

第　二　條
雨天ノ時ハ制限ノアル雨衣ヲ眞スヘシ雨衣制限圖式ノ如シ

第　三　條
制服ノ外ヲ着スルコト嚴禁タリト雖トモ日出沒後ハ外套及ヒ其他ノ衣服ヲ着スルコト隨意タルヘシ然レトモ濶袖巨裳ノ服ヲ着スルヲ許サス

第　四　條
中監吏外船貨藏ノ固封ヲ開鑰スル爲メ各船ヘ往ク時ハ日出前或ハ日沒後ト雖トモ必ス制服ヲ着スヘシ

第　五　條
制服ハ各自ノ所有ト雖トモ公事ニ關シ毀傷スル時ハ課長之ヲ辨時ノ上至當ノ所置アルヘシ
但私事ヲ以テ之ヲ汚穢シ其儘修繕ヲ加ヘス不體裁ノ衣服ヲ穿ツ者ハ至當ノ罰法アルヘシ

第　六　條
衣服料トシテ第一圖表ノ金額ヲ月給ノ内ヨリ積立第二圖表式ノ如ク帽及ヒ制服等課中ニ於テ調整シ渡スヘシ其積立金ノ出納ハ各自ニ了解ス可キ樣手簿ヲ製シ之ヲ記寫スヘシ

第　七　條
監吏ノ積立タル金ハ月々ニ利倍シ第二圖定額ノ代價ニ過タル上等ノ品或ハ他ノ必用ノ品ヲ整ヘ渡

スヘシ

第八條

當官ヲ轉免スル時ハ衣服ハ當人ノ所有トシ衣服代價積立金ニ過ルアレハ之ヲ算計シテ渡スヘシ若シ不足スル時ハ貯備金ヲ以テ償シムヘシ貯備金ニテ尚不足スレハ所持ノ衣服ハ相當ノ價ヲ以テ買上ヘシ

第九條

罪アリテ職ヲ免スル時ハ衣服ハ取上ケ積立金ハ沒收スヘシ

右服制規範長官ノ許可ヲ經テ確定スル所ナリ各自能ク之ヲ遵守シ必ス違背スルコト勿レ

明治六年二月

監吏課長

第一圖

職名	月給	積立 貯備金	積立 衣服料	所得
大監吏	貳拾參圓	貳圓	貳圓	拾九圓
中・監吏	拾六圓	壹圓	壹圓五拾錢	拾貳圓五拾錢
小監吏	拾參圓	壹圓	貳圓	拾圓

第二圖

制服	品	渡ス可キ數	一個ノ價	年計	一ヶ月割
帽	上紺羅紗裏布海氣印黒毛織	一ヶ年一	壹圓	壹圓	
冬帽	紺羅紗裏布褊子澤井印ハ黒絹ヅボン霜降	同一	拾貳圓	拾貳圓	
夏服	單	同一	七圓	七圓	

第三圖

外套	霜降羅紗兩鉛印ハ黒毛織	同二ヶ年一	五圓	貳圓五拾錢
雨具	ゴム引	同	一參圓	壹圓五拾錢
通計				貳拾四圓

（服圖略ス）

同年五月に於て大中小監吏を除き正副監吏長の夏服制を定められ翌七年二月に至り大監吏は其職務外國船の尋問及其他の場合に於て外國人に應接するにあるを以て特に其服制を改正するの要ありとなし租稅寮より左の如く達せられしすへて横濱稅關の制に倣はしむ卽ち

第十五號

大監吏制服ノ儀從來中小監吏同製ニ付外國人接對尋問等ノ際不都合ノ廉有之趣ヲ以テ別紙雛形ノ通大監吏ニ限リ改服致シ度段横濱稅關ヨリ申出之通リ許可相成候條同樣改服可致此段相達候事

松方租稅頭

（別紙雛形略ス）

然るに明治九年七月廿九日付を以て吉原租稅頭より左の如く達して大中小監吏の夏略服の調製を許せり

監吏其製服ノ儀ハ兼テ一般ノ定則モ有之候處夏季ノ節羅紗服ニテハ炎熱難堪自然病患ニ罹リ候樣ノ儀モ有之候ヤニ相聞ヘ候ニ付炎暑中ハ別紙ノ雛形ニ倣ヒ略服調製着用爲致候不苦候條適宜施行可被致此旨相達候事

（別紙雛形略ス但シ背廣形立襟ニシテ上衣袴トモ白リンネル）

越へて十年大藏省官制の改正に伴ひ同年五月監吏總長以下の職制を廢して更に監吏監吏補を置かれ官等月俸幷に服制を定めらる(本章第三項參照)其服制は左の如し

監吏服制表

帽	紺羅紗	夏季白亞麻布ヲ以テ覆
	周圍章	銀線一條　幅四分
	鈕釦金色	徑四分數二個
上衣	紺羅紗	夏季同品單
	鈕釦金色	徑大小四分七厘數大小四個
胴服	紺羅紗	夏季白亞麻布
	鈕釦金色	徑四分數七個
袴	紺羅紗	夏季白亞麻布

（圖略ス）

監吏補服制表

帽	紺羅紗	夏季白亞麻布ヲ以テ覆
	周圍章	黑色毛繊一條　幅四分
	鈕釦銀色	徑四分數二個
上衣	紺羅紗	毛繊子裏付夏季同品單
	鈕釦銀色	徑大小四分七厘數大小四個
胴服	紺羅紗	夏季白亞麻布
	鈕釦銀色	徑四分數五個
袴	紺羅紗	夏季亞白亞麻布

而して同年六月一日關稅局長遠藤謹助の達(本章第三項參照)を以て監吏の制服は自辨とし監吏補の制服は官費を以て支給することゝなれり之れと同時に監吏補給與規則を定めらる

監吏補給與規則

第一條　月俸之事

俸給ハ滿一ケ月ヲ以テ定メ拜辭轉免之月ハ在職日割ヲ以テ給スヘシ

第二條　公事ニテ旅行スルトキハ日數ヲ見込俸給二ケ月分マテハ緣替給與スルモ妨ケナシ尙滯在ヲ要スルトキハ右ニ準シテ送致スルコトヲ得ヘシ

第三條　出帳中又ハ願濟歸省中轉免スルトキハ達書到着ノ日迄ヲ計算シテ支給ス可シ

第四條　免職ノ上奉職中ノ事ニ付滯留申付ルトキハ手當トシテ其日數ヲ算シ舊俸ノ半額ヲ給スヘシ
但不正ノ事アルヲ以テ滯留申付ルトキハ一切給セサルヘシ

第五條　病氣引又ハ父母看病及ヒ墓參等願ノ上休暇ヲ賜フモノ及ヒ忌引ノモノハ一般ノ定則ニ依テ月俸ヲ給スヘシ
但病氣ノ者到底奉職ニ堪ヘサル見込アラハ日數ノ多寡ニ拘ハラス退職セシムヘシ尤職務上ニ於テ傷ヲ被リ療養スルモノハ日數ノ長短ヲ問ハス全額ヲ給スヘシ

第六條　公事失錯等ニテ糺問中ハ月俸全額ヲ給ス又私事ニ渉ル糺問或ハ預ケ中或ハ事故アリテ出仕差止ルモノト雖トモ日數七日迄ハ全額ヲ給ス然レトモ八日以上ニ及フトキハ月俸日割ノ五分一ヲ給スヘシ其無罪ニ歸スルトキハ其減額ヲ追給スヘシ但處刑中ハ一切給セサルヘシ

第七條　免職スルトキ滿二ケ年以上勤續ノ者ヘハ成規ノ通滿年賜金相渡スヘシ

第　八　條　被服支給ノ事

監吏補ノ被服ハ現品ヲ以テ別表保存期限ニ照シ給與スヘシ
但本條支給ノ分破損スト雖輒ク換與スルコトヲ許サス然レトモ職務ニ關シ事情已ムヲ得サルモノハ檢查ノ上換與スルコトアルヘシ

第　九　條

監吏補ノ被服渡濟ノ後別表保存期限中轉免スルトキハ其現品ヲ返納セシムヘシ

第　十　條　旅費ノ事

公事ニテ旅行スルトキハ一般定則ノ旅費ヲ給スヘシ
但新募或ハ免黜スルトキハ總テ給セサルヘシ

被服保存期限		
帽	一	ケ年
上衣	六	ケ月
冬胴衣	六	ケ月
冬袴	六	ケ月
夏上衣	六	ケ月
夏袴	六	ケ月
夏胴服	六	ケ月
外套	一	ケ年
雨衣	一	

翌明治十一年五月廿四日關稅局長吉原重俊より五百八十二號達を以て右給與規則中左の如く改正せり

第　一　條

但月給官吏ニ轉任スル時及ヒ免職後其前後半月内ニ月給官吏ニ再任スルトキハ一般ノ定則ニ依ル

第　三　條

出張中又ハ願濟歸省中轉免スルトキハ達書到着ノ日ヲ轉免ノ日トシテ支給スヘシ

第　四　條

免職之上奉職中ノ事ニ付滯留申付ルトキハ手當トシテ其日數ヲ算シ舊俸之半額ヲ給ス若シ滯留中月給官吏ニ再任スル者ヘハ其月前後半月内ノ滯留手當ヲ給セラルヘシ
但シ不正ノ事アルヲ以テ滯留申付ルトキハ一切給セサルヘシ

第　七　條

但他之官吏ヨリ轉任及ヒ他ノ官吏ヘ轉任スルトキハ一般ノ年限（滿一ケ年ニ依リ）ニ依リ通算シテ相渡スヘシ

同十三年二月廿日其第十條を「公事ニ旅行スルトキ並ニ滿二ケ年以上勤續者免職スルトキハ一般定則ノ旅費ヲ給シ其他一切給セサルヘシ」と改正し翌十四年三月廿四日滿二ケ年を滿五ケ年と改む而して十三年十月被服保存期限表中冬上衣冬胴服冬袴の各保存期限六ケ月を二ケ年に同外套一ケ年を二ケ年と改め翌十一月十八日左の如く達して監吏補の服地を改めしむ

第一〇八二號

神戸稅關
大阪稅關

監吏補夏服ハ來十四年ヨリ總テ紺セルジスニ改正候條此段相達候事
但保存期末マデ舊服ハ混用不苦候事
明治十三年十一月十八日

關稅局長　蜂須賀茂韶

次テ明治十六年九月關長より監吏補被服現品給與規則と題して左の如く達せり

監吏補被服現品給與規則

第　二　條
監吏補制服幷外套雨衣總テ現品ヲ以テ給與ス

第　三　條
被服保存期限中轉免スルトキハ直ニ其現品ヲ返納スヘシ

第　四　條
被服保存期限中被服ヲ汚穢毀損スルモ之ヲ授與スルコトヲ許サス然レトモ其原由職務上ヨリ生シ事情止ムヲ得サルモノト認定セシ場合ニ於テハ之ヲ換與スルコトアルヘシ

明治十六年九月十二日

大阪稅關長　顯川君平 印

降て十九年一月稅關監視課職制幷に章程の廢止により時の主稅長官より達せられたる第二項（前章第三項參照）に依りて監吏補に對する月俸旅費の給與法は終に廢止せられたり茲に一言すへきは先きに述へたるか如く水夫其他人足等の如きは運上所時代より法被股引の服裝なりしか明治七年一月大監吏の制服を改正すると同時に初めて水主小頭以下の服制を定めらる此服制に依れば紺大羅紗地の「ションヘル」形にして帽子は水主小頭及水夫器械方は楕圓形にして印なく水夫は普通水兵形にして大阪稅關と現せる金字橫に印せしむ

十四、監視官吏の證票　前項に於て記述したる如く稅關監視官吏は夙に制服の設けありて日常公署にありて事務を取れる間は敢て稅關吏たるの證明を要せすと雖とも密行偵羅の際又は偶然密商逋稅等の違反行爲を發覺せる場合に於て直に物件を差押へ若くは其他臨機の處分によりて警察權を執行せんと欲するも犯者は其稅關吏たるを知らす又は之を知ると雖とも官吏たるの證明なきを奇貨として明治十五年十二月時の橫濱稅關長より監吏監吏補に對する證明章制定の儀を上請する號あり翌十六年二月關稅局長の指令を以て之を許可し各港稅關に於て之を施行するに至れり今左に其上請書幷に指令書を揭けて之を示さん

第六六九號

稅關監吏又ハ監吏補印章携帶ノ方法御設定有之度ニ付上申

橫濱稅關

稅關監吏稅關所管卽チ見張所若クハ碇泊船上等ノ外各地ニ於テ密商脫稅ノ規則違犯者ヲ看認メ之ヲ押獲セントスルニ於テハ犯者其稅關監吏タルヲ知ラサル者アリ又ハ已ニ稅關監吏タルコトヲ曉ルト雖トモ故ラ其誰何ヲ咎ムルモノ之アリ因テ稅關監吏タルヲ唱フレトモ尙其證據ナキヲ口實トシテ押獲ヲ肯セス或ハ腕力ヲ將テ抗拒致候者モ有之爲メニ如何樣ノ被害アランモ難計ト存候條此場合ニ臨ミ稅關監吏タルコトヲ證明スル爲メ別紙雛形ノ如キ印章携帶セシメ度就テハ十四年乙第三十三號大藏卿御達租稅局員諸稅監査ノ爲巡廻ノ者ヘ印章提携被致候事ノ如ク各開港場一定ノ御達有之候ハヽ實際至極ノ好都合ト相考申候右御裁可相成度此段及上申候也

十五年十二月一日

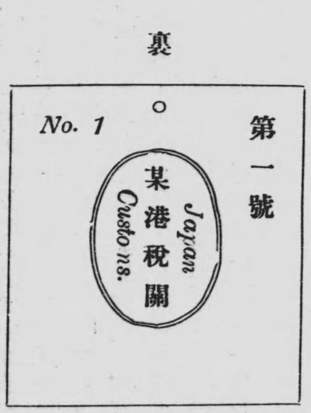
橫濱稅關長　有島武

關稅局長　中野健明殿

監吏補へ携帶セシムル印章ノ雛形

表

裏



曲尺三寸

表面ノ文字ハ漆ヲ以テ其剝脫ヲ止メ裏面ノ印ハ燒印ヲ以テ之ヲ捺ス印章ノ地ハ象皮ヲ以テ之ヲ製シ革ノ紐ヲ付ス

指令

上申之趣其稅關ニ於テ印章調製携帶被致候樣ノ御取計候尤地方廳へ其關ヨリ通知致候儀ト可心得候事

明治十六年二月十三日　　關稅局長　中野健明

十五、監視官吏の寫眞を徵す　其何れの頃なりしや詳ならすと雖とも運上所時代より監視監吏を拜命すれは必す其寫眞を徵せり蓋し監視官吏の風紀を振肅し各自の責務を重せしむるの目的に外ならす明治六年十月神戸稅關よりの照會に曰く

其港在勤監吏副長吉田一擧中監吏飯崎源橘右ノ三名ノ寫眞未タ不差出候間早々一葉宛差出候樣御申達有之度且已來監吏へ新規拜命之者有之候ハヽ其都度ニ先例之通寫眞一葉宛差出候樣イタシ度此段申進候也

明治六年十月十一日　　大阪稅關文書課御中

如斯にして監視官吏拜命の都度某寫眞を徵せしめたりしも今之を廢したる年月等詳ならす

十六、監吏補の營業を禁せしむ　明治十年一月大藏省官制改革に伴ひ監視官吏として監吏監吏補の職制を定め監吏を一等より九等に監吏補を一等より四等に分ちて監吏は皆判任とし監吏補は悉く等外吏に準せり當時等外吏と云ふは今日に於ける所謂準判任若しくは雇員の地位にありて特別の規定なき限りは官吏の身分を有せさる一般私人と等しく公務の傍ら商業其他自由の業務に從事することを得しなり然れ共監吏補は一面に於て純然たる關稅警察機關として密商逋稅を取締るの地位にありて而も一面に於て營業の自由を許すときは利の向ふ所必すや幾多の弊害を釀成するの恐れなしとせす茲に於て明治十一年六月關稅局長吉原重俊より左の達を以て斷然之を禁止せしむ

第六二號

監吏補之儀ハ准等外吏ニ候得トモ商業爲相營候テハ自然何等ノ弊害釀成候哉モ難計職務上ニ差支候間營商業致禁止旨過般大藏卿ヨリ太政官へ被相伺候處今般伺之通御聞屆相成候條此旨相達候事

明治十一年六月一日　　關稅局長　吉原重俊

十七、監吏補と兵役の免除　明治十一年十二月四日太政官達を以て一等監吏補以下の官等を改正して等外一等以下等外四等と定められるゝに及ひ神阪稅關長は直に監吏補免役の件に關して左の如く伺をなしたり

元第百九號

監吏補官等改定ニ付兵役ノ儀伺

今般大藏省中一等監吏補己下官等御改定之儀太政官第四十九號ヲ以テ御達相成候然ルニ一等監吏補己下ハ從來兵役免除不相成候處等外ノ儀ハ明治八年十一月第百六十二號ヲ以テ御布告相成候徵兵令第三章常備兵免役概則第三條中免除ノ部ニ有之ノ今般監吏補之儀免除相成候儀ニ可有之候哉其邊班然致兼候間右心得方速ニ御指令有之候樣致度此段相伺候也

十一年十二月十七日　　神阪稅關　長岡義之

關稅局長　遠藤謹助殿

而して之に對する指令は左の如し

第一五八號

伺之趣監吏補ハ等外吏員タルヲ以テ勿論兵役免除ノ儀ト心得ラルヘク事

明治十一年十二月廿四日　　關稅局長　遠藤謹助

然るに明治十二年徵兵令の改正によりて判任以上の官吏は當然兵役を免除さるゝことゝなりたれとも當時監吏補は等外吏にして新徵兵令によりて再ひ徵募せらるゝことゝなりしを以て同年十一月横濱稅關より監吏補免役の義を上請する處ありしか翌十三年九月に至り蜂須賀關稅局長より左の如く達せられ適齡者は其都度上請の上免役せらるゝことゝなれり

第二八二號

監吏補兵役免除相成度儀別紙ノ通横濱稅關上請ニ對シ及指令置候條此旨相達候事

明治十三年九月十四日　　神阪稅關

關稅局長　蜂須賀茂韶

（別紙）

第七五一號

監吏補兵役免除相成度儀上請

本年第四十六號ヲ以テ徵兵令改正幷ニ從前ノ布告達及指令ハ渾テ廢止ノ旨公布相成其令ノ第二十八條ニ官吏判任以上ハ國民軍ノ外兵役ヲ免スト有之候ニ付テハ去ル十一年第一五八五號ヲ以テ御達ノ神戸稅關伺ヘ御指令監補兵役免除ノ云々モ茲ニ廢止セラレ今後ハ他ノ等外吏同樣徵募セラレ候儀ト存候然ル處稅關監吏補ハ召募規則ニ遵テ二ケ年以上勤續差支ナキモノヲ撰ミ之ニ加フルニシテ這ハ之レ畢竟多年勤續實務ニ慣熟セシメンノ主意ニ有之殊ニ稅關官吏ハ監吏補ヨリ登用スヘキ御達シ內規則モ有之候旁ラ青年ノ人才ヲ撰ヒ往々皆登用可致趣向モ有之候得ハ恰モ稅關官吏ノ生徒ニ外ナラス夫レ如此前途望ミアル監吏補ヲシテ向後兵役ニ徵セラレ候テハ從來ノ趣向モ壽餅ニ屬シ甚遺憾ノ次第ニ候是ニ於テ自今ハ常備兵役ヲ畢リシモノヲ撰用セン乎尙ホ豫備後備ノ期限內ハ每歲一度技藝復習トシテ召集セラルヽアリ日課本務ノ定員ハ缺クヘカラサルノ監吏補其爲メ差閊ナキ不能然ラハ兵役十年滿期ノモノニ限リ選拔センカ抑モ監吏補ハ日夜風雨寒暑ヲ冒シ海陸ニ立監セシムルヲ以テ稍々中年ヲ過ルモノ何ソ能ク之ニ任セン正ニ兵役年間ニ於ルカ如キ青年血氣ノモノニアラサレハ其職ニ堪ヘサル事ニ有之候情實如斯ニ候ヘハ到底兵役免除ヲ請ハサルヲ得ス最モ監吏補ノ儀ハ各港ヲ擧ケテ凡ソ二百餘名其中ニ就テモ誠ニ僅々ノ人數ニ候ヘハ之ヲシテ免役セシメラルヽトモ敢テ害ヲ生スル程ノ影響モ有之間敷哉ニ被存候條前陳篤ク御酌量特別ノ御詮議ヲ以テ監吏補兵役免除相成候樣致度依テ此段及上請候也

明治十二年十一日廿二日

關稅局長　吉　原　重　俊　殿

伺之趣徴兵年齢相當ノモノ有之節ハ其都度特ニ免役ノ儀可上請儀ト可被相心得事

但鑑定役見習ノ儀モ可爲同樣事

明治十三年九月十四日

横濱稅關長本郷盛亨代理

副　長　葦　原　清　風

關稅局長　蜂　須　賀　茂　韶

大阪稅關沿革史　第二期

第八篇　貨　物

第一章　輸出入及回漕

一、輸出入手續一班　貨主若しくは引受人より提出する輸出入貨物の申告或は願書類は曩きに開港の當時規程配布せる一定の書式に據らしめたるも其外人よりするものは常に自家慣用の書式に一任せるを以て別に印刷せる用紙を具へて飜譯記入して執務上の便に供せり卽ち

（用紙半紙）

於大阪千八百七十　年第　月　日

運上所司長

左之荷物

品物	重、數、尺	定額、元價	稅

船

免許願

商會

月　日			譯
金　税			
内　本			
増			

其他清國人の爲めに亦左の用紙を備へ往々商人自身をして記入せしめたる事もありしといふ（同　上）

左開貨物

月　日

海關長官

祈卽稟准爲感

號　具

貨　名	重、數、尺	定額、元價	税　餉

合　税			
内　本			
増			

右申告書或は願書は之を檢査課に提出せしめ改品係の檢査を經て誤謬訂正の上檢査課より仕入書と共に收税課に致し收税課は之に據りて賦税徵收の手續を了し領收證及免狀を作り庶務課を經て官印を調へて貨主に交付し貨主は更に之を上屋係に提出し貨物の記號番號に對する檢照を得て始めて船積若しくは引取を許可せらるゝなり其他數量の一定せる定額税品の如きものは別に改品係の手を經すして檢査課より直に收税課に送付し又輸出入免税品は唯收税上の手續を省略せるのみ

二、各申告及回漕免狀書式　是より先、外人の用ゆる各書式類は常に一定せさりしを以て整理上甚た不便尠からさるを以て遂に五年十一月始めて書式を改定し之を在留各國領事に通告し併せて之に關する注意事項をも布告せり

以書翰致啓上候然者來ル一月一日ヨリ當港輸入出品陸揚船積書式改正致シ候間其段貴國商民共エ御布達相成候樣致度此段御掛合申進候謹言

壬申十一月十八日　　瓜生寅

各國領事貴下

布告寫

布告第一

來ル一月一日ヨリ荷物陸揚船積屆者條約税則ニ基キ取設ケ候當然之書式認ムヘシ右書式ハ税關ヨ

ノ相渡其爲價ヲ差出ニ不及事

右書式ハ陸揚船積荷物免狀願ニモ兼用致シ於稅關右書式ニ稅銀記載可致事

右差出書相改綴込候上ニテ免狀相渡スヘシ且其掛之者相當之稅銀算計受取候上ニテ其證ヲ相渡可申事

稅濟之後又ハ都合ニ因テ其以前タリ共改ヲ請荷物引受又ハ船積差許可申事

右ハ稅關諸事務取扱ヒ辨理之爲取設候條商社中堅ク注意可致事

神戸大阪稅關長官　瓜生寅

布告第二

來ル一月一日ヨリ稅關ヘ差出スヘキ免狀願書ニ從價品ハ勿論定額無稅品共悉ク其元價ヲ記載可致事

千八百七十二年十二月廿七日

神戸大阪稅關長官　瓜生寅

布告第三

一稅關ヘ荷物屆方ニ付過誤遲滯差生候ヲ防キ且荷改荷物請取渡ヲ速ニセン爲メ以來右屆書稅關ヘ差出スヲ以前書載方遺漏無之樣可致事

一從價定額無稅品共外國ヨリ其荷物積出迄ノ諸雜費口錢トモ差出書ニ加算スヘキ事

但船賃幷海上請負料ハ除ク

一稅關ヘ屆書差出候節ハ貿易規則第三則ニ基キ其荷物ノ仕入書（インブオイス）原書ヲ相添可差出候事

然れとも當時外商人にして自家の用紙を襲用せるもの永く絶へさりしと雖も該書式にして體を具したるものは概ね之を默許したりき今改定の畫式を示せは左の如し

輸出申告書（縱八英寸五橫十英寸用紙青色洋紙）

EXPORT. APPLICATION FOR PERMIT

Name of Applicant.....　Osaka.....187

To the superintendent of customs,

Please grant a permit to.....per.....the following Goods

Marks and Numbers	Boles Cases, & C.	Description of Goods	pieces	yards	Invoice Piculs, catties	weight. Piculs, catties	Declared Value	Total Itzibous	Duty	Total Itzibous

.....declare the above to be a true statement

At Exchange.....=Mex Dollars.....

N. B.—Please state whether Boxes, Barrels, Boles, & C, and character of Goods

輸入申告書（同上　用紙白色洋紙）

IMPORT APPLICATION FOR PERMIT

以上同文

輸出申告書（清國人用）　（用紙同上）

左開貨色今欲裝　船駁運　所有稅餉……

海關長官　台照　號具

月　日　經手

貨名	番號記號	數目	重量	定額元價	稅餉

而して輸入申告書は青色洋紙を用ひたり其他

回漕申告書

表面　用紙白色洋紙　横　英寸　縱　英寸

(Translation)

TRANSPORTATION

Custom's No.……　Osaka.……187

Superintendent of Customs

Vessel……, from……　Applicants……

Please grant permit to ship the undermentioned Goods :

Marks and Numders	No. of packages and Description of Goods	No. of pieces	Weight	Value	Rate of Duty	Duty

hereby agree to hand in to the Custom-house at……　s or Bus

within……days

this date, the permit herewith received, duty—months from Total endorsed by the custom's Authorities—the duty shall be forfeited.

to the Custom's Authorities

裏面

記號番號	箇數品物	小計	斤量	元價	稅額	稅
第	右ハ國、、、

テ朱字）

第百一號

別紙之通今十七日本寮ヨリ相達候間當關印譜相添ヘ御廻シ申候御落掌有之度候也

七月十七日　大阪稅關　諸　務

神戸稅關諸務御中

二伸長官局印章之義ハ兩三日之內調刻致シ押捺ノ上御廻シ申候也　但貴港ノ分モ當方ニ於テ調刻ノ上可差進候

大阪稅關

檢査課

荷物揚卸ノ際本船乘組監吏ヘ諸達ニ用ユ

所管ノ印章二顆

大阪港
運上所
檢査課

（猶大阪港運上所云々トアリ疑フヘシト雖トモ今暫ラク原文ニ從フ）

本課名ヲ以テ各課ニ往復スル文書ニ用ユ

檢査課

收稅課

差出書ト收稅本帳ト押切幷本課名ヲ以各課往復書ニ用ユ

所管ノ印章一顆

收稅課

倉庫課

神戸行改濟荷物

封印ニ用ユ

所管ノ印章三顆

大阪稅關之印

テ朱字）

第百一號

別紙之通今十七日本寮ヨリ相達候間當關印譜相添（御廻シ申候御落掌有之度候也

七月十七日　大阪稅關　諸　務

神戸稅關諸務御中

二伸長官局印章之義ハ兩三日之內調刻致シ押捺ノ上御廻シ申候也　但貴港ノ分モ當方ニ於テ調刻ノ上可差進候

大阪稅關

檢査課

荷物揚卸ノ際本船乘組監吏ヘ諸達ニ用ユ

（猶大阪港運上所云々トアリ疑フヘシト雖トモ今暫ラク原文ニ從フ）

本課名ヲ以テ各課ニ往復スル文書ニ用ユ

所管ノ印章二顆

大阪港
運上所
檢査課

所管ノ印章二顆

檢査課

收稅課

差出書ト收稅本帳ト押切幷本課名ヲ以各課往復書ニ用ユ

所管ノ印章一顆

收稅課

倉庫課

神戸行改濟荷物封印ニ用ユ

所管ノ印章三顆

借庫諸荷物預ノ證書ニ用ユ

本課名ヲ以テ各課往復書ニ用ユ

文書課

本課名ヲ以テ本寮其他往復書ニ用ユ

本關名ヲ以テ諸方往復文書ニ用ユ

倉庫課

所管ノ印章二顆

文書課

諸務課

輸出入荷物免狀幷ニ收稅請取證書ニ用ユ

差出書ト免狀幷收稅請取書割印ニ用ユ

輸出入荷物稅濟免狀ニ用ユ

本課名ヲ以本寮及其他諸往復ニ用ユ

所管ノ印章四顆

字體不明

稅濟

諸務課

監吏課

本課名ヲ以テ各課往復書ニ用ユ

所管ノ印章二顆

大阪税關

監吏課

所管ノ印章一顆

字體不明

諸免狀幷借庫預リニ用ユ

長官局

槍口封印ニ用ユ

五、回漕品假納稅　當時外人の爲めに回漕上の一便法として豫め貨物相當の稅額を假納せしめ各開港場間の貨物回漕を許せり卽ち

稅關布告第四

第六月一日ヨリ日本他ノ開港場ヘ日本產物品ヲ輸送センコトヲ願フ外國商民ハ獨逸貿易規則第三則ニ基キ其品相當ノ稅金ヲ預ケ置大阪港ヲ除クノ外六ケ月中ニ輸送先ノ陸揚證書ヲ差出スヘシ若シ期限後ルヽ時ハ差戻サス候事

但大阪神戶兩港ノ間ハ十二日ヲ定期ト改候事

明治六年　月　日

神戶稅關長官租稅助　瓜生寅

然れとも該布告公示の當時に於ては未た是等に關する事實を聞かさりしも後十年六月始めて米商カロル商會より此事を申請せり蓋し大阪稅關に於ける預け稅回漕許可の嚆矢なりとす

天第二十六號

預ケ稅金前拂ニテ其港碇泊ノローピング、セイロル船ヘ荷物積込方之義カロル商社ヨリ別紙譯文之通願出許可候ニ付テハ右預ケ稅金高一千五百弗ニ充サル迄ハ明日ヨリ荷物積込方可被差許尤右金額ニ超過相成候節ハ荷積先差留置直樣電報ヲ以其旨申越候得ハ當關ニテ之カ處置ヲ爲シ其趣通知之上猶荷積可被取計此段相達候也

十年六月六日

神戶稅關長　長岡義之印

大阪稅關御中

尙々其關ニテ相預リ候金之義ハ拙者其關ヘ出頭之節處置可致此段申添候也

（別紙）

於兵庫一千八百七十七年六月六日

兵庫大阪稅關長貴下

當時大阪天保山ニ碇泊セル亞墨船ローピング、セイロル號ヘ荷積便利ノ爲メ預ラスヘキ稅金ノ額ヲ日本雇主ヘ前渡シ致候事ヲ承諾致候

就テハ始終大阪ニ來リ常ニ預稅致候不便利ヲ防ク爲メ一千五百弗ノ金額ヲ御預カリ被下度右金ニテ大阪稅關ノ取立可相成惣稅金ニ相適スルニ充分ニ可有之候得ハ直ニ其稅ニ適スルノ金額ヲ御預可申上勿論右ニ付テノ惣郵便電信賃ハ當方ニテ相辨可申神奈川稅關ニテ加印セシ免狀六ケ月間ニ

返戻不申候時ハ預ケタル金額沒收可相成候且又此特許御與ヘ被下候トモ後日ノ定例トハ存シ不申候拜具

デイビー、カロン商社

船積ヲ捗取ラス爲メ已ニ大阪稅關ヘ四百五十弗相預ケ置申候何卒右金額ハ貴下ノ御狀ヲ大阪稅關長ニテ請取候得ハ同關ヨリ當社ヘ御返却被下候樣致度候

デイビー、カロル商社

此券書御請取不相成候得ハ銀行ニテ引換可申候

是より先、八年七月租稅寮は回漕品預り稅の期限をして各港一定ならしめんとして之を各稅關へ布達せるに神戶稅關は阪神兩港間に於ける該期限に關し從來の如く十二日間を以て期限とせんことを上請して許さる卽ち左の如し

神阪間回漕品預リ稅期限ノ儀ニ付同

第三號付ヲ以テ外國船ニ而彼我人民內地物品ヲ內地乙ノ開港場ヘ回漕シ或ハ輸出禁制ノ物品前同斷ノ節等兩件共乙港陸揚證書爲差出方儀ニ付自今獨逸國奧地利國條約面ニ據リ內外人民ヲ問ハス乙港遠近ヲ不問六ケ月期限ヲ以テ取扱候旨御達ノ趣致了承候然ル處神阪兩港間ノ義ハ明治六年第四號布告ヲ以テ十二日間ヲ限ト定メ實際旅行致來不都合ノ儀モ無之候間外開港場トモ違ヒ最接近ノ地タル譯ヲ以別格トシテ右取扱方從前ノ通御據置相成候樣致度此段相伺候也

八年八月四日

松方租稅頭代理

租稅權頭吉原重俊殿

第七號（朱書）

伺之通可被取計候事

八年八月十二日

租稅頭　松方正義

後十九年五月に預け稅日限を左の如く改定せり

他港稅濟免狀持參無之預ケ稅ノ上引取ヲ願フ者ハ神戶港ハ十二日間他ノ各港ハ三十日間ノ期限ヲ約シ若シ此日限中ニ免狀差出サヽル節ハ預ケ稅返戻ニ不及云々願書ヘ記載致サセ通關ヲ許スヘシ尙他港免狀面ニ相違アルモ亦同シ

六、運賃停滯貨物引留規則の發布　八年十二月二十八日太政官より右開港場に於ける內外商人の取扱に係る運賃停滯貨物の抑留に關する規則を發布せり

第二百一號布告

各開港場ニ於テ內外國人運輸ノ貨物陸揚船積ノ際運賃拂方相滯ニ付貨物引留方要求候者ハ候條此旨布告候事

第一條

凡ソ各開港場ニ於テ內外國人運輸ノ貨物陸揚船積ノ際運賃拂方相滯ニ付貨物引留方要求候者ハ其事由ヲ書面ニ記載シ稅關長若クハ稅關ヘ宛差出スヘシ則荷物箇數記號番號燒印及ヒ荷主輸入人或ハ輸出人乃至引受人ノ名前右荷物運輸ノ船名（若又陸運ノ時ハ其荷車ノ種類幷ニ運輸ノ道筋）及仕出場或ハ仕向場或ハ荷物到着ノ月日及賃錢其他要求ノ金高等ヲ詳記シ之ニ願人又ハ相當ノ代人記名シテ差出スヘシ但內國人ナルトキハ其願書ニ實印ヲ捺シ開港場府縣廳ノ奧印ヲ受ケテ差出スヘシ又其願人外國人ナルトキハ自國ノ領事ノ目前ニ於テ書面ノ趣相違無之旨ヲ誓詞シタルモノヲ出サシムヘシ其證書式左ノ如シ

別紙書面中ノ事柄ハ申立ノ通聊相違ノ筋無之就テハ右書面ヲ以テ願立候金高ハ畢竟拙者方ヘ

受取ルヘキ筈ノ者ニ候間別紙書面中ノ荷物ハ稅關官員方ノ手ヘ相渡候節定法ノ通引留可相成筋ニ有之候仍如件

何　々　港　　何　國　姓　名

第二條

稅關定員ハ都テ右願書類ヘ番號ヲ附ケテ之ヲ貯置キ且此一事ノ爲ニ帳簿ヲ備置キ詳細之ニ登錄スヘシ尤以呂波分ケノ見出シヲ附ケ荷主引受人輸入人或ハ輸出人ノ姓名並ニ其船舶ノ名ヲ記シ置ヘシ

第三條

稅關長ハ願人ヨリ差出シタル書面ヲ落手スルノ後三十日ノ間ハ其書面ニ記載セル荷物ヲ抑留シテ之ヲ引渡サヽルコトヲ得ヘシ但シ願人荷主引受人等一同協議ノ上渡方ヲ請フ歟若クハ此輩ヨリ申出タル訴訟ノ是非ヲ判決スル相當ノ裁判所ヨリ其斷案ヲ申越セルトキハ此例ニ非ス尤此訴訟ハ願人ノ方ヨリ稅關ヘ抑留シテ願出ル日ヨリ少クモ七日ノ間ニ其地ノ裁判所ヘ訴出ヘキモノトス被判所ハ其訴訟ヲ受理スル歟否ハ右三十日ノ間ニ判然スヘケレハ裁判處ニテ右訴訟ヲ受理スル時ハ夫レヨリ以後ハ右訴訟裁斷ノ日迄荷物ハ稅關ヘ抑留シ置クヘシ

第四條

抑留中荷物ノ庫租及其他ノ雜費ハ荷物引取人ヨリ差出スヘシ

第五條

稅關長吏ハ訴訟ニ係ル雙方ノ議論ヲ裁斷スルノ威權ヲ有セス且ツ運賃事件ニ付荷物ヲ抑留スルノ權アリト雖モ其他ノ事故ニ由リ荷物ヲ抑留スルコトヲ願出ルモ稅關ニ於テハ之ヲ取上クヘカラス

後九年二月二日左の訂正を加へ

明治八年十二月第二百一號布告貨物引留方手順第三條中五行（稅關ヘ荷物抑留シテ願出ル）云々ハ（荷物抑留ヲ願出ル）云々ノ誤リ同第五條中初行（稅關長吏）ノ（吏）ノ字ヲ刪除ス

明治九年二月二日　　史　官

是より先、該規則の發布せらるゝや長岡關長より規則施行上の手續に就き質疑を爲して曰

各開港場ニ於テ內外國人運輸之貨物運賃拂未濟ノ間抵當トシテ引留ノ規則御達之義ニ付伺

本年十一月十五日第五十六號ヲ以各開港場ニ於テ內外國人運輸ノ貨物陸揚船積ノ際運賃拂未濟ノ爲抵當トシテ貨物引留方要求候者有之候節取計規則大藏卿ヨリ御達ニ相成候趣ニテ御達ニ相成致領承候然ルニ其御規則實地施行ノ際心得方幷取扱方不了解之件々左ニ

一內外國人運輸ノ貨物運賃拂方相滯候節貨物引留方要求シ得ルノ權利ヲ有スルハ船主船載證書ヲ其貨主ニ附與シ然シテ貨物ヲ運搬スル（郵船或ハ其他船舶海內外諸港ヘ貨物運輸スルノ類）諸船ニ限リ候哉或ハ貨主ノ其船ヲ雇ヒ運搬スル（常港碇舶船ヨリ直ニ貨物ヲ大阪港ヘ、、、、運送ニ用ユル艀船ノ類）艀船主ニ於テモ若シ貨主ヨリ其運賃拂未濟ノ時ハ其貨物稅關ニテ抑留スルコトヲ願訴スルノ權利有之候哉

一若シ前件艀船主ニ於テモ其貨主ヨリ運賃成算セサルトキハ其貨物抑留ヲ願フノ權利有之候節ハ稅關ニハ御規則ニ因リ無論其願主之意ニ從ヒ貨物引留候得共艀船ヲ以テ運送ノ貨物ハ船積ノ際其船載證書ヲ貨主ニ附與セサルヲ以テ陸揚ノ砌貨主ハ斤量等不足セルトテ其運賃ヲ拂ハス船主ハ運賃ヲ拂ハサルヲ以テ貨主ノ曲ヲ訴ヘ稅關ヘ抑留方願出之上之ヲ引留メ其後右事件裁判廳ノ吟味上原告ノ艀主却テ罪ニ歸スル時ハ其貨主ヨリ抑留中ノ損失辨償方必ス艀主ニ對シ之ヲ訴フヘシ然ルニ其艀主直ニ辨償相調候得ハ異義無之候得共艀主ノ業ヲ營ムノ徒ハ大概

ネ貧窶縦ニ生ヲ爲ス者ニ候得ハ結局辨償方差閊候時ハ終ニ其稅關ニ對シ賠償方相訴ヘ可申右等ノ事故差生候節ハ如何取計可然哉且又茲ニ甲アリ幾隻艀船ヲ所有シ乙ノ貨物ヲ運送ノ際最前右一隻ノ內ノ艀夫姦ヲ謀リ其貨ノ幾部分ヲ盜竊セルヲ以テ其後乙ヨリ甲ノ所有セル其他ノ艀船ニ貨物ノ運送ヲ託シ其運賃ニテ前ノ損失ヲ補ハン爲其運賃ヲ成算セサル等ノ義有之甲ヨリハ運賃未濟ヲ以テ其貨物抑留方申出候トキ抔ハ如何取計可然哉右等兩件ハ神阪往復ノ艀船ニテ始終相生スヘキ事件ニ有之候

一貨物抑留ハ運賃ノ金高ト其貨物ノ價直トノ比較ヲ以テ其幾分ヲ引留可申哉又ハ總貨悉ク引留候義カ

一右ノ御規則ハ前件ノ如キ願訴有之節取扱人ノ蹉跌無之爲豫メ之カ規定ヲ設立相成條義カ或ハ右之件々心得方幷取扱振詳細御指令相成候樣致度此段相伺候也

八年十一月二十五日　　租稅權助　長岡義之

租稅權頭吉原重俊殿

之に對し租稅寮より左の指令を與へり

第七十一號

第一條伺之趣ハ郵船其他艀船等ノ細大ヲ不論總テ課運賃拂未濟之時ハ其手順ヲ以テ願出候ハヽ稅關ニ於テハ總テ取立候事第二條ハ第一條之手續ヲ以テ願出候者ハ願主ノ貧富及其他苦情ノ有無ヲ不問願主ノ請願ニ依リ貨物差留可申尤其事當底願主ノ罪ニ歸シ候共素ヨリ稅關ニ於テ被告ノ苦情ヲ聽スノ謂レナシ右者規則中ニモ揭載アル如ク皆之ヲ裁判廳ニ送附可致尤甲乙運賃差引等之義ハ何レモ法官ノ權內ナルヲ以テ稅關ニ於テハ關係無之義ト可被心得第三條貨物引留方定限ノ義ハ願主請意ニ可任第四條該件ハ一般人民ヘ布告可相成筈ニ候事

明治八年十二月八日　　租稅權頭　吉原重俊

然るに該規則は實際に於て支障多きを以て遂に翌九年二月十四日を以て之を廢撤せしむ

第十六號

各開港場ニ於テ內外國人運輸ノ貨物陸揚船積ノ際運賃拂方相滯候節貨物引留方手順明治八年十二月第貳百壹號ヲ以布告候處詮議ノ次第有之取消候條此旨布告候事

明治九年二月十四日　　太政大臣　三條實美

七、船移貨物取締方法　神戸稅關の照會に回答せる左の文書に據れは當時大阪稅關か船移貨物の取締方法を知るに最も可なりとす卽ち

第百十六號

天第七十一號ヲ以當港ヘ船移荷物取締方云々御問合之趣致承知候右ハ貴關ヨリ時々御送致相成候積荷目錄寫ト免狀トヲ引合セ過不足有之時ハ必ス貴關檢査課ヘ問合居候然ルニ積荷目錄寫ハ概ネ現物ヨリモ每ニ延着勝ニ付不得止實際ハ免狀而已ヲ目的トシ貨物通關取計來候而シテ後日右目錄寫着ノ上既ニ事濟タル免狀ト比照シ目錄ノ品名箇數ヲ朱消シニ致居候然レ共殊ニ寄目錄ニ不分明ノ廉有之候テモ現物ト免狀ト符合致候得ハ免狀ヲ正當トシ目錄ヲ書損ト見做シ候事モ有之尤モ如斯場合ニ於テハ荷主ヨリ差出候仕入書及本船乘勤監吏補之裏書等ニ照シ合セ無論目錄ノ書損ト判定シ得ル時ハ別段御問合不致事モ間々有之候右ハ船移荷物當港ニテ取締方概略御答旁申進候也

十五年九月四日　　大阪稅關

神戸税關御中

八、銅錢の輸入　外國銅貨輸入の取締に就ては曩きに大藏省より各開港場へ輸告する處ありしも是等に關する租税寮往復の文書に徴すれは當時大阪港を經由して輸入せられたる外國銅貨は皆無なりし

照會

銅錢輸入取締ノ義ニ付此程中大藏大輔井上馨ヨリ御達及ヒ置候處右達以前既ニ外國人ヨリ輸入願出陸揚差許候向モ有之哉ニ相聞候若シ右樣之義候ハヽ其數量幷輸入之名面等詳細御取調早急御差出有之右ハ兼而條約面輸出嚴禁之儀ニ付輸入可致理ハ無之筈ニ付輸入陸揚被差許儀ハ決而有之間敷候得共開港ニ於テ多分輸入致候風聞モ有之儀ニ付一應及御問合候間有無早々御申越有之度此段申進候也

壬申八月十四日

陸奥租税頭

厚東樹臣殿

右に對する回答は左の如し

八月十四日附ヲ以此程大藏大輔殿ヨリ御達相成候銅錢輸入願出陸揚差許候儀右御達前既ニ差許候向モ有之趣御聞込ニ付輸入人ノ名面幷數量等詳細取調差進候樣御掛合ノ趣承知致候則壬申正月以來取調候處當港ニ於テ銅錢陸揚差許候儀無之候此段及御回答候也

壬申八月廿八日

厚東樹臣

陸奥租税頭殿

然るに後十七年十二月に至り瀛船第一周陽丸韓國釜山より支那銅錢二萬九千五百文を搭載入港し來り輸入手續を了せんことを申告せり然れとも從來一の適例なきを以て是か措置に就て直ちに主税局の指令を仰きぬ卽ち

清國銅錢他方ヨリ輸入ノ節取扱方ノ儀ニ付伺

大阪税關

銅錢輸出入之義ハ日清條約通リ通商章程第二十六欵ニ同品ハ兩國何レモ海外ヘ輸出ヲ許サヽル旨記載有之候得共輸入ノ點ニ至テハ別ニ可差止ノ明文モ無之然ルニ神戸税關ニ於テハ明治五六年頃彼國ヨリ彼國銅錢ヲ輸入致來候節ハ其儘積戻サセ候樣ノ慣行モ有之右ハ現今ノ條約ニ依ルカ兩國共輸出ヲ禁制有之上ハ彼地ヲ積出シタル犯則之廉ヲ以テ本邦ニ於テハ例令輸入禁制ノ明文ナキモ之ヲ差止ムルノ理由可有之樣被存候得共元來清國銅錢ノ義ハ歐米其他證方ヘ散布シタル分モ可有之被考候若シ此分ヲシテ他ノ外國人ヨリ本邦ヘ輸入致來候節ハ之ヲ差止ヘキノ明文更ニ無之候得ハ固ヨリ清國ノ條約面ニ據ル譯ニハ難至候處清國銅錢輸入方注意ノ義ニ付テハ別紙寫ノ通明治五年八月井上大藏大輔ヨリノ御達モ有之候得共右御達ニ據テ斷然差止ヘキモノニモ相見ヘ不申且九年四月中長崎税關ヨリノ伺指令ニ據ルモ是亦充分取扱方判然致兼候然ルニ今般内國ニシテ朝鮮國ヨリ清國銅錢ヲ當港ヘ輸入致來候モノ有之候ニ付テハ右輸入許否ノ義如何取計可然哉相決兼候條至急何分ノ御指令相成候樣致度此段相伺候也

明治十七年十二月八日

大阪税關長

三等主税官　顯川君平

右伺に對し主税局より左の指令を與へ自今銅錢は五分税を徴して輸入を許すへしと

關第廿五號

伺之越其仕出地方ニ關ラス以後従價五分税ヲ徴収シ輸入可差許事

明治十八年二月十二日

主税官長　郷　純　造

九、適例なき輸入貨物の措置　従來税關事務の上に於て疑義を生する時は先つ神戸税關へ之か決裁を仰き神戸税關よりは之を主務省寮若しくは横濱税關本局の指揮先例に待つて措置するを慣例となせり今大阪税關か租税寮主管に歸して以來適例なき輸入貨物の措置に就て質疑處分せるものは略左の如し

一、色硝子　六年の初に當り色硝子の輸入に對し横濱税關へ質疑して曰

色付硝子板之義ハ其關ニ於テハ細工物ニ引付五分税銀收納相成候趣承及候處方今當港ニ於テモ同品輸入有之候間右ニ照準シ税銀取建置候得共荷主ヨリ「ウインドー」硝子板之名目ヲ以苦情申立甚以取扱苦敷候間其關方今實地御取扱之振合且ハ從來御議論等相成候書類ニテモ有之候ハヽ以後心得之爲早々御回答有之度此段申進候也

第三月一日(六年)

厚　東　樹　臣

瓜　生　租　税　助

中　島　租　税　權　頭　殿

之に對して横濱税關より左の回答を送付せり

色付硝子板税銀御取立ニ相成候義ニ付云々御問合之趣承知致候然ル處右様之事件ハ當港ニ於テ未タ先例無之候當港ニ於テ先般五分税取立候ハ板硝子則ブレートガラスト申ス分ニテ其厚サ平常之硝子ト大ニ懸隔アリ尤モ色付硝子之義モ或ハ五分税ニテ相當ノ論モ有之或ハ不相當ノ論モ有之何分小生モ論決致兼候得共即今條約面ヲ以「ウインドーガラス」者定額税ト有之候上ハ若シ色付硝子タリトモ窓硝子ノ外用處無之時者五分税取立候譯ニハ難相成ト存候板硝子ハ鏡杯ニモ專ラ相用候廉ヲ以テ五分税取候義ニ有之候前件ノ次等ニ付今般五分税御取立相成候色付硝子モ窓之外專ラ他ニ用ユル處有之哉或ハ其厚薄等モ今一應御申越有之度此段申進候也

三月六日(同上)

中　島　租　税　權　頭

瓜　生　租　税　助　殿

厚　東　樹　臣　殿

二、家禽及家畜　六年四月十二日横濱税關より兎及鷄類に對し左の如く達せり

輸入ノ兎及鷄ノ類ハ從前税納ノ有無區々ニシテ不規則ノ至ニ付右ハ今般總テ食料ノアニマル(動物)ニ屬シ無税ニ取定候間此段及御達候也

明治六年四月十二日

租税權頭　中　島　信　行

三、金箔　金箔收税の方法に就て六年七月二十日租税寮より横濱税關へ左の如く達し更に横濱より各税關へ通達して曰く

神戸港ニテ米商輸入金箔收税方法先般外務省ヘモ照簡之上五分税取立候様決議其段神戸税關ハ勿論相心得各港場ヘモ相達候様過日進置候所既ニ彼ニ於テモ公使ヘ裁決ヲ申立候上ハ公使ト外務省決定ノ上及布達候方二途ニ不相成可然趣ニ候得共假令公使ヨリ何様駁論有之候共無税ニ孳附候筋ハ有之間敷且神戸港ニ於テ五分税取立至當ノ論ト見据候儀ニ付素ヨリ其心得ハ可有之候得共長崎始箱館新潟等ヘ右品輸入候節普通金銀ト同一ニ見做シ無税ニテ陸上等爲致候様ニテハ

甚不都合ニ付追テ公使ト外務省トノ談判ニテ無税品ト決定相成候ハヽ尚改メテ各港へ相達可申
ハ勿論ノ義ニ付差當リ區々ノ取扱可相成候樣至急各港へ相達候樣御取計可有之候此段申入候也
明治六年七月二十日

租税權頭中島信行殿

租税頭陸奥宗光代理
租税權頭　松方正義

四、鐵板　輸入鐵板の税目適用に就ては久しく決する處なかりしを以て神戸税關より之に關し
て左の如く知照せり
第八十五號
輸入板鐵税ハ當港ニ於テハ去ル申年以來從價五分税取立候處外國人ヨリ異論申立且横濱港モ同
樣論議有之既ニ本寮へ伺出相成居候得共未タ定額從價ノ區分御指令無之候ニ付當港ニ於テハ從
價五分税ヲ敢テ取立居申候尤是ヲ拒收納ニ不致分ハ遂フラ御指令迄五分税預置通關差許居候間
貴關ニ於テモ右樣御取計有之樣長官ノ命ニ依テ此段申進候也
四月二日(七年)
大阪税關

諸　務　課　御　中

神　戸　税　關

後七年五月十日我當局と英獨兩國公使との間に鐵税に關し協定す之を鐵税取極書といふ載せて條
約彙纂に在り今省略に從ふ
五、砂糖　當時輸入砂糖に對する色素の鑑別(單に色素のみに據つて品質を區別せり)は常に之
か照準を神戸税關に仰けり例へは

例一
第三十一號
去ル七日附貴港船移免狀ヲ以テ輸入ノ白砂糖荷主清商祥隆ヨリ差出書ニ赤砂糖ト記載願出候ニ
付遂檢査候處別封見本之通ニ有之右ハ當關見込ハ白砂糖ノ分ニ引付可然ト勘考致候得共何分赤
白區分判然不致且神阪ニテ取立方區々相成候テハ不都合ニ付是迄御取建ノ振合モ可有之候間及
御問合候至急御決答有之度見本相添へ此段申進候也
明治八年三月十日

大　阪　税　關

神　戸　税　關
追而本文砂糖ノインブオイスニ赤砂糖ト記載有之候爲念此段申入候也

例二
輸入砂糖之儀ニ付伺
本日清商恒升豫砂糖量目四千斤輸入候ニ付則檢査候處右品質白砂糖ニ付〇七五ヲ以收税可致樣
申聞候處貨主ハ當課ノ見込ト反シ品質赤砂糖ト申張收税不服ヲ唱ヘ候尤送狀面ノ如キハ現ニ白
砂糖ト記書シ有之候得共何分前件ノ次第ニ付如何相心得可然哉至急御指令被下度見本相添此段
相伺候也
十三年四月廿六日

關長高橋新吉殿

伺之趣赤砂糖ト可被心得候事

大阪税關　檢　査　課

第八篇　貨　物　輸出入及回漕

明治十三年四月廿七日

神戸
大阪　税關長　高　橋　新　吉

大阪税關の間に往復せる質議應答は最も此問
の消息を解するに便なるものあるを以て左に之を收む卽ち十三年三月裁判所より

糺第拾壹號

明治十二年十月廿二日午前九時比清國人廣同安所持ノ火車糖百包氷砂糖五十包富島波止場ヨリ陸揚ケノ上大阪税關ニテ檢査ヲ受ケ納税致候義有之然處右砂糖ノ目方ニ付糺問上左ノ廉承知致度ニ付至急何分ノ御回答相成候樣致度候

一、從來砂糖ノ如キ俵入ニテ輸入相成候節數十俵以上有之候時ハ其内十俵計ヲ檢査シ譬ハ右ノ分毎俵百斤有之候得ハ外俵數（譬ヘハ百俵ノ内十俵ヲ檢査シ外九十俵ハ此目方ニ準スル類）ハ右同樣ト看做シ一々檢査不致義ニ有之候哉

一、譬ヘハ清國ヨリ積込ノ節一俵百斤ノ目方ニ有之候ヘ共遠路運轉ノ爲メ當地着船ノ節ハ貳斤又ハ一斤以下ノ減目可有之右等少許ノ減目ハ矢張百斤ト概算シ納税可爲致哉又ハ些少ノ減額ト雖モ精細加減ス可キ義ニ付有之候哉

一、果シテ前二條ノ通ニ有之候ハヽ前書廣同安カ砂糖御檢査ノ節モ右樣ノ御處置振ニ有之候哉

右ハ規則上又ハ條理ニ付思考候時ハ別段疑念スヘキ義ニモ無之候ヘ共實地取扱上ニ於テ彼我ノ便宜ニ依リ多少活斷可致義ハ素ヨリ當然ノ義ト相考候ニ付從來御取扱ノ慣例幷ニ廣同安積荷ノ義ニ付前三條ノ廉々精細御回答相成度此段及御照會候也

大阪裁判所

明治十三年三月廿九日

大阪税關御中

之に對して大阪税關は左の回答を與へり

第十六號

明治十二年十月廿二日清國人廣同安輸入砂糖云々ノ義ニ付御照會ノ趣致承知候

一都テ貨物陸揚等願出ルニハ自分證明シタル願書ニ斤量元價等ヲ記載シ本國ニテノ仕入書ヲ相副差出スヲ定則トス砂糖ノ如キハ願書面譬ヘハ百斤此斤量幾何ト有之候ヘハ檢査官ニ於テ内幾分歟ヲ改品シ相當ト見做ストキハ之ヲ允許ス

一本國ヨリ輸入ノ途中ニ於テ斤量等減少シ或ハ損傷等有之節ハ其旨本人ヨリ申出ルヲ定則トス其處分方ニ至リテハ通商章程第十款ニ據ル

一前條取扱振ニ至リテハ凡内外ヲ不問各國商人共同一ニ有之候右御照會ニヨリ此段及御回答候也

明治十三年三月三十一日

大阪税關　諸　務　課

糺　問　係　印

大阪裁判所

糺問係

六、水犀角　輸入水犀角に關する阪神兩關の往復文書は左の如し

輸入水犀角之儀是迄當港ニ於テ從價税ニテ取立候處貴港ニ於テハ定額税ヲ以御取立相成候趣ヲ以支那人之内彼是苦情申立候者有之就テハ兩港一定不致候テハ不都合ニ付何レニ基キ收税可致哉此段及御問合候也

第八篇　貨　物　輸出入及回漕

三月廿二日　神戸税關　檢　査　課

（神戸回答）

三月廿二日附ノ輸入水犀角收税ノ儀ニ付御問合承知仕候是迄當港へ輸入致候水犀角其實犀角則ライノーセロスホルンスニ有之候ニ付輸入税則ニ基キ百斤ニ付三分五ノ割合ヲ以テ取立來候此節貴港へ輸入ノ水犀角ニ如何ナル種類ニ有之歟若ライノーセロスホルンス則水犀角ニ異ナル品ニ候ハヽ御説ノ通於當港同樣五分税ニテ可然義ト存候間此段及御答候也

亥三月廿三日　神戸税關　檢　査　課

大阪税關　檢　査　課　御　中

七、バーチング、ドローエルス　洋袴下の税目適用に就て九年七月二十六日神戸税關より之を申達せり卽ち

バーチング、ドローエルス徴税方別紙之通相復シ候間爲御心得此段申進候也

九年七月廿六日　長岡租税權助

植村七等出仕殿

「バーチング、ドローエルス」ハ以來股引ノ其種類ノ部ニ依リ定額税徴收可被取計候事

九年七月廿六日　税　關　長

八、山馬皮　現今從量税目を適用せらるゝ山馬皮は當時輸入の適例なきものとして之か措置を神戸税關に照會せり卽ち左の如し

（神戸税關の回答を缺く）

第百七十二號

是清商ヨリ輸入シタル山馬皮ト申ハ其實大鹿ノ類ニシテ凡百斤ニ付代價廿四五圓ナリ鹿皮ニ至リテハ凡百斤ニ付代價參拾四五圓ナリ之ヲシテ馬皮ニ組入ントスル時ハ其名ハ同フスト雖モ其實不同又鹿皮ニ組入ントスレハ其元價ノ差違不尠前件山馬皮ノ如キハ貴港ニ於テハ何レノ部分ニ御組入相成來候哉聊カ疑義ニ渉リ候條至急御取計樣御報知相成度候右及御照會候也

十三年十一月五日　大阪税關　諸　務　課

神戸税關　諸　務　課　御　中

九、純鉛及水銀の量目　純鉛及水銀の量目一定に就て神戸税關へ照會せる回答に曰

今回三井物産會社輸入純鉛ニ對スル課税之義ニ付御見込御照會ニ相成委細了知仕候夫レ税目ハ普通鉛塊鉛板之兩種ニ限リ候モノニテ今インウイスニ因テ推考スレハ固ヨリ税目中ニ包含セサルモノニ存候當關長モ御意見同一ニ有之候乍然其實際ノ形狀ニ付テ見ル時ハ如何可有之哉先御高案ノ通リ從價五歩税可然哉ニ存候此段御回答申上候也

月　日　神戸税關　渡　邊　牧　太

大阪税關　前　野　直　久　殿

追テ輸入水銀量目之義ハ當關及ヒ横濱稅關トモ正味七十五ポントニテ收稅致來リ候モノニシテ「インウイス」ニモ記載有之外國物價表等モ毎鑵七十五ポント入則チ五十六斤二五貴關ノ五十七斤三七五ハ何等ニ因テ取極メ有之候哉可相成ハ一定致度存候也

十、屑亞鉛　十九年七月十六日輸入屑亞鉛の稅目適用に就ての質疑

輸入屑鉛亞ノ義當關ニ於テ是迄從價五分稅徵收致來候處稅則五十項ノ亞鉛ハ原文單ニ Spelter and Zinc ト有之新舊形體ノ區別無之就而ハ右從價稅徵收相成候ハ必ス其原由可有之ト種々取調候處別ニ伺書類等見當不申然ルニ關稅局編纂ノ月表幷ニ年表ニハ去十六年以降輸入從價品中故亞鉛ノ科目特揭有之候間他港ニ於テモ該品ノ如キハ從價品ヘ繰込相成居候哉ト爲念該表三四ケ年分取調候處該科目ノ輸入品ハ當港而已ニ限リ他港ニハ更ニ無之付テハ他港ニ於テハ該品ノ輸入ハ全ク無之義ナル哉或ハ新舊形體ヲ論セス定額稅ノ取扱ナルヤ當關ニ於テ從價五分稅徵收候ハ何分他港ニ類例無之樣被考頗ル疑議ニ渉リ候右ハ是迄ノ通從價五分稅徵收致候テ可然候哉何分ノ御指令有之度爲念此段相伺候也

十九年七月十六日

大阪稅關長心得
顯　川　君　平　殿

伺之趣從價五分稅徵收可致候事

大阪稅關
稅關屬　五　島　貞　眞

但一度已ニ使用シタル古板幷古屑等ニ限ル義ト可心得事

明治十九年七月廿日

其他尚ほ類例なきに非らさるも稅關事務の進歩に伴ひ精かなる稅目の區分活きたる稅目の適用は益々其範圍を擴めたるを以て遂に昔時の如き繁雜を見るなきに至れり

十、硝石　初め輸出禁制品に屬せるも後六年一月至り「我國政府之都合ニヨリ再度停禁セント欲スル時ハ三十日前ニ布告可及候」との條件の下に從價五分稅を以て之か禁制を解放せり是より先我大阪稅關より硝石輸出禁制の解放に就て淳々稟議する處ありき卽ち

硝石輸出禁制之原因ハ先年御國内變動之際其質火藥之元素ナルヲ以テ軍事必用品ニ有之且ツ其頃迄ハ右製法ニモ迂濶ニ有之旁々其品甚乏敷候處方今ニ至リ追々製法精密ニ相成元來十年或ハ廿年毎ニ家屋牀下ニ自然ト醸成シ只々人工ヲ相加ヘ候而已ニテ莫大ノ產物ヲ生成致シ夫カ爲生活候者不尠向後右品輸出被差許候ハヽ、徒ニ製法人ノ繁殖而已ナラス逐年一廉ノ御國產ト相成可申乍然軍事當用ノ防備ハ不可缺ヨリ猥ニ輸出難被差許候ハヽ、兼而禁制品御差許相成候銃砲同樣ノ取締ニ相成海陸軍省ニ於テ故障無之分ハ外國人ヘ賣渡其品限リ海外輸出被差許候ハヽ、敢テ非常ノ御差支モ有之間敷被存候既ニ此節當港ニ於テ山口縣管下之商人硝石多分持參候處内國ニテハ賣買殊ノ外廉價ニ有之勿論多數ノ品ハ買人無之殆當惑致シ候趣ニ相聞ヘ加之世間右同樣ニ困却致候者不少候由若此儘輸出不被差計猶舊規ヲ以テ束縛致候時ハ漸々製法人モ相減シ竟ニ其產業之道ヲ失ヒ可申間當關見込之趣申陳候間可相成ハ前段申進候通輸出御差計相成候樣致シ度此段相伺候也

壬申八月四日

厚　東　樹　臣

想ふに這般禁止解放の事は此稟議與つて力ありしや必せり

十一、銅錢　之か輸出禁止に關し大藏省よりして嚴飭する處ありき但當時大阪港より銅錢の輸入は絶無なりし（輸入の章參照）

銅錢輸出嚴禁之義者各國御條約面掲載有之決テ輸出不相成筈ノ處支那地方ニ御國鑄造ノ銅錢多分融通致居候處昨年中銅錢諸種價格御確定相成候ニ付當今彼地所在ノ分買集メ内地へ向ケ輸入ヲ謀リ候趣右ハ最前銅錢各種品位未定ノ際ニ當リ内外奸商共法ヲ犯シ密送致候義ニ可有之候條斷然御條約面ニ寄リ密商ト見据（可致所置且亦近來清國通用之銅錢追々内地ニ散布シ彼我取交流融致候趣相聞以之外之事ニ候條向後彼我銅錢共輸出入ノ義一層注意可致候事

壬申八月九日

大藏大輔　井上　馨

後七年三月十九日銅錢の輸出は放禁せられて

第三十三號

銅錢ノ儀ハ海外輸出禁制ノ所自今金銀貨同樣海外輸出差許候條此旨布告候事

然れとも外人の手に由る輸出は依然之を禁制せしめき卽ち

七年四月十二日

先般第三十三號ヲ以銅錢海外輸出放禁之義御布告相成候ニ付而ハ新舊ヲ不論被差許候旨猶去月廿五日附ヲ以相達置候處右ハ御詮議之次第モ有之當分外國人輸出ハ從前之通不差許候義ニ付若外國人之内輸出願出候者有之候ハヽ條約面ヲ履ミ輸出禁制之旨ヲ以差留候樣取計可申旨大藏卿ヨリ下命有之候條此旨相達候事

神戸港
大阪港　稅　關

租稅頭　松方正義

十二、再輸出貨物　現今大阪港を經由する再輸出の物貨は可なり雜多なるものありしも當時再輸出の物品は主に清國產藥種の少額に限れるものに如かさりし今七年八月神戸稅關の需に應し調查報告に據れば左の如し

外國產物一端内國商賈之手ニ買取候ヲ再海外輸出之節ハ更ニ内國產物ト見做收來候物種取調告知候樣御申越之趣承知致候右者多分支那國產ニ有之其類左ニ記シ及御報候也

丁子　莫大海
阿仙藥　草集
羚手角　肉荳蔻
益智　檳榔子
水犀角　甘松
黃芪　大茴香
酸棗仁　沒藥
水牛皮　藤黃

以上

七年八月五日

神戸稅關
文書課御中

大阪稅關　檢查課

十三、内外製產品の區別　輸出品中内外製產の區別に就て十八年九月始めて左の例規を作れり卽ち輸出品中内外製產區別之義ニ付伺

輸入稅濟證無之物品再輸出ノ義ニ付明治七年三月神阪稅關第百拾壹號伺ヘ御指令ノ意ハ輸入ノ時ノ原形ヲ存シ外國製產ニ相違ナキ物品ヲ指稱スルハ勿論ニ候得共內地ニ於而舶來ノ品々ヲ以テ單ニ或ハ相交テ變造シ其原形ヲ變換シタル物品(假令ハ舊亞鉛屑板ヲ以テ鑄造シタル丁亞鉛)日本ニ產出無之藥種ヲ種々相交テ成立タル賣藥、姜黃ヲ製シタル紛末姜黃等ノ類幷ニ當時輸出無稅品中ノ紫檀器黑檀器象牙細工藤細工等ノ類)モ再輸出品ト見做スヘキ意ニ有之候哉熟考スルニ如此變形シタル者ハ假令條約面ニ據リ輸入證持參スルモ既ニ形容ヲ變換シタル者ニ付其功用ヲ有セス且內地ヘ輸入シ貿易上ノ目的ヲ終リ更ニ一ツノ內地製造品ト成リタルヲ以テ內地ノ製產物ト見做シ若シ其品有稅ニ屬サハ定期ノ稅銀ヲ徵收スルヲ以テ御指令中中略「若亦其原質形容ヲ變換シ內外國產ノ區別判然難見譯云々」ヲ見レハ日本ニテ產出無之物品又ハ產出スルモ些少ニテ輸出スル程ノ產高無之ト思推スル品ハ何程變形スルモ再輸出ト見做スヘク哉ニモ相見ヘ候前件頗ル疑義ニ涉リ各其見解ヲ異ニシ取扱上差支候ニ付爾來如何相心得可然哉此段相伺候也

明治十八年九月七日

大阪稅關長

三等主稅官潁川君平殿

是に對する關長の指令は左の如し

伺之趣其原質形容ヲ變換スルモ外國產タルノ區別判然セシモノハ明治七年三月第百拾壹號神阪兩稅關本局伺書御指令之旨ニ從ヒ徵稅セスシテ輸出可差許儀ト可被心得候事

明治十八年九月廿五日

大阪稅關長　潁川君平

十四、輸出特許　明治十八九年の交より清韓兩國に對する彼貿易漸く旺ならんとするや兩國貿易に關する諸般の機關續々として起り輸出貨物亦常に雲集せるも地形自然の配置は未た兩國直航の船舶にして大阪港に出入するものなく輸出貨物は一旦之を神戶港へ回漕し更らに本船へ搭積する等此間通關手續の混雜なるもの尠からさるを以て遂に二十年三月當地の東亞貿易商會より目今該貨は外國人の例に慣ひ當稅關通關の許可を得て直ちに神戶繫留の本船に搭積せんことを申請せり其願書に曰

歎　願　書

當會儀淸國貿易擴張ノ趣旨ヲ以テ普ク內國各地ノ同志者ニ圖リ第一着ニハ旣ニ天津ニ支店ヲ開設シ昨年以來專ラ百貨直輸ノ業ニ從事罷在候所開業後日尙淺ク本業熱心ノ者目下十中ノ七八迄ハ當府下在住ノ商店ナルヲ以テ便宜上當府ニ本會ヲ設立候得共元來當港ハ海外直航船ノ出入無之故縱令百貨ノ府下ニ雲集スルモ到底再ヒ之レヲ神戶港へ廻漕シ同所稅關ノ御檢査ヲ經ルニ非レハ本船へ搭載スルヲ得ス然ルニ右ノ手都合ニ致候節ハ輸品販賣ノ委托者及ヒ之レカ販賣ノ委托ヲ受ケタル當會ニ於テモ其不便尠カラス加之隨テ費用モ增加シ甚タ難澁仕候間何卒特別之御詮議ヲ以テ本會ヨリ輸出致候貨物ハ外國人同樣悉皆御關ニ於テ御檢査納稅ノ上神戶港へ廻漕致シ同所稅關ニ於テ再ヒ貨物ノ御檢査ナク御關ヨリ御付與相成候免狀ニ御照合ノ上直チニ本船へ積入方御許可相成候樣仕度候最モ此儀ニ付テハ阪神間運送ニ用ユル倉庫船新造可仕計畫ニ候得共差當リ右運送ノ儀ハ引船會社ノ倉庫船ニ積入候手都合ニ仕候間先般該會社へ御特許相成候例ニ據リ右倉庫船へハ是

又特別ノ御詮議ヲ以テ御關ノ御封印或ハ御鎖鑰ノ御手數ヲ煩シ充分御疑念無之樣仕神戸着港ノ上ハ單ニ本船ヘ積入ノ願書差出シ候迄ニ止リ候樣仕度何分前條縷陳ノ衷情深ク御賢察ノ上願意御聞濟之儀伏テ奉懇願候也

大阪北區富島町十五番地
東亞貿易商會
頭取　清水榮藏

大阪稅關長　頴川君平　殿閣下

是れ元より至當の請願なるを以て直ちに許可の指令を與へて兩國貿易の便宜を得せしめき

書面之趣聞置候事
明治廿年三月八日

後五月同商會は更に木材輸出の特許を請願せるも當時前例なきの故を以て之か例規を神戸稅關に求めて曰

第二十三號

當地東亞貿易商會天津支店ニ於テ此度木材凡千五百噸程注文相受ケ候處右木材ノ產出ハ尾州地方ナルヲ以テ之ヲ輸出スルニハ同處ヨリ一度貴港或ハ當港ヘ廻漕セサレハ外航船ヘ積入ル、事能ハス然ルニ木材ノ如キハ其運送ニ非常ノ費用ヲ要シ候故右ノ手順ニシテハ到底損益相償ハス付而ハ貴關ニ於テ昨年十月頃三井物產會社ノ請願ニ據リ同社ノ帆走船賴朝丸秀吉丸ノ貳艘ニ勢州四日市港ヨリ木材ヲ積入天津ヘ直航ノ儀御差許相成候赴キヲ以テ貿易商會於テモ其例ニ據リ四日市港迄當關官吏ノ出張檢查ヲ受ケ天津ヘ直航ノ儀願出候得共同商會ヨリ申出之通リ曾テ三井物產會社前述之通特許ノ儀有之候哉果シテ特許有之シナレハ其手續及官吏出帳手數料ノ如キハ如何御取計相成候哉同商會ヘハ貴關ヘ御打合之上否哉返答可致旨申聞置候間右特許ノ手續詳細御報ニ預リ度此段及御照會候也

明治二十年五月四日

大阪稅關　文　書　課

神戸稅關文書課御中

右に對する神戸稅關の答書は材料の中に於て之を缺如するを以て如何に處置せるやは今俄かに知るを得されとも既に三井物產會社の先例あるを以て見れは無論相當の手數料を徵して之を特許せるや明けし

第二章　鑑　定

十五、改品に關する注意　六年七月貨物の改品に就て注意を與へり蓋し事實は造幣寮雇外人キンドル所屬の貨物陸揚檢查に對し取扱方の粗漏より該貨物を損傷したるに胚胎す

輸出入物品ノ儀ハ別段相達候迄モ無之可成丈丁寧ニ取扱紙包等ノ者ハ別シテノ儀其包精々舊ニ復シ候樣可致ハ勿論之事ニ候得共動モスレハ疎漏ノ取扱ヨリ破損ヲ生シ彼ヨリ苦情等被申立候事ニ至リテハ不相濟儀ニ付自今一層注意ヲ加エ候樣可致此段更ニ相達候事

癸酉七月十九日（六年）　（東西ハ神戸東、西稅關ヲイフ也）
東西大阪　改品科中　瓜生租稅助

越へて二十四日租稅寮より更らに之を橫濱稅關本局に注意する處ありき卽ち

先般神戸税關ニ於テ造幣寮御雇キンドル貨物陸揚檢査ノ砌手荒ノ取扱致シ損傷不少旨苦情有之爾來同人荷物免税ノ儀造幣權頭遠藤謹助ヨリ伺出之次第モ有之候處右ハ一般ノ差響トモ相成候儀ニ付難聞屆乍去荷物輻湊混雜際卒爾ノ取扱有之候而ハ不都合ニ付自今尤懲款取扱苦情無之樣急度注意可致旨大藏省事務總裁大隈重信ヨリ被相達候條神戸税關ハ勿論兼テ其地税關ヘモ相達置候樣可被致候此段相達候事

明治六年七月廿四日

松方租税權頭印

中島租税權頭殿

横濱税關は更らに之を各税關に廻達せり

十六、從價品買上及ひ買上品處分　從價品買上に就ては單に申告價額と鑑定價額の間に懸隔を見るに際し税關は一應申告者に申告價額の訂正を諭し彼にして若し應せされは税關は目利人の鑑定價額を標準として之を買上け後之を公賣若しくは臨機賣却して曩きの買上金額を回收せしめて之を報告せしむ左に之に關する損益成績の報告の一例を示さん

損益成績報告

第三十一號

御買上品賣拂殘幷御損失相成候分共別紙仕譯書差進候間委細右ニテ御承知可然御取扱有之度候也

第十月一日（六年）

諸　務　課（神戸税關）

諸　務　課（大阪税關）

（別紙寫）

英商ハルトリヨリ御買上品

牛乳

ハーター　十七箱
サルトアシット　二箱
ツーダー　二箱
ケムカビネット　二箱
メールサイリングス　一箱
サイルフェルリーアイン　一箱
シットフェルリーシッチナイン　十桶
手袋　二箱
フェルリーサルブ　二箱
元代四百〇六弗七合　二箱
増元代三百五十四弗三合　一箱
合計七百六十一弗　二十桶

内

四百八十二弗四十三セント八厘

差引

二百七十八弗五十六セント二厘

是者フェルリーサルグ二十桶賣拂ノ上消却可相成分ニカシ當時相場二十桶ニテ百弗位ノ由

牛乳外八桁賣拂代

二百七十九

ナリ
清商棄昌御買上品
白　莚
此量目三千斤
元代六十弗
増元代百五十弗
合計二百十弗ノ處
銀貨百五十圓三十七錢ニテ賣拂
差引五十九圓六十三錢
清商雲紀ヨリ御買上品
釣ランプ
數十八トセイン
元代五十弗
増元代百八十四弗
合計二百三十四弗ノ處
銀貨百圓ニテ賣拂
差引百三十四圓
清商東成泰ヨリ御買上品
麥　酒
十二俵
御損失ニナル
四　箱
御損失ニ成ル
三　十　桶
但一桶四トセイン入
元代百八十弗
増元代四十五弗
合計二百二十五弗
内
百十圓
差　引
百十五圓
是殘麥酒十六桶賣拂ノ上消却可相成分此分御損失者不相立見込
十四桶賣拂代

後八年十一月一日より從價稅買上品の賣却に際し五分稅を賦加すへしとなし橫濱稅關の原議及指令寫を配布して之に關する措置の參考に資せしめたり即ち左の如し

第千二百九十七號

從價品御買上之分納稅致度儀ニ付伺

橫濱稅關

輸出入從價品貢主申立代價不相當ナルニ依リ增稅談判之末御買上相成候物品從來無稅ニテ三井組へ御拂下相成候定規之處右ハ元來納稅スヘキ當然ノ代價ヲ申談シ僅ニ增稅ヲ收メントシ却テ御買上相成候後無稅輸入候容ニ立至リ候儀其當ヲ失候次第ト存候彌々來ル九年一月一日ヨリ官用品納稅之御規則ニ付而ハ右御買上品モ同樣五分ノ納稅ヲ以御拂下相成候樣致度此段相伺候也

橫濱稅關長
租稅權助　柳谷謙太郎

租稅權頭吉原重俊殿

第八篇　貨　物　鑑　定　　二百八十一

（右指令）

第八十號（朱書）

伺之通可被取計最來九年一月一日ヨリ施行可被致候事

八年十二月九日　　租稅權頭

茲に於て長崎關長より左の疑議を挾み之か指令を仰ひて曰

第五百九號

從價稅買上品納稅之義ニ付御屆

本日第七十二號ヲ以從價買上品納稅之義別橫濱稅關伺候朱書ノ通及指令候條其關ニ於テモ右ニ照準可取計旨橫濱稅關ヘ御指令寫相添ヘ御達之趣領承致候然ル處兼テ當關ニテハ從價買上品ハ一手買取人モ無之稅關ヨリ直ニ賣却候義ハ先般第三百三十九號ヲ以御屆之上御聞屆相成候義故今般右品納稅候條御指令ノ上ハ右稅金ハ買上主ノ稅關ヨリ之ヲ其稅關ニ相納候姿ニ相成候ニ付以前其賃主ヨリ申出候價直ヲ以買上ケノ都度之ヲ收納シ賣却ノ上其損益ノ分明細表記致候運ニ取扱候外致方無之就而ハ橫濱稅關御同樣御取扱難候哉依テ此段及御屆候也

八年十二月十三日　　租稅權助　長岡義之

租稅權頭　吉原重俊殿

租稅寮はこの疑議に答へて左の如くいへり

第七十八號

上申之趣貨主申出ノ價直ヲ以收稅致候ハ不都合ニ付買上代價ニ從ヒ收稅致シ候義ト可被心得事

八年十二月廿三日　　租稅權頭　吉原重俊

すへて此買上品及ひ買上品の賣却は其都度之を長官に上申したる後にあらされは能はさりし然れとも若し買上品にして臨機の處置を要するものは事後の承認を得たる等其例尠しとせす

（例一）

昨三日清商恒商豫輸入之蘭花四十鉢貿易銀五十圓ヲ以買揚方取計候條此段上申仕候也

十三年八月四日　　大阪稅關

稅關長　高橋新吉殿

（例二）

過日清商恒升豫ヨリ御買上相成候蘭花四十鉢制規之通公賣處分可取計心得ニテ則望之者召募罷在候處豈ニ計哉該品日々腐枯之体ニ見受候ニ付每株篤ト相檢候處航海中浸潮セシ者ニ哉朝ニ青葉ヲ視シモ夕ニ赤葉ト變シ枯腐愈々相迫リ殆ント苦慮罷在候處幸ニ望之者一銘有之楮金四十五圓ヲ以拂下願出候ニ付賣却取計候右ハ經伺許可ヲ待シ後賣却取計可致筈之處何分前陳之次第ナ時モ等閑ニ難附ニ付臨機處分致候間不取敢此段及御屆候猶詳細之義ハ拜謁之上ニ申可仕候也

十三年八月七日　　四等屬　五島貞眞

關長　高橋新吉殿

（例三）

記

御買上品

一金二十八圓四十九錢二厘　　木瓜四百七十六斤

一金三十圓九十五錢　　烏藥六百五十五斤半

合計金五十九圓四十六錢二厘

本月三十一日上納

右之通御拂下ヶ被成下度奉願候也

明治十五年五月八日

小島市兵衛
堤野新三郎

（別紙）

本月四日清商源記號ニ屬スル三俵木瓜四百七十六斤之價格十八弗十セント二俵烏藥六百五十五斤半元價十四弗六セント輸入願出候處元價不相當ニ付木瓜ハ百斤ニ付五圓七十錢烏藥ハ百斤ニ付四圓五十錢ニ附價致候處荷主不服ニテ當關へ買上方願出候付御買上ノ事ニ取計申候然ルニ御成規之通公然入札爲致候テハ御損亡ニ相成候トモ此上御益金等ハ更ニ見込無之景況ニ付別紙ノ通御雇小島市兵衛外一名へ爲引受候ハヽ稅關ニ於テ相濟候事故兩名願之通御聞屆相成候樣仕度此段相伺候也

明治十五年五月八日

神戸港稅關

十七、目利人と分一稅　當時檢查課改品係に附屬して鑑定事務に從事せるものを目利人と呼ひ輸出入物品申告價格を鑑定せる結果之か增額を見る時は增稅百分の一を目利人に給與せりこれ大阪運上所開設以來の慣行なりしなり然るに明治五年租稅寮の主管に歸するや此慣行は自然に廢滅に歸せるを以て遂に七年七月一日之か復舊を申請し增稅百分の一を給與することになれり其復舊申請の按文左の如し

大阪稅關目利人へ增稅被下方之儀伺

大阪稅關目利人へ增稅被下方之儀阪府所轄中ハ被下來リ候樣子ノ處去ル壬申年同稅關當寮へ請繼後伺落ニモ可有之歟無其儀今日迄押移リ候得共右分一金之儀ハ各港共被下渡候御定ニテ同港ニ限リ不被下渡而ハ不都合モ有之依之本年第一月ヨリ各港同樣ニ增稅百分之一金被立下候樣有之度此段許可相伺候也

七年七月一日

租稅頭　松方正義殿

租稅寮は之に許可を與へて曰

伺之通許可相成候條本年第一月分ヨリ受取可被申立候事

明治七年七月十七日

租稅權助　長岡義之

然るに後十年二月に至り增稅分一給與の慣行を廢せんことを上申せり

租稅頭　松方正義㊞

關第十六號

神戸稅關

目利人へ被立下候增稅分一之儀ニ付上申

目利人ハ輸出入物品ノ鑑定ヲ職トスルニ付其批價ニ誤謬ハ無之筈況ンヤ誤謬ヲナス者ニ此任ハ難委譯ニ候得共實際上僅少目利人ニ日々昂低ノ常ナキ千種萬貨ノ元價ヲシテ敢テ失當ナカランコヲ望ムハ亦得ヘカラサル義ニテ間ニハ檢查課ニ於テ其當否檢查之際目利人ノ批價上猶價ヲ增加スルコアリ然ルニ從來目利人へ被立下候增稅百分一ハ右ヲモ相束ネシ高ニ因リ計算シ有之故ニ目利人ハ自己鑑定外之分給モ合セテ得ルノ姿ニ相成居批價覩奬ノ爲ニ被役シ主意ニモ悖リ名實不相稱哉ニ被存候爲已來右等之如キハ分一給被差除候義至當ニテ可有之歟依テ此段及上申候也

神戸大阪稅關長

十年二月七日　　長岡義之

關稅局長
吉原重俊殿

此上申に對し關稅局長は左の指令を與へて依然此の慣行を繼續せしめたりと雖も後十一年十月鑑定役の新設と共に自然廢滅に歸せり指令に曰く

第百八十一號
上申之趣者全ク目利人之鑑定ヲ以テ增加セシ分ニ限リ成規ノ通リ分一給與致候義ト可被心得候事
十年二月廿一日　　關稅局長　遠藤謹助

第三章　課稅

十八、手數料の徵收と廢止　輸出入品各免狀の遺棄紛失せるに際して更に之か謄本を申請せは先つ願書を提出せしめて後一弗半の手數料を徵して更らに免狀を交附せり
外國人輸出入諸免狀紛失致免狀寫願出候節手數料取立候義ニ付云々御問合之趣致承知候右ハ貿易第六則ニ基キ施行致候義ニ付横濱港ニ於テモ別ニ手續等ノ書類無之尤諸免料ハ一般ニ先年被相廢候得共輸出入免狀紛失寫願出候分ハ一弗半ッヽ取立居申候云々
（下略）
壬申九月四日　　神戸運上所

大阪運上所御中
又內國貨物の輸漕を外國郵便船に托せんとするに際し免狀手數料を徵せるも六年三月遂に之を廢止せしむ
御國人民內地產物ノ荷物外國郵便船へ積込申ノ開港場ヨリ乙ノ開港場ニ輸漕免狀手數料トシテ金三步ッヽ取立來候處以后右手數料廢止免狀下渡幷相當預リ稅等ノ儀ハ從前ノ通可取計旨大藏大輔井上馨ヨリ被相達候條其旨各港稅關へ至急可被相達候此段相達候事
六年三月七日　　租稅頭　中島信行殿　　小林權大屬

十九、關稅返戾の適例　七年二月英商ヒース大阪より神戸へ硝石を回漕せんとして途中沈沒の厄に遭遇せるより越へて六月關稅返戾を大阪稅關へ申請せり蓋し此の如きの適例は未曾有の事に屬するを以て是か指揮を神戸在任の大阪稅關長に仰けり
第七十二號
當二月中英商ヒース義瀉船會社ヨリ雇入候荷漕船ニテ貴港へ向ケ硝石運送之途中百六十八樽此斤凡一萬九千九百斤積一艘破船ニ及ヒ在高之內百二十樽ハ沈沒其餘鹽入損害致シ候趣ヲ以テ荷主ヒースヨリ返戾稅申出右者收稅之日ヨリ既ニ數月ヲ經候事ニハ候得共水難ヲ受候段者事情相違モ無之尙斤數取調候處瀉船會社ヨリ申出候斤高ニ符合致シ不都合ニモ不相聞候間申立之通夫々返戾方取計可申哉此段相伺候也
明治七年六月十八日　　長岡租稅權助殿　　植村大屬

茲に於て長岡關長は更らに之を租稅寮に致し是れか指揮を待てり今左に伺按及該伺按に對する租稅寮の指令を揭けてこの一新適例を知らしめんとす

輸出品船積之際損傷返戻稅之儀ニ付伺

大阪港在留英國商人ヒュース儀硝石一萬九千五百斤同港ニ於テ輸出稅濟當港碇泊之本船へ直ニ船積ノ手筈ヲ以本年二月二日神戸之津田宗治郎持ノ艀ニテ運送途中兎原郡奧崎村沖合ニ於テ遽風逆浪之爲メ右艀沈沒隨面右硝石モ流失致シ因テハ右輸出稅金返戻之儀願出候ニ付夫々取調候處事實相違モ無之然ルニ大阪輸出手數濟之品ハ當港へ陸揚ニ不及只當關ニテ更ニ船積證ヲ得テ直ニ本船へ積込候故波止場ト本船間ノ距離遠近有之迄ニテ全ク當港内運送モ同樣ニ候處當港ニ於テハ是迄輸出品本船へ運送ノ際途中ニテ沈沒或ハ損傷等出來返稅取扱候適例モ無之右ハ貨物本船ニ積入候ヲ輸出ノ時ト致シ候哉又ハ本船出帆ヲ期ト致候哉前件ノ取扱振猶向後港内ニ於テ右等之義有之候節ノ取計方等早々御指令有之候樣致度此段相伺候也

七年七月十四日

神戸港稅關

租稅頭　松方正義殿

尙々本文沈沒硝石ノ儀ニ付而ハ荷主ヨリ大阪艀會社ヲ相手取及出訴裁判官ニ於テモ其船艦札前七十五石積ヲ百石積ト申僞リ多量積入候ヨリ右之災害ニ罹候儀ニ付元價ハ艀會社ヨリ償却可致申諭シ有之候處元々運賃ニ而危險ノ請負ニ無之段主張シ一件相約リ兼候處頃日ノ風聞ニテハ過半艀會社ニ於テ償ヒ候事ニ立到候哉ニ相聞申候此段ヲモ爲念及上申置候也

右に對する指令は左の如し

租稅權助　長岡義之

九十四號

伺之趣本船へ運送ノ際途中ニテ沈沒セハ輸出稅悉皆返戻可致且非常ノ災害ニ罹リ物品損傷等出來貨主ニテ返稅ヲ請求セハ其品篤ト檢査ノ上事實相違無之ハ相當ノ減稅可取計然レトモ其品現ニ積戻則海外へ輸出不致節ハ悉ク返稅可致候尤都而本船へ積込候トキヲ以輸出ノ期ト可被心得事

明治七年七月廿八日

租稅頭　松方正義

二十、輸入品元價換算法の變更　從來輸入品元價の換算方法は在神戸東洋銀行日々の相場を以て我金貨に比較するに在りき然るに九年四月に至り我造幣寮刊行の貨幣條例備考に揭記せる各國金貨幣價格概表に準し換算することに爲し同月十七日より之を施行し更らに二十一年十月一日以降は大藏省告示外國貨幣日本銀貨比較表に照らし換算せしむ即ち左に順次揭示せん

大藏省告示第九十二號

本年十月一日以降外國ヨリ輸入セル從價稅品ノ元價ハ當省ヨリ告示スル外國貨幣日本銀貨比較表ニ據リ換算シ其價格ニ從ヒ海關稅ヲ徵收ス

但比較表ハ橫濱外國爲替參着手形三ケ月平均相場ニ基キ算定シ每年三月六月九月十二月ノ四回ニ告示シ其翌月一日ヨリ實施ス

明治二十一年七月九日

大藏大臣伯爵　松方正義

大藏省告示第百十一號

本年十月一日ヨリ十二月三十一日迄輸入從價稅品元價ノ換算ニ適用スヘキ外國貨幣日本銀貨比較表左ノ通之ヲ定ム

但外國銀貨ト日本銀貨トノ比較ハ從前ノ通
明治二十一年九月一日

（別紙）

外國貨幣日本銀貨比較表

金貨		日本銀貨
英吉利	一ポンド	六六二〇円
獨逸	一マーク	〇三二四
北米合衆國	一ドルラル	一三六一
佛蘭西	一フランク	〇二六三
瑞西	一フラング	〇二六三
白耳義	一フラング	〇二六三
伊太利	一リラ	〇二六三
丁抹	一クローン	〇三六五
瑞典	一クローン	〇三六五
諾威	一クローン	〇三六五
和蘭	一ギルドル	〇五四八
西班牙	一リール	〇〇六八
葡萄牙	一ミルリー	一四七一
土耳古	一ピアストル	〇〇六〇

大藏大臣伯爵　松方正義

又別に本年（二十一年）十二月末日までに到着すべき輸入從價品に限り舊換算法を適用すべき旨をも告示して曰

大藏省告示第百拾貳號

左ノ二項ニ揭クル輸入從價稅品ハ本年十二月末日迄ニ到着ノモノニ限リ舊換算法ヲ以テ徵稅スヘキニ付本月三十日迄ニ其物品ニ係ル事項ヲ詳記シ輸入港稅關ニ屆出ヘシ

一本年七月當省第九十二號告示前ニ外國ニ注文シタルモノ

一同告示前ニ生產地製造地若クハ仕入地ヨリ本邦ヘ向ケ積出シタルモノ

明治二十一年九月一日

大藏大臣伯爵　松方正義

茲に於て穎川關長の名を以て更らに之を神阪在留の各領事に通告し併せて之を大阪稅關へ通達せり

第十二號

以書翰啓達致候就ハ別紙十三號之通外國貨幣日本銀貨比較表新製換算ノ義御通知申進候處左ノ二項ニ限リ本年十二月末日迄ニ到着ノモノハ猶舊來ノ換算法ニ據リ施行可致旨我政府ヨリ訓示有之候間右二項ニ當ルモノ有之候ハヽ貴國商人ヨリ本月三十日限リ當關へ屆出候樣御通告相成度此段及御通知候拜具

第一項本年七月九日以前ニ外國ニ注文シタルモノ

第二項本年七月九日以前ニ生產地製造地若クハ仕入地ヨリ本邦へ向ケ積出シタルモノ

明治廿一年九月六日

神阪

神戸大阪稅關長　穎川君平

各　國　領　事　宛

第十三號

以書翰啓達致候然ハ本年六月十三日付ヲ以テ外國貨幣日本銀貨比較表新製ノ上本年十月一日ヨリ本年十二月卅一日迄別紙比較表ニ從ヒ從價稅品換算ノ義我政府ヨリ訓示相成候間此段及御通知候拜具

明治廿一年九月六日

神戸大阪稅關長　　顯　川　君　平

神　戸

各　國　領　事　宛

（別紙ノ比較表ハ本年九月一日ノ官報ニ在リ略之）

而して大阪稅關へ通達せるもの即ち左の如し

達第七號

外國貨幣換算ノ義ニ付今般別紙之通各國領事へ通知及置候條寫二葉相添此段相達候也

大阪稅關

五　島　稅　關　屬　殿

（別紙）

貨幣條例備考內外國銀貨比較表ノ內

一墺他利　　新フロリン　　一個

此我貿易銀四十五錢三厘七毛

一印度斯坦　　ルピー　　一個

此我貿易銀四十三錢五厘三毛

一魯西亞　　ルーブル　　一個

此我貿易銀七十四錢一厘一毛

右之通ニ候也

二十一、關吏の派出檢查手數料　危險若しくは重量なる物品にして稅關指定の波止場へ廻船陸揚し難く特に官吏の派出檢查を請求する場合には慣例に據り官民の制なく每に手數料を徵收せり然れども此事各稅關とも區々に亘れるを以て遂に十八年四月主稅局より神戶稅關に與へる指令を配布し此場合に處すへき例規を示せり

乙第六十九號

大　阪　稅　關

神戶稅關ニ於テ危險或ハ重量ノ物品等定規ノ波止場ヘ差廻シ難キ場合ニ際シ官吏出張之上檢查ヲ要シ候節ハ官民ノ別ナク二時間每ニ一弗ノ手數料取立候慣例ノ處右手數料ノ義ニ付テハ今回別紙之通同關ヘ相達シ候條爲心得此旨相達候事

明治十八年四月廿二日

主稅官長　鄕　純　造

神　戶　稅　關

（別紙）

乙第六十八號

其關ニ於テ官廳用品檢查ノ爲メ定規外ノ波止場ヘ官吏出張セシ際手數料取立之義ハ今回英國ヨリ輸入セル鐵道局用品ノ件ヨリ相廢シ候義ト心得此段相達候事

明治十八年四月廿二日　　主稅官長　鄕　純　造

然れとも徵收手數料の金額に就ては未た一定する處なかりしを以て後二十年十月大阪稅關より左の場合に對する質疑をなし關長の指令を仰けり

危險或ハ重量ノ物品等定規ノ波止場ヘ差廻シ難キ場合ニ際シ官吏出張ノ上檢查ヲ要シ候節神戶稅關ニ於テハ二時間毎ニ一弗宛ノ手數料可取立慣例ノ處當關ニ於テハ一時間毎ニ一弗宛ノ手數料可取立慣例ニ相成居神阪兩稅關ニ於而其手數料高區々相成居候付右慣例ノ基本取調候處別ニ據ルヘキ書類等無之尤モ神戶稅關慣例ノ儀ハ先年夫々上申相成其後官用品ノ爲メ出張セシ際ハ右手數料可相廢旨主稅官長ヨリ被爲達候義モ有之候得共當關儀ハ前陳ノ通其邊據ルヘキ書類更ニ無之候付テハ假令右等ノ書類モ無之且神阪兩稅關ノ取扱振リ區々相成居候共當關ハ當關ノ慣例に據リ從前ノ通一弗宛之手數料取立不苦候哉方今右手數料ノ如キモ第二部歲入トシテ國庫ヘ納付相成候儀ニ付爲念此段相伺候至急何分之御指令有之度候也

二十年十月六日

稅關長　顯川君平殿

（指令）

伺之趣開關時間中ハ一時間毎ニ圓銀五十錢開關前幷閉關後ノ時間中ハ一時間毎ニ圓銀一圓宛ノ手數料可取立義ト可被心得候事

明治廿年十月十三日

二十二、各稅關事務の聯絡　曩時我稅關事務の今の如くに進捗せさるに當り夫の稅目適用の區々に亘れるに乘し先つ甲稅關に到り乙稅關の慣例を云爲し輕減なる關稅の下に巧みに通關せんと企つるか如きは當時外商間に於ける慣用の惡手段として往々見る處あるのみならす其是に據りて什中七八を僥倖するものありしは事實なりき然るに以降稅關制度の設備漸く整ふと共に諸般の機關も亦漸く完からんとして各稅關事務の上に機敏なる聯絡を見爲めに如上惡手段を施すに餘地なからしむ今左に之か適例を示さんとす

十一年五月二十六日橫濱稅關より此種の奸手段を弄して通關せん貨物なるを認るや直ちに之を神戶稅關に通知し豫め備ふる所あらしむ即ち

第三百四十八號

瑞西商ファブル、ブラント儀頃日〈GPNY〉記號之スナイトル銃早合拾箱（二萬發）輸入致原價百六十弗ト申立候得共鑑定致候得者格外低價ニ付三百六十弗ニ估價致候處同人不服ヲ唱ヘ候末同國領事來關インヴオイス之眞正ナルヲ證明シ申立ノ原價ヲ以テ通關差許候歟然ラサレハ定規之如ク買取候樣懇々談判致候得共右樣價格ノ不相當ナルハ勿論此早合ヲ鑑定セシニ英國製ニシテ倫敦府イドウキン、エッチニウヒー之仕出品ニ可有之然シテインヴオイス者瑞西文ニ有之候テ本關ニ於テハ最初記臆書ト（メモランダム）認居候趣之次第ニ有之旁以テ信用難相成甚不審ニ候條相當ノ辨解申出テサレハ買取可カラサルハ勿論該品ハ規則ニ適合シタル屆ヲ稅關ヘ出ササル品ト可見認旨同領事ヘ申遣シ彼是往復中本人方向ヲ換ヘ今便之東京丸ヘ船移シ大阪表ヘ廻漕陸揚致度旨願出候處本關繁務之間手違ニテ之ヲ差許候ニ付而ハ彌到着陸揚願出候ハヽ前述之次第御含之上可然御取計有之度此段御心得迄申進候也

追而本人ヨリ差出候瑞西文インヴオイス寫一通爲念相添差進候也

橫濱稅關長本野盛亨代理

十一年五月廿二日　大藏一等屬　葦原清風

神戸税關長　長岡義之殿

神戸税關ヨリ申越候瑞西人フハーブル、プラント之早合拾箱貴港へ船移ニテ相廻シ貴關へ陸揚候ハヽ、横濱税關ヨリ申越候瑞西人フハーブル、プラント之早合拾箱貴港へ船移ニテ相廻シ貴關へ陸揚候ハヽ、横濱税關之估價同樣三百六十圓ト增價御取計若シ右價ニ付何等申出候節ハ直ニ關長へ申立候樣御談有之度旨本日關長下命ニ付此段申進候也

十一年五月廿六日　神戸税關　小林二等屬

大阪税關

五島五等屬殿

尚々本日入港之東京丸本ニ文早合十箱ハ積載有之候得共未タ何等之願書モ不差出何レ明日ニモ船移可相願哉ト奉存候間爲念申進置候也

事情此の如きを以て外商は遂に我に備あるを見て空しく香港に去れり

天第廿六號

天第廿三號付ヲ以爲御心得申進置候瑞西商フープル、プラントニ屬スル早合十箱今便東京丸ヲ以當港へ來着候處又英蒸汽船ハルミースへ船移シ香港へ向積廻シ度旨願出候間最早其港へハ不相廻候ニ付此段爲念申進候也

十一年五月廿八日　大阪税關御中

二十三、輸入貨物諸係費課税の疑議　十三年十二月輸入貨物諸係費に課税するの當否に就ては當時議論區々に流れたるを以て之か指揮を關長に仰けり即ち

百八十八號

海外ヨリ輸入ノ貨物ニ屬スル「インウオイス」中ニ記載スル「プライメージ」及ヒ「ディユーチー」ノ儀從來當關ニテハ運賃幷保險請負同樣免税致來候得共右ハ全ク「コンミツシヨン」同樣課税シテ可然樣被存候間至急何分ノ御指揮有之度此段相伺候也

十三年十二月七日　大阪税關

高橋大阪税關長殿

右に對し關長は直ちに指令を與へて曰「何之趣「プライメージ」及ヒ「ディユーチー」ニ對シ課税方之儀相伺候處「プレンス」同樣免税可致其他は都て免税の限りに無之候條此旨可被相心得事」と然るに諸務課より更に疑議を挾んて曰

第百八十九號

本月七日第百八十八號附ヲ以「プライメージ」及ヒ「ディユーチー」ニ對シ課税方之儀相伺候處「プライメージ」ノ儀者「フレイト」及「マリーインシユーレンス」同樣免税可致旨徹指令相成致了承候然ル所明治六年税關布告中第二項ニ從價定額無税品共外國ヨリ其荷物積出迄ノ諸雜費口錢トモ差出書ニ加算スヘキ事但船賃海上請負料ハ除クト有之右布告ハ固ヨリ各國領事ニ公認セシモノト存候然ラハ布告書中特ニ海上請負ト船賃トヲ除クト明記セシハ必竟此二件ニ限リ免税餘ハ悉皆課税スルゾト云フノ意味ヲ示セシモノヽ如シ果シテ然ラハ假令「プライメージ」ノ性質ハ「マリーインシユーレンス」ニ類スルニモセヨ明文上カラ見ル時ハ課税シテ差支ナキ樣被存候間尚爲念再應相伺候也

十三年十二月十日　大阪税關

高橋大阪税關長殿

茲に於て關長は更に左の答辨を與へ諸係費は免税たらしめき

天第八十一號

プライメージ及ディユーチー課税ノ儀ニ付再應伺書御差出相成候得共右「プヲイメージ」ハ船積荷物注意ノ爲メニ荷主ヨリ船主へ贈ル心附ケ即其主意ハ銘々ノ荷物ヲ大切ニ取扱ヒ貰ハン事ヲ請フカ爲メニ贈ルモノニシテ申サハ私情ヨリ起リ敢テ一般ノ法則ト見做シ難キモノナリ而シテ其性質ヲ論スレハ海上請負料ニ近キモノニシテ別段六年税關布告第二項に明文ナキモ是レニ課税スルノ道理ハ有之間敷加フルニ其布告中ニ荷物積出迄ノ諸雜費口錢云々ト有之以上ハ右「プライメージ」ノ如キ荷物積出後ニ屬スル費用ヲ元價ニ加算シテ徴税スルハ穩當ナラサルヘシ無論右者スコットト氏存生中關長へ伺ノ上決定致居候儀ニテ免税相當ノ者ニ有之候因テハ去ル七日御伺出相成候第百八十八號へ御指令ノ通御取扱相成可然存候ニ付再應ノ御指令ニ不及儀ト存候間此段當課ヨリ布演旁申進候也

十三年十二月十一日

神戸税關　文　書　課

大阪税關御中

第四章　犯　則

二十四、反則品と官民の賞與　脫税密商の危險を防遏する一策として從來脫税品の取押若しくは密商の發見により押收せる犯則品は其半額を賞與し來りたるも更に五年七月租税寮の主管に歸するや

と共に大阪府に交渉して一層勵行する處あらしむ

當府下川口見張所之取締役及巡羅掛之内ニ於テ無免狀又ハ波止場外ヨリ積卸スル諸荷物等都而密商漏税疑敷品物見當リ候ハヽ聞糺之上早々運上所へ届出候樣夫々御達宜有之度其品物取揚相成候得ハ其半高ハ届出候當人へ被下候間是亦申進置候也

壬申七月十八日

渡邊大阪府權知事殿

藤村大阪府參事殿

後七年長岡關長の時に至り脫税品取押と賞與に關し租税寮に照會して左の指令を得たり

内外之奸商共脫税密商等相謀候節取押へ候得者其品代價之半高ヲ取押へシ者へ被下來リ候處一昨年ヨリ監吏始官員等へハ右半高不被下儀ト相成居候得共若シ他之者脫税密商ト見認メ其品取押或ハ報告致シ從前之通其品代價半額ハ當人ニ被下候儀ニ哉此段相伺候也

七年七月三十一日

租税頭　松方正義殿

租税權助　長岡義之

（指令）

第十四號

伺之趣ハ税關官員監吏ヲ除クノ外ハ何人ニ限ラス從前ノ通其品代價ノ半額ヲ附與スル儀ト可被心得候事

明治七年十月三日

租税頭　松方正義　印

是に據りて見れは當時既に官吏の賞與は常に長官の詮考に待たしめ普通臣民にのみ依然押收品半額

を賞與せり後租稅寮より長崎稅關に於ける事例を將て之を各稅關に示し敢て濫賞の弊なからしめんことを期せり

密商取押候者賞與方ノ義ニ付別紙ノ通長崎稅關ヨリ伺出朱書之通指令及候就テハ將來其港ニ於テ右等ノ事情有之候時ハ關長篤ト功勞難易等審理シ聊濫賞不相生樣精々注意ヲ加ヘ非常ノ功績有之候ハヽ、事跡詳細取調可被伺出依テ爲心得此旨相達候事

明治八年四月八日　　租稅頭松方正義代理

密商取押候者へ別途御賞與ノ義ニ付伺　　神戸大阪稅關

租稅權頭　吉　原　重　俊

過一月四日淸商安吉號米國ヲルゴニヤン船ヲ以テ輸入ノ雜貨八箱改品料中屬白石秀明十三等出仕寺尾敬直檢査ノ處內一箱入今有之候貨物ノ嵩ト其箱ノ積ト適當不致不審ニ心付候ヨリ貨物悉皆取出シ見改候得共願書面ニ聊相違無之何分疑敷ニ付尙又白石秀明右ノ箱篤ト調査候處箱中ブリツキヲ以テ二重底ニ仕立隱シ下段ノ方ヘ願書無之絹縞子十五反全ク手違書損等ニハ難見據候ニ付品物押取其旨申出候仍テ荷主取糺候處彼是口實ヲ唱候得共結局脫稅ノ企ニ相違無之恐入候旨申立書面差出候右品ハ御規則通リ沒官申付候右ハ非常ノ注意ヲ以テ穩密ノ奸計一時發覺致シ全特別ノ功勞ニ付テハ相當ノ賞與有之候ハヽ、大ニ後來勸奬ノ一端ニモ可相成候間出格ノ御詮議ヲ以右兩名ヘ速ニ御賞與有之度此段相伺候也

八年二月三日　　長崎稅關

吉原租稅權頭　　租稅頭松方正義代理

橫山租稅權頭

伺之趣ハ各員勉勵勸奬ノ一端トモ可相成儀ニ付金五十圓下賜候儀許可相成候條差向定額金ヨリ繰替分賞取計追而別途受取可被申候尤將來右等類似ノ事件有之候時ハ關長ニ於テ功勞難易等篤ト審量シ聊濫賞ノ弊不相生樣精々注意ヲ加ヘ格別非常ノ功績有之候節ニ限リ伺出候儀ト可被心得候事

八年四月八日　　租稅頭松方正義代理

租稅權頭　吉　原　重　俊

二十五、虛僞申告の處分に對する疑議　輸出入貨物及ひ積荷目錄等に對する虛僞申告者の處分は既に貿易章程第五則に於て之を規定せるのみならす明治五年二月の大藏省令達に生き爾來之を勵行し來りしも茲に七年五月從來の慣行上に對し一の疑議を生し之か解決を租稅寮に仰けり

僞之告書罰金取立方之儀伺

外國人荷物輸入出之願書及ヒ仕入書等ヲ僞リ候時ハ荷主ニ其旨ヲ諭シ承伏候得ハ貿易定則第五則ニ基キ罰金取立テ其事情別段領事ヘ照會不致慣行ニ候處其實荷主私曲之難逃ヲ覺知シ或ハ社中名聲ノ汚恥ニ係ルヲ以テ公然領事ノ裁斷ヲ請ケ其罪科ノ世ニ露レンコトヲ厭ヒ定則ノ罰金直ニ關ニ納メ事ノ穩ナランヲ欲スルヨリ差出候儀ニ有之候併罪科ニ承伏セシ一書ヲ爲差出候儀ハ后得証據トナル故ニ各人敢テ肯スル者無之候得共稅關ニテハ裁斷ノ勞ヲ省キ權力之我ニ附スルヲ以テ前書之通取扱來候然ルニ右等一旦承伏候後若シ後日ニ至リ荷主不伏抔ヲ領事ヘ申立候節領事ヘ對シ荷主其罪ニ承伏之上ハ領事ノ裁判ヲ不俟直チニ貿易定期ニ從ヒ罰金取立テ且取立之事狀等ハ領事ニ報告セサルモ都テ稅關ノ權內ナリト云フコトヲ得ヘキヤ最罰金取立之都度其事狀ヲ領事ニ照會致候樣ニテハ假令犯罪判然タリトモ前斷之譯ニ付直ニ稅關ヘ罰金差出候者更ニ有之間敷ト推考被致候右ハ兩國權利上ニ關スル事件ニ付兼而其邊心得置度候間至急御指令有之度此段相伺候也

神戸港稅關

七年五月二十三日

租税頭　松方正義殿

これに對し租税寮は左の回答を送付せり

外國人荷物輸出入之願書及仕入書ヲ僞リ差出候者罰金取立方之義ニ付別紙二百四十五號伺出之趣ハ荷主其私曲ヲ悔ヒ條約違犯ノ罪科ニ承伏他日異存無之ト之証書差出候者ハ慣法ニ據リ被取計可然候得共一時通關要スル爲メ假ニ定則之罰金相拂置候者有之時分右ヲ税關限リ致收入置他日異論差起リ候節ハ物品既ニ荷主ノ手ニ屬候儀ニ付談判之際不都合ニ可有之ト存候既ニ客歲其港（神戸港ヲ云フ）ニ於テ英人ニッユル氏輸入之雞無免狀ニテ陸揚セシヲ直ニ取上ケ候儀ニ付論議之末遂ニ澳國條約第七ケ條ニヨリ鷄賣拂代價ヲ同氏ヘ下ケ戻更ニ領事ノ手ヲ經テ税關ヘ可請取都合ニ談判相決候次第モ有之今般伺越之趣其實好意上ヨリ取計トモ後日論議之起リシ節ハ却テ彼ノ辭柄トモ相成可申必竟僞詐之始末ヲ摘發其奸狀明確ナル上ハ假令何樣差拒候共定則之罰金不相拂之譯ハ無之証書取置差許候者格別右ヲ不承服之者ニ至而ハ物品税關ヘ留置澳國條約第七ケ條ニ照準處分被致候方可然ト存候仍テ此段回答申入候也

七年六月五日

長岡租税權助殿

松方租税頭

二十六、清國民に對する阿片密輸入と其處分　日清兩國間に於ける國際條約の訂結以前に在ては阿片の密輸入に對する清國民の處分は各國際條約を基礎として斷按するの他別に何等の條規なかりき（第一期貨物篇參照）然るに明治四年七月假條約を同六年七月本條約を訂結して以來九年兩國政府の間に之に關する處分方法を協定し後十一年九月更に我當局は在留清國公使との間に左の如く協

定し外務省より之を各税關に通達し阿片密輸入に對する清民の處分を爲さしめき即ち

往第二百八十七號

清民阿片ヲ輸入スルハ日清條約税則第三種輸入禁項ニ揭載有之候得共之ヲ犯スモノヽ處分明記無之候ニ付先般在北京森全權公使ヨリ清國政府ヘ照會シ清曆光緒二年上月十八日付王大臣ノ照覆ヲ以テ凡三斤以上私載發賣スルモノハ罰金トシテ每斤洋銀十五元ヲ課スル旨彼政府ニ於テモ承諾候ニ付其儀ハ明治九年六月二十一日甲第九十號ヲ以テ正院ヘ上申シ其旨貴省ヘ御達相成候然ル處右ニテハ猶不明了之廉有之候ニ付日本駐劄欽差大臣何如璋ヘ照會ノ末左ノ條々取極候事

一阿片ト稱スルハ吸煙藥用ノ辨別無之護謨越幾斯及阿片ヲ元質トシ種々ノ藥名ヲ換用スルトモ惣テ阿片タルヲ免レサルモノハ右ノ名目中ニ含有候事

右ニ付清國公使ノ答文中ニハ熬煎ヲ經サルモノハ之ヲ烟膏ト謂フ此二種ハ應サニ罰ヲ議スヘシ阿片所製ノ各種藥名ニ至リテハ清國未タ曾テ此物ナシ云々

一犯則ニ付取立候罰金ハ清國領事ヨリ未タ曾テ我税關ヘ引渡候事

一吸煙器具ハ吸烟ノ現犯見留メサルモ領事ノ裁判ニヨリ之ヲ税關ニ取揚滅却スヘシ但右器具タルヤ純然吸烟用久外他ニ使用スヘカラサルモノハ之ヲ取揚滅却スルノ權ナシ或ハ然ラス他ノ事ニテモ轉用スヘキ器具ハ概シテ吸烟用ト差定メ難シ偖テ其鑒別ヲ要スル爲領事館ヘ申入領事裁判シテ純粹ノ吸烟器具ト定ムルニ非サレハ之ヲ取揚滅却スルノ權ナシ

右ハ專ラ税關吏員ノ注意ニ關係候事ニ有之其他清民各房室内ニ在リ吸烟ノ現犯ヲ認ムルモノハ我巡羅ノ官吏之ヲ取押ヘ清領事ヘ引渡シ領事ハ之ヲ拘留シテ便船次第本國ヘ追還シ再度日本ヘ渡來ヲ許サヽル事ニ約定候條右ハ開港開市地方官ヘ相達候得共前書税關主務ノ廉ハ各開港場税關ヘ御

布達有之度候也
明治十一年九月二十四日

大藏卿伊藤博文殿
外務卿寺島宗則

後十三年四月密輸入阿片及烟具の處分に關する長崎稅關の例規を關稅局より各稅關へ配布し參照に供へしむ

上二號
沒收セシ阿片幷烟具處分方伺

長崎稅關

一當關曾テ取揚置候藥用阿片凡二十瓶餘有之右ハ元ヨリ燒却スヘキ成規ニ候處當關從來ヨリノ慣習ニテ是迄貯蓄相成居候然ルニ現在藥用ト雖モ矢張可燒滅儀ニ候ヤ

一阿片烟具中金銀其他眞鍮等ヲ用キテ製造セシモノ多々有之焚却ノ後是等ノ地金ハ如何可致ヤ

右兩條相伺候也
明治十三年一月二十日

長崎稅關長　高橋新吉

關稅局長　吉原重俊殿

（右指令）
伺之趣左ノ通可被心得候事

第一條　密商シ又ハ密商セント謀リシニヨリ汲收セシ阿片ハ總テ稅關ヨリ直ニ內務省へ送達シ其買收ヲ請求スヘシ尤船中ニテ三斤以上ノ阿片ヲ所持シ其餘量ヲ取押ヘルトキハ從來ノ通之ヲ滅却スヘシ

第二條　阿片烟具ハ其形体ヲ潰シ地金ハ之ヲ賣却スヘシ
明治十三年四月八日

關稅局長　吉原重俊

二十七、處罰及特典　從來貿易章程違犯者より罰金徵收の手續は寧ろ簡單に過くるものありし例之は檢查の結果犯則事件を發見する時は檢查、收稅の兩課に於て直ちに之に罰金納付を命し一々關長を經申せすして獨斷に處置し來れるを以て七年十一月租稅寮より之に關し各稅關へ對し左の注意を與へ來れり即ち

貿易章程ニ違犯セシ者ヨリ罰金徵收スルノ手順是迄一定ノ例規無キニヨリ往々檢查、收稅兩課ニ於テ直ニ所斷收徵致來候趣ニ候得共自今積荷目錄ノ更正入港手數ノ時限超過及願書式ハイングオイスノ詐僞其他免許ヲ得スシテ船移スル等ハ必ス稅關長ニ具狀シ稅關長親ラ其罰金ヲ命シテ之ヲ徵收候樣可致此旨相達候事

七年十一月八日

松方租稅頭

是より大阪稅關に於ける犯則處分の手續は必らす之を關長所在地たる神戶稅關に致し關長の指揮を待つて初めて處分せり左に一二の例を揭けて參考に供す

（例一）

籠甲過斤量目處分方之義ニ付伺

清商恒升豫義籠甲一箱該斤量四十六斤七八五規則之通送狀相添願出候ニ付及檢查候處右斤量之外十斤八七五「此代價凡四十五圓」ノ過斤ヲ生シ申候然ルニ同商儀ハ獨リ今回ノミニ止ラス既ニ昨十二年十月及本年四月中以上兩度多キ不都合之告書差出何レモ過斤有之取調候處全ク遠算之廉ヲ以

他書差出候ニ付其都度向後ヲ相戒メ寛大ノ御處置ニ相成居候然ルニ無其儀今ヤ重テ斯ノ如キ不都合ノ告書差出甚タ不相濟儀ニ有之申候曾テ支那商人ノ擧動ヲ見ルニ其奸計ノ極メテ些少ナルモ永遠ニ之ヲ爲スヲ以終ニ能ク其奸意ヲ全フスルモノ、如シ則同商儀モ其奸商ノ一人ニテ最早再三ノ不都合ニ付將來ノ奸計ヲ除去セン爲メ定則ノ如ク御處分相成方可然哉ニ愚案仕候右ハ如何取計可然哉相伺度至急何分之御指令有之度候也

十三年五月十一日

關長　高橋新吉殿

大阪稅關　檢　査　課

（右指令）

伺之趣定規之罰金取立候義ト可相心得候事

明治十三年五月十三日

高橋神阪稅關長

（例二）

清商同宇泰 FN 記號ノ白砂糖百俵別紙船移稅濟免狀相添ヘ陸揚願出候ニ付則及檢査候處該荷物中斷テ貴關之改印之レアルヲ見ス旁懸疑相生シ夫々取糺見候處全未納稅品ニ有之由申出候ニ付定例之如收稅通關取計候然ルニ元該貨主之貴關ヘ船移願出候節ハ必然稅濟証相添ヘシモノト被存候依テ此段及申上候然右ハ僞告之御處分可相成廉ト被存候依テ此段及申上候也

十三年七月十五日

神阪關長

高橋新吉殿

四等屬　五島貞眞

其他犯則事件に關し情狀酌量すへきものは特に之を許せり

本月十三日清商怡和號英國メリヲネスシヤイル船ヨリ船移ニテEK九十九俵柱碎一萬五千六百九十九斤當港ヘ輸入願出候ニ付最初十俵程掛ケ改メ候處每俵平均斤量餘程過上ニ付尚十俵程掛ケ改メ候得共矢張過上ニテ總高ニ平均スレハ二千三百四十斤餘ノ過剩ニ相成候ニ付其旨荷主ハ通知候處荷主ニ於テモ別ニ計算致候得共過上ニ相違無之ニ付殘ノ俵悉ク點檢致候處皆同量少差アル耳ナレハ荷主モ恐縮致居候迄ニテ既ニ罰金ノ沙汰ニ談シ及候處別紙之通歎願書差出候就テハ熟々同商是迄之仕來ヲ考フルニ隨分篤實ノ方ニテ別ニ可怪擧動モ無之ニ付今回ノ事ハ全ク本國仕出家之違算或ハ誤書等ニ係リ同商ノ故意ニ出タル姦計ニ無之樣推察仕候何トナレハ荷主ハ固ヨリ各稅關ニ於テ斤量ヲ掛ケ改ムルハ疾ヨリ承知之事ニテ發覺シ易キ筈ナレハナリ若シ姦策ニ因ルモノナレハ俵ニ大小之差違ヲ故造シ小俵ヲ稅關吏ニ示ス等ノ事アルヘキニ今回ノ義ハ少シモ右樣ノ擧動モ無之總數殆ント同量ノ荷造ナレハ稅關吏ヲ欺ク等ノ趣巧ハ更ニ相見不申旁以當檢査課ニ於テハ此事ハ決シテ姦計ニアラスシテ且本國仕出家ノ誤書違算等ニ因ルモノト推考致候然レトモ規則ニ於テ情狀ヲ酌量スルノ限モ無之義ニ付甚處置ニ困居候ニ付至急何分之御指令被下度別紙荷主歎願書及荷主ヘ本國ヨリ參居候書翰一通願書式幷ニ改品表共相添此段相伺候也

明治十五年二月十五日

神阪稅關長心得

渡邊牧太殿

大阪稅關　檢　査　課

（指令）

伺之趣貨主ニ於テ詐僞ノ情無之ニ付今回限リ可被差許事

明治十五年二月十六日

第八篇　貨　物　犯　則

第五章　貿易奨勵

二十八、貿易奨勵　海外貿易奨勵の一手段として七年八月二日内務省より米國桑港在留の領事よりの報告に係る合衆國商品船積心得書を配布し各府縣當該官衙より之を廣く管下に布告せしむ

甲第二十一號

神阪税關長心得

鑑定役　渡邊牧太

内國人民ヨリ海外輸出品ノ内米國桑港ニ於テ陸揚ノ節彼ノ地税則中船積ノ條不心得ヨリ間々不都合有之哉ノ趣ヲ以テ同港在留領事官ヨリ差越候別紙合衆國商品船積心得書相達候條管下一般ヘ熟知候樣可取計此旨布達候事

別紙

合衆國ヘ商品船積ノ義ニ付日本人民ヘノ報告

合衆國ヘ商品ヲ船積スルニハ其品柄其量目並ニ横濱或ハ其他船積ヲ爲ス港ニ於テ其物品ノ價ヲ記シタル船積證書ヲ爲スコト專用ナリ又之ニ加フルニ荷造之人費荷包ミ物ノ價輸出ノ時拂ヒタル税並ニ船中積込入費等ノ雜費ヲ記載スヘシ

積主ハ此船積證書ヲ三通ニ記載シ合衆國領事ノ許ヘ持行キ領事ノ前ニ於テ此證書通ニ無相違旨ヲ誓約スヘシ但シ右ハ諸雜費ヲ合セ物品ノ價ノ高百弗以上ニ至ル時ノ心得ニシテ若シ其價百弗ニ至ラサルトキハ右證書ヲ領事ノ前ニ於テ誓約スルニ及ハサル事

右船積證書ノ無相違旨ヲ誓約スル上ハ合衆國領事ハ其一通ニ領事ノ證書ヲ添ヘ積主ヘ渡シ殘二通ノ内又其一通ヲ商品送先港ノ收税官ヘ送致シ殘リ一通ヲ其領事館ニ留置ナリ

積主ヘ領事ヨリ受取タル保證濟ノ證書ヲ合衆國ニ於テ商品ヲ受取ヘキ者ヘ陸揚ノ時此證書ニ引合セ税ヲ拂フ爲メ商品ト同船ニテ送致スヘキ事

方合(千八百七十四年三月)合衆國ニ於テ日本品物上ニ課スル税左ノ如シ

一裝飾土器	從價五割	
一粹白土器	同　四割	
一木　製　物	同　三割半	
一紙	同　一割ヨリ三割半ニ至ル	
一珍　奇　物		

右ハ其製作ノ物質ニ因テ税ノ差アリト雖モ尋常ハ從價三割半位ナリ

一玩　物	從價五割	
一青銅製造物	同　一割ヨリ三割半ニ至ル	
一吸煙用物品	同　七割半	
一絹端物	同　六割	
一絹縫紗端物	同　五割	
一絹縫物	同　四割	
一水晶細工物	同　四割	
一革製造物	同　一割ヨリ三割半ニ至ル	
一醬　油	同　三割半	
一茶	無　税	

一抹漆器

從價ト云フハ船積セル港ニ於テ其物品ノ實價ヲ云フナリ

合衆國稅則之ニ卷煙草ハ一俵毎ニ三千本ヨリ少キ時ハ之ヲ陸揚セス又箱詰ハ一箱毎ニ五百本以上ヲ積マサルヲ要ス然ルニ右規則ニ背キ若シ右俵中ニ三千本ヨリ少量ヲ詰ムルトキハ右稅則ヲ破リシ廉ヲ以テ稅關ノ官員之ヲ沒收ス又箱詰トテモ五百本以上ヲ積トキハ右同樣沒收セラルヘシ

製造シタル煙草ヲ卸賣ノ爲船積スルニハ十磅以上ヲ目方セサル俵詰ニ爲スヘシ但シ卸賣ニハ五磅掛ヲ最上トス小賣ニテ少量ヲ賣與スル爲メニ船積スルニハ四半磅半磅或ハ一磅目掛ノ俵詰ト爲シ但シ此大サノ俵ニ用ユル內國稅印ニ付スルニ便宜ト爲スヘキナリ

上ノ報告ヲ了知シ船積ヲ爲スニ於テハ合衆國ノ稅則行ハルル間ハ陸揚ノ時困難或ハ荷物ノ損失等起ル事ナシ

又九年十月韓國貿易を奬勵し自今同國貿易品は輸出入品共同地貨物の取扱と同樣ならしめ太政官より之を布達せり

第百二十九號

自今朝鮮國貿易品ハ輸出入品トモ日本國內地ニテ諸物品ヲ運送スルト同樣ニ相心得輸出セント欲スル物品ハ開港場ハ稅關其他ハ出船地ノ區務所ヨリ荷物送リ狀ニ檢印申受朝鮮國開港場派出ノ日本管理官ヘ右送リ狀差出朝鮮地方ヘ輸入濟ノ檢印ヲ申受日本國ヘ歸着ノ後最前出船セシ元地ヘ右送リ狀可屆返候朝鮮國ヨリ輸出シ來ル物品ハ送リ狀ヘ管理官ノ檢印申受日本國各地ヘ陸揚セントスル節右檢印有之送リ狀ヲ其地稅關又ハ區所ヘ差示シタル上陸揚ケ可致候此旨布告候事

明治九年十月十四日

太政大臣　三條實美

同十二月一日露領樺太貿易品も亦船舶出入港手數料及輸出入稅を免除せり是等は均しく海外貿易奬勵の結果なりしのみ

第百四十九號

露西亞國領樺太島貿易ノ儀當分ノ內內國產物內地運送同樣諸船舶出入港手數料及輸出入物品稅免除候條明治八年十一月第百六十三號及本年三月第二十九號布告ノ通船舶出入港及物品輸出入共其都度開港場稅關ヘ可屆出此旨布告候事

但樺太島ヘ渡航スル船舶ハ必ス內地開港場ヨリ出船シ歸着スルモ同樣可心得事

明治九年十二月一日

太政大臣　三條實美

二十九、昆布輸出の一頓挫と善後策　明治五六年の交より清國商人の手に由りて輸出せらるゝ刻昆布は比年好況を呈し來りしに斤量の增加を謀らんとして該昆布に含水せしめ爲めに仕向地へ到着の上悉く腐敗せる等當時漸く博せる我實込商人の信用も是か爲めに墮落せんとするを憂へ遂に七年十一月十六日我稅關長より之を大阪府に報し之れに對する前後の計を促せり

（前文略）尙々支那人共一昨年刻昆布多分御地ヨリ上海へ輸出致候處右品々水ヲ湛シ斤量ヲ增候ヨリ先方着ノ上過般腐敗セシ由ニテ其後輸出不致然ルニ頃日少々宛輸出致候景氣ニ候處稅關波止場ニ於テ又候水湛シノ昆布實込候ヲ見受ヶ候得共右ハ全ク奸商之所爲可憎候次第且往々輸出ヲ減シ國家ノ不爲ト實ニ遺憾ニ不堪候依テ序ニ付御心得迄申進候間御良考有之候樣希望致シ候也

茲に於て大阪府は直ちに該商人に組合を組織して信用を維持せんことを訓示し一面其顚末を大阪稅關に報し自今該商人にして如上奸計を企つるものあらは重ねて報告を煩はさんことを以てせり

七年七月十六日付ヲ以テ上海輸出ノ刻昆布水ヲ湛シ斤量ヲ係候ヨリ着ノ上過半腐敗シ云々御達書

之趣致承知候右ニ付別紙寫之通告諭書ヲ以テ其節之者ヘ相示シ候處致承伏別紙之通含書差出候條已後當地昆布商ニテハ奸計不致筈ニ候得共猶ホ見當ノ義モ候ハヽ御通達有之度候併支那人共輸出之上奸策致シ候積モ難計右樣ハ無致處ニ付府下取締丈ケ之儀御含迄書類相纏メ此段申進候也

大阪府權知事　渡　邊　昇

長岡租稅權助殿

（別紙）

當地ノ盛衰ハ諸物品出入ノ多少ニ不寄ハナシ能サレハ銘々商業ヲ正直ニシテ一家ヲ成立シ施イテ府下ノ繁榮ヲ招クハ一般ノ義務ニシテ曩キニ諸商業組合ヲ結ヒ奸策ヲ以テ人ヲ欺キ利外ノ利ヲ貪リシ樣始末無之爲メ同商互ニ約シ互ニ相守ルノ道ヲ開キ候央剋昆布ノ御國出スルモノ次第ニ相減シ其原因ヲ尋ヌルニ全ク奸商ノ斤量ヲ掠メンカ爲メ水ヲ湛シ候ヨリ彼地到着ノ上過半腐敗セシ故遂ニ聲價ヲ落シ銘々ノ不幸ハ勿論自然府下ノ融通ニ關シ不相濟次第ニ付向後申合取締ノ方法可申出事

七年十一月十八日

（昆布商ヨリ差出セル請書寫）

以書附御屆奉申上候

一當十月十八日當商業組合取締之者御召出之上刻昆幹清國ヘ輸出スルモノ次第ニ減シ其原因ヲ尋ヌルニ全ク奸商ノ斤量ヲ掠メンカ爲メ水ヲ湛シ候ヨリ彼地到着ノ上過半腐敗セシ故終ニ聲價ヲ落シ一時ノ心得違ヨリ始終ノ損失ヲ來シ銘々ノ不幸ハ勿論自然府下融通ニ關シ不相濟次第ニ付向後篤ト相心得組合中猶申出旨御達ニ相成厚御趣意ノ程一同奉承伏候右ハ全ク御實慮ノ通奸商ノ者追々及增長種々奸策ヲ以テ衆人ヲ欺キ不筋ノ所業相營候ヨリ終ニハ當今ノ

姿ト相成每々可歎ノ至リ然ルニ今般前件厚御諭ヲ蒙リ私共集會ノ上種々遂評議自今左之通リ法則相立度奉存候

抑昆布之儀ハ　皇國物產ノ內就中良品ニテ最モ海藻種類ノ內ニモ況シテヤ美味ナルコト是ニ過ルモノナシ然而シテカヽル良品ト雖モ精製ノ法ニヨリ終ニ腐敗ニ及候其原因ハ概略左ノ如シ

一從來刻昆布精法ノ義ハ荒昆布ヨリ近々製法仕干揚ノ上目方比較ノ義ハ二ツ石昆布荒地元目方ヨリ凡五分方減シ位ノ分量ニ水度ヲ去リシ迄干揚候出來シ處近年切昆布商ノ內一己ノ利欲ニ迷ヒ刻昆布製法ニ鹽繰リ水ヲ加ヘ斤量ヲ相增內外國人ニ賣捌居候處右品清國人ヘ賣込本國ヘ輸出致候節彼地到着ノ上綫ノ日數ヲ經テ腐敗仕候樣ノ義屢々有之趣右奸商ノ爲メ當商業近來追々不景氣ニ成行キ一統相歎キ居候處當春諸商業組合相立候後右樣不筋ノ所業仕候者方今ニテ更ニ無之樣相成然ルニ清國商人共本國ニ於テ注文ヲ受品渡方日限條約有之候ニ付御國商人ト條約ノ後本國定約日限ニ打迫リ來候節ハ前顯分量ニ干揚出來無之未タ地品ニ水氣ヲ含ミ有之ヲ承知ニテ本國ヘ輸出仕候ヨリ彼地ヘ到着ノ後腐敗仕候義ニ御座候

一刻昆布仕揚入物之義從來清國ヘ輸出ハ多分箱入或ハ內國賣ノ分ハ紙袋入ニテ取扱來候處右箱紙袋共舊來寸法職人等一定ノ方法無之ヨリ大小區々ニ相成代呂物水氣ノ有無判然難見分斤量ニ相關シ公平至當ノ所業ニ無御座候右ハ舊來ノ惡弊ニ御座候處今般厚ク御趣意ニヨリ左之通リ改正ノ法則相立申度候

一製法方干揚目方分量比較ノ義舊來三ッ石昆布荒地元目方ヨリ五分減ノ所向後二割五分減ニ候迄干揚候ハヽ水氣速ニ脫去仕候ニ付假令數日ヲ經ルトモ腐敗ノ患更ニ無御座候

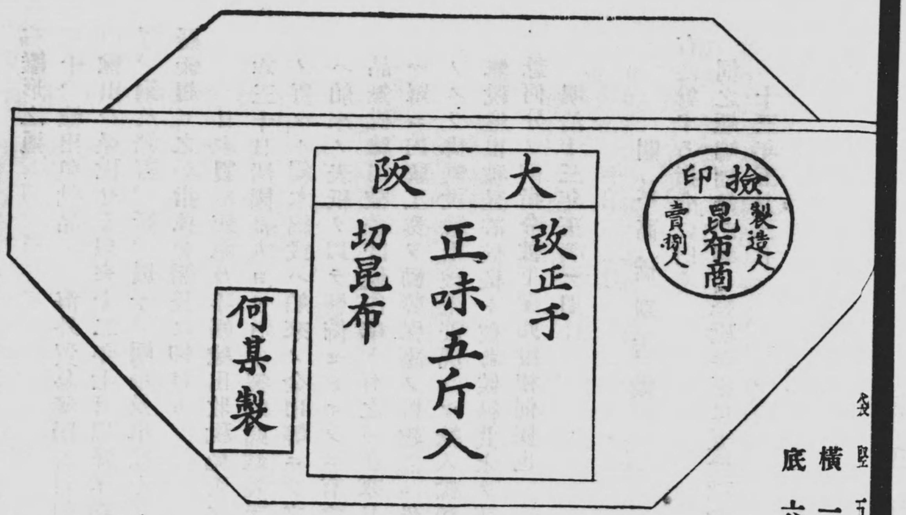
一入物之義從來箱並ニ紙袋相用來候處此度相改已來箱詰ハ相廢止紙袋詰而已ト相定且右紙袋寸法之義別紙雛形之通取極メ且又寸法相違ノ袋相用不申タメ製造人ノ名前ヲ入取締人賣込人ノ檢印ヲ

捺シ候定則相立可申就テハ兼テ定法ニ觸レ候袋相用候歟又ハ不正路ノ品商内仕候者有之及相顯ニ於テハ其商内品ノ代價ノ半高違約金トシテ組合ヘ積置候義私共一統承知罷有候
一前件紙袋寸法幷物品正不正ノ取締ノ爲メ夫々檢印押據候ニハ別紙雛形ノ通内國賣海外賣ノ區別判然相立有之候ニ付海外賣ニ相用候紙袋内國賣ニ相用又ハ内國賣ニ相用候紙袋海外賣ニ相用候樣ノ義堅ク不相成荷物受取候砌屹度相改品引取可申事
賣込人ノ義向後清國商人ヨリ御注文ヲ請候節纔ノ日限ニテ多分ノ物品渡方條約仕候義屹度相廢止己來代呂物製造出來有無ヲ取調候上條約仕決シテ差物商内仕候義不相成候且又賣込人ノ義從來弊習ノ如ク區々ニ相成候テハ今般改正ノ所詮無之ニ付昆布仲買ノ内木村義八村井甲兵衛川瀨小兵衛右三人ノ者相改候外ニ品賣込候義ハ堅ク不相成假令右三人外ノ者清國人ノ條約仕候トモ必右三人ノ者相改候物品ニ無之候テハ清國方區々ニ相成法則相崩不正物輸出仕候樣有之候ハヽ厚ク御趣意ニ相悖リ實以不濟次第ニ付前顯堅ク相守可申事
右之通舊來ノ惡弊一洗仕自今前件ノ通改正ノ方法相立候上ハ向後不正物賣込候歟又ハ定法ノ紙袋不相用者於有之ハ前文ノ通違約金差出シ候段一統申合仕候尤當組合内ノ義ハ前件規則取極誠實ノ商業致候トモ清國人ヨリ外國輸出ノ上惡調義致候義ハ當組合内ニ於テ更ニ關係不致候依之申合書連印ヲ以差上置申所如件

明治七年第　二月

切昆布商業組合

（連署七十名省略）



改	賣捌人
正	
細	正味五斤入
帶	
糸	何某改

何某改

袋裏

竪	五寸四分
横	一尺三寸八分
底	六寸五分
袋師	何某

右雛形之通

三十、輸出免税品　海外貿易奬勵の目的を以て我政府は明治十八年三月三日始めて内國製摺附木の輸出を免税せる以來十二年七月以降木綿、絹、絹綿交織等の織物、衣服、陶器、磁器、七寶、漆器、竹器、銅及鎗器、紙、扇子、團扇及傘類をも免税せり當時檢査課に於て日本製蝙蝠傘及手帳に關する疑義起り之か指揮を關長に仰けり

日本製蝙蝠傘及手帳輸出收税免否之義ニ付伺

昨三十日清國商人ヨリ日本製蝙蝠傘及手帳輸出税ノ有無則見本相添へ伺出候ニ付及檢査候處該傘ノ質タル絹木綿或ハ舶來ノ金巾等ニテ之ヲ張整シ有之且又手帳ノ義ハ内部日本製洋紙ニシテ外面ハ舶來ノ表紙ヲ以テ裝飾セシモノニ有之然ルニ昨十二年太政官第二十一號公布ヲ以テ十五項ノ物品無税輸出被差許候内傘ト有之ハ在來日本製紙張ノ傘ニノミ限リ候儀ニ有之哉思フニ該公布ノ義ハ單ニ内國工業ヲ勸奬保護ノ御趣意ニ外ナラサルヘシ果シテ然ラハ内國品ノミヲ以テ製造セシモノスラ尚無税輸出被差許況ンヤ輸入税濟品ト吾輸出無税品トニ因テ成立セシ該品物ノ如キニ無論無税輸出被差許候儀ト被考候得共未タ該品無税輸出ノ明文モ無之ニ付收税ノ免否豫メ承知致度至急何分ノ御指令被下度此段相伺候也

明治十三年五月一日

大阪税關　檢査課

關長高橋新吉殿

右に對する指令に曰く

伺之趣蝙蝠傘之義は無税手帳は五分税徴收候義と可被相心得候事

十三年五月三日

高橋神阪税關長

後十三年八月硫酸を同十五年五月十五日より硫黄をも輸出免税せり而して二十年三月有無税品を左の如く決議し之れを通達せり

天第十五號

今般別紙之通有無税見込決議相成來ル四月一日ヨリ實施相成候間御參考之爲メ及御通知候此段申進候也

明治二十年三月二十九日

神戸税關　文書課

大阪税關

五島税關屬殿

（別紙）

輸出雜貨有無税決議

有税之部

摺附木　細木小箱地板

線香

朱墨

懐爐灰

絹綿縫糸

苧繩

鬢附

印肉

墨

鐵線

竹篦　巾三分半長五寸餘ノモノニテ普通ノ竹篦ニアラス

卷肌

藁繩

釣糸

竹根付

竹根杖　從來根鞭ト稱スルモノ

檜製繩
鴨居
似鼈甲
製綿
砥材
琴三絃糸

無稅之部

箱板
麻蚊帳
鐵釘
瓦
煉化石
石塔材
莚
煙草管

竹竿
檜皮
敷居
各金屬箔
鮑貝 薄板 屑粉

檜木皮敷物
家形
印材
草席
元結
綿子
麥藁組紐
花火幷投玉

其他同年七月一日以降食鹽を免稅し同二十一年九月一日より石炭を免稅する等すへて國際貿易の趨勢に鑑み海外輸出奬勵の上に保護干渉を加ふる處ありき

一生糸　玉絲　熨絲　屑絲　繭　空繭　屑繭　眞綿　屑眞綿　蠶卵紙
一各種製茶
一鰯　鮭　鱈　鱔鰭　鮑　海參　鰕　其他乾魚　鹽魚　乾貝類　昆布　刻昆布　寒天　石花菜
一安質母尼　眞鍮　銅　鉛　鐵　錫　其他地金類 金銀ヲ除ク
一樟腦　椎茸　各種蠟　葉煙草　木材及板類　生皮　毛皮　屑布　漆

火藥類ノ如キハ一般ノ商品ト異ナルヲ以テ茲ニ掲ケサレトモ有稅ノ見込等の如き以外の物品はすへて之れを免稅輸出せしむ

三十一、交付金及戻稅　十五年十二月布告第六十三號を以て八年第百五十號布告煙草稅則改正の結果外國へ輸出する煙草は自今稅關に於て印紙相當の金額を輸出人に下付せしめ十六年六月關稅局より該戻稅取計方に就て左の如く違示せらる

第七百四十號

客歲十二月第六十三號布告煙草稅則第十七條及本月太政官第二十號布達ニ據リ其關ニ於テ戻稅取計方左之通可被心得此旨相達候事

神戸稅關

第一條

刻煙草ヲ海外ニ輸出セントスルトキハ輸出人ヨリ甲號ノ願書ヲ差出サシメ逐一檢査ヲ遂ケ全ク相違ナキニ於テハ其貼付シアル印紙ヲ消印シ該印稅相當ノ金額ヲ輸出人ニ下戻シ乙號ノ證書ヲ差出サセ候事

第二候

煙草輸出人へ下戻スヘキ印稅現金ノ仕出方ハ丙號ノ切符ヲ造リ其一印ハ屆符トシテ稅關ニ留メ置キ二印ハ輸出人ニ渡シ之ヲ其地所在ノ大藏省爲替方へ持參シ現金ト引換ヲ爲サシメ三印ハ其關ヨリ大藏省爲替方へ送付スヘク候事

但本文切符ヲ振出シタル都度其金高ヲ本局へ通知スヘク候事

明治十六年六月二十九日　　關稅局長　中野健明

戻稅願書

一　何匁玉造刻煙草　個數量目
　但定價百斤ニ付何程
一　何匁紙包刻煙草　個數重目
　但定價百匁ニ付何程
一　何匁箱詰刻煙草　個數量目
　但定價百匁ニ付何程
　此印稅金何程

右ハ何國何號船ヘ積載何國何港ヘ輸出仕候ニ付煙草稅則第十七條ニ據リ該印稅金額御下戻相成度此段奉願候也

輸出人　何之誰印

明治何年何月日

某稅關長宛

領收書

一　何匁玉造刻煙草　個數量目
　但定價百匁ニ付何程
一　何匁紙包刻煙草　個數量目
　但定價百匁ニ付何程
一　何匁箱詰刻煙草　個數量目
　但定價百匁ニ付何程
　此印稅金何程

右ハ何國何號船ヘ積載何國何港ヘ輸出候ニ付煙草稅則第十七條ニ據リ該印稅金額御下戻相成正ニ領收仕候也

輸出人　何之誰印

明治何年何月日

某港稅關長宛

後十八年十月此稅則適用に關して關長の指揮を仰くこと左の如し

本月三日清商怡和號葉煙草百六俵神戸港迄回漕願出候ニ付相當之稅銀相預リ回漕差許候處內二俵天保山沖ニテ落海候趣ニテ神戸稅關免狀裏書ニモ二俵不足相成候ニ付當荷主及船頭取調候處別紙之通手續書差出候就テハ右二俵ハ內海ニテ落失セシコト判然ナレハ稅銀ハ返戻可致義候哉或ハ着港稅關ノ裏書ニ不足スル分ハ返稅スルノ限ニ無之候哉尤神阪間回漕之義ハ小廻船ノ事ナレハ更ニ外航ノ患ハ無之旁以情實モ少シク相異リ且將來ノ取扱振モ有之候ニ付右至急何分ノ御指令有之度此段相伺候也

明治十八年十月廿四日

大阪稅關長　　大阪稅關　前野六等主稅屬

潁川三等主稅官殿

逐テ積送リ免狀ハ御覽後御返却被下度候也

（右指令）

伺之趣證跡確認候上ハ返税不苦義ト可被心得候事

明治十八年十月二十六日

爾後二十二年四月勅令第二十號を以て煙草　税則を改正し二十九年三月葉　煙草專賣法の　公布を見る（翌年一月實施）三十二年三月法律第七十四號を以て製造煙草輸出交付金手續を定めらる又十八年五月勅令第十號を以て醬油税則を公布し同年七月一日より施行せられ輸出醬油に對し造石税相當の金額下戻の手續に關し主税局より左の如く達せり

乙第百十一號

大阪税關

本年五月第十號布告醬油税則第十二號ニ據リ輸出セシ醬油ニ對シ造石税ニ相當スル金額下戻ノ節現金支出方ノ義ハ明治十六年六月第七百四十號達煙草印紙税金額下戻手續第二條ニ照準取計候義ト可心得此旨相達候事

明治十八年六月二十五日

主税官長　鄉　純　造

同年八月横濱税關の伺に對し外國に輸出する醬油も亦輸出煙草と等しく外國人へも造石税の下戻を爲し得へく旨を達せり

二十一年六月勅令第四十七號を以て醬油税則を改正公布し同八月大藏省令第九號を以て之か施行細則を定め三十二年二月法律第二十五號を以て該税則を改正し同三月勅令第四十六號を以て其施行細則を公布せらる

大阪税關長　潁川君平

（右指令）

伺之趣證跡確認候上ハ返税不苦義ト可被心得候事

明治十八年十月二十六日

二十一年七月勅令第五十四號を以て輸出酒類戻税則を公布し同年九月一日實施是より先十九年七月朝鮮國に於て製造したる日本酒類の輸入に對し左の關税を徵せり

釀造酒	一石ニ付	金四圓
蒸溜酒	一石ニ付	金五圓
再製酒	一石ニ付	金六圓

釀造酒　清酒濁酒其他釀造シタルモノヲ云フ

蒸溜酒　燒酎其他蒸溜シタルモノヲ云フ

再製酒　銘酒味淋白酒等釀造蒸溜ノ酒類ヲ調和シ又ハ元トシテ製造シタルモノヲ云フ

是れ卽ち酒類輸出に關する保護の先聲として現はれ遂に二十一年七月酒類戻税則の公布を見るに至れり後二十九年三月法律第二十八號を以て酒造税法同三十號を以て混成酒税法を公布し三十一年十二月法律第二十三號を以て酒造税法中の改正を同第二十五號を以て混成酒税法中の改正を公布し又同第二十七號を以て醫業用工業用酒類造石税に相當する金額下戻の件を公布せしむ

己に煙草醬油及酒類に對する戻税則其之に關する法律公布若しくは改正の結果之れか施行手續の反響として大阪税關は別に記すへき沿革を有せす

第六章　公用品及家具提携品

三十二、公用品　公用品の輸入税有無に關しては既に運上所時代に於て區々の論議ありし結果遂に公用品の輸入は所轄官衙の證明を待つて始めて無税たることを許すに決し六年二月十三日を以て政府より之に關する取締規則を發布せり

（第二十九號）明治六年二月十三日布告

諸省府縣

○第四十九號

一諸省使寮司府縣ニ於テ外國ヘ注文ノ官用品輸入ノ節ハ別紙雛形ノ通證書相認請取ノ官員差出可申事

一來着ノ荷物或ハ其箇數證書ト相違シ稅關ニ於テ疑敷見据ル時ハ更ニ檢查ノ上不當ノ品ハ商品同樣處分致候事

一最初商物ニテ輸入品稅未納船中或ハ稅關倉庫ニ收メ有之品買上官用ニ供シ候節ハ其荷主ヨリ納稅等總テ一般手數濟後買上方取計可申事

證

一記號　番號

一箇數幾　（梱　箱　俵）

一品名何

一斤量何程

一元價何程

右ハ當省使寮司何々ニ供候爲メ何國ヘ御注文ノ品今般何國何號船ニテ何國何某其港ヘ向ケ輸入候處官用物ニ相違無之候間當省使寮司受取ノ爲メ出張官員ヨリ陸揚ノ義示談有之候節無稅ニテ陸揚可被差許候此段及御掛合候也

年號月日

諸省寮司府縣長次官

何港

稅關宛

之れと同時に他の一方に於ては開港場府縣へ左の如く達せり

第五十號

諸省使寮司府縣ヨリ外國一注文ノ官用物輸入之節取締規則別紙之通御確定諸省使寮司府縣へ相達候條其旨可相心得候自然右規則ニ違背候向ハ假令官用品タリトモ商品同樣相當ノ稅銀取立可申事

右來着之荷物船移ノ下他方ヘ積廻候節ハ從來規則ノ通取計申事

但蒸汽器械ノ如キ重量ノ品一々陸揚檢查候テハ無用ノ冗費不尠因テ時宜ニ依リ稅關官吏本船ヘ出張シ改方取計可申事

後七年五月七日を以て院省使府縣へ輸入官用品證明に要する印影は豫め之か各稅關に送付すへきを達せり

第六十號

明治六年二月第四十九號ヲ以テ相達候各廳ニ於テ外國ヘ注文ノ官用品輸入ノ節無稅通關證書ヘ捺印スヘキ長次官ノ印影前以稅關ヘ差出置其度必調印ノ證書相廻候樣可取計此旨相達候事

降つて八年八月二十日に至り從來の無稅通關の布令を撤して普通輸入貨物と一般徵稅することゝなれり即ち

（第三十二號）明治八年八月二十日達

院省使府縣

第百四十五號

各廳ニ於テ外國ヘ注文ノ官用品輸入ノ節ハ該廳長次官ノ證書ヲ以テ無稅通關可差許旨明治六年二月

第四十九號ヲ以テ相達置候處來ル明治九年一月一日ヨリ都テ定則ノ通收稅候條物品受取ノ爲メ出張ノ官員ヨリ左ノ雛形ノ通證書相認仕入書ヲ添(已上五字八年十一月追加)稅關ヘ可差出此旨相達候事

證

一記號　番號
一箇數　梱　箱　俵
一品名何
一斤量何程
一元價何程
一稅金何程

〆

右ハ當院省廳使府縣何々ニ供候爲メ何國ヘ注文ノ品今般何國何號船ニテ何國何某當港ニ向ケ輸入候條一般輸入ノ手數相濟候上ハ物品引取方被差許度候也

年　月　日　　某官某印

何港稅關長姓名印

三十三、政府雇入外國人自用品　從來政府雇入外國人の自用品は雇入官衙の證明を得て輸出入とも常に無稅通關を許せり當時大阪運上所より所在各官衙へ知照して曰く

政府御雇入外國人自由品輸出入之時ニ以來貴寮御添書無之分共無稅不差通候間兼而其旨外國人へ御通知相成其都度御添書持參輸出入相願候樣致度此段及御掛合置候也

十二月二日(五年)

大阪港運上所

造幣寮　鐵道　鎭臺　電信　大阪府　第一中學校等各通

此の知照を發したる後二十三日造幣寮より左の照會を成し來れり曰

當寮雇入外國人自用品輸出入之時ニ當寮添書無之分ハ無稅不差通旨兼而御懸合ニ付其旨外國人へも申付置候處近日當寮雇英人キンドル自用品到來之旨ニテ添書願出候間即相渡申候然ルニ其御場所ニ於テ箱每打破被相改箱中之品紛亂致候旨苦情申立候是迄自用品ニ相違無之時ハ當寮ヨリ添書差出箱ノ儘御通シ有之候處此度ニ限リ右樣之御取計相成候儀ハ新ニ御規則改正相成候事ニ候哉御取計振承知致度此段及御懸合候也

壬申十一月二十三日

大阪運上所

これを得たる運上所は左の答書を致せり

過日貴寮御雇キンドル自用品輸入之節改品云々御掛合之趣致承知候右ハ御添書有之候トモ一應檢查ノ上陸揚差許候儀ハ從來ノ規則ニ候尤其機ニ臨ミ見極候分ハ其儘差許候儀モ有之ヘク尙向後改品ノ節可成丈ケ物品損傷不爲致樣注意可致候間右樣御承知有之度此段及御報候也

壬申十一月二十三日

造幣寮御中

運上所

然るに運上所は條約中敢て政府雇入外國人の自用品に限り無稅通關を許すへき明文なしと云ふの理由を以て自今雇入外國人の自用品は居留外人の商品と一般徵稅すへき由更めて在阪官衙へ通知せり

貴府(寮局臺校)御雇外國人當用品ノ義是迄無稅ニテ差通來候儀モ有之候處右ハ條約面中ニ無稅ト申廉相見ヘ不申且正院ヨリ別段御達モ無之義ニ付以來居留外國商人同樣納稅ノ上荷物引取候樣兼

而御達置ニ相成度此段御掛合ヒ候也

（月日ナシ）

大阪府　造幣寮　鐵道寮　傳信局　鎭臺　第一中學校　（各通）

これに對して造幣寮よりは

當寮雇外國人自用品之義是迄無税ニテ被差通候處右ハ條約面中ニ無税ト申廉不相見且正院ヨリ別段御達モ無之義ニ付以來者居留外國商人同樣納税ノ上荷物引取候樣可相達旨御掛合之趣致承知候右ハ當寮雇外國人ノミナラス諸向雇人ノ分モ何レモ同樣御取計ノ義トハ存候ヘ共自用品無税ノ義ハ近頃ヨリノ事ニ無之當寮雇キンドル始來着以來仕來ノ義ヲ突然申達候共彼是可申出者必然ノ儀ニ有之併此節ニ至リ改メテ納税爲致候樣政府ヨリ御達相成候事ニ候ハヽ其邊ヲ以可申聞候間御達書寫御廻有之候樣致シ度何分一應相達候上ニテ彼ヨリ苦情申立候迚其儘相成候樣ニテハ却而不都合ト被存候間先此段及御回合候御報ノ上達シ方取計可申候也

明治六年三月三十一日　造幣寮

大阪港

税關御中

と回答し來り又鐵道寮よりも

當寮御傭外國人自用品ノ義是迄無税ニテ御差通有之候處右ハ條約面中ニ無税ト申廉無之且正院ヨリ何等御達之品モ無之儀ニ付已來居留外國商人同樣納税ノ上荷物引取候樣兼而相達可置旨云々御掛合之趣承知致シ候右ハ當寮御國外國人ニ限リ候義ニモ無之東京横濱ニ於テモ同樣無税ニテ通行致シ候由ニ承知致シ左候得ハ當寮限納税取計難ク猶東京本寮ヘ打合否可申候得共夫迄ノ處從前之通御取計有之度此段及御回答候也

第四月一日　在阪　鐵道寮印

大阪港

税關御中

と回答し來れるを以て税關より更らに左の如く回答せり

貴寮御寮外國人輸入ノ自用品向後納税ノ義及御掛合候處是迄無税ニテ差通シ來リ候事故今更突然外國人ニ御達相成候共苦情申立承服致間敷趣ヲ以テ正院ヨリ御達書寫有之候ハヽ可差進旨御申越之件可致承知候右ニ付別段御達ハ無之候得共素ヨリ税納爲致候方當然ニ可有之如何トナレハ政府官員タリ共其當用品ヲ無税ニテ買得ル事能ハス然ル上ハ御雇外國人迚モ右ニ準シ可然儀ニ而獨税ヲ免レ候謂レ候之筈ニ候尤是迄ノ義ハ全ク掛リ官員不心得ニテ差通來リ往々不都合ニ付今般改メテ前件及御掛合候事ニ候ヘ共御申越ノ次第モ有之儀ニ付其邊本寮ヘ相伺候上可及御決答夫迄之處ハ從前ノ通リ取計置可申此段及御報候也

明治六年四月　大阪港　税　關

造幣寮御中

事情如此を以て遂に大阪税關より租税寮へ上申し租税寮は更に正院に促し遂にこの年六月十四日輸出入荷物取扱條例を發布し斷然自用品無税通關を拒絶せしむ該條件左の如し

第二百十號

内國人民一般幷御雇外國人ニ至ル海關輸出入荷物取扱條例別冊之通被定候條此旨相達候事

（別紙）

海關輸出入荷物取扱條例

第一　官省使寮司及府縣官員幷留學生徒ニ至ル迄政府ノ命ヲ奉シ海外ニ航旅スル者公用ノ荷物並本人相當ノ旅具ヲ除クノ外輸出入共商品同樣一般收稅スヘシ

第二　前款ニ揭クル官員並留學生徒發着ノ前後輸出入又ハ他邦滯溜中送致セル貨物等無稅通關スヘキ旨大藏省ノ證書無之分ハ商品同樣一切收稅スヘシ

第三　華士族ヨリ平民ニ至ル迄商業或ハ留學遊歷等ノ爲メ自費ヲ以海外ヘ渡航スル者荷物輸出入ノ際本人相當ノ旅具ヲ除クノ外一切收稅スヘシ

但相當旅具免稅ノ荷物ヲ定ムルニハ稅關官吏ノ意見ニシテ本人之ヲ取捨增減スル事ヲ得ヘカラス

第四　官省使寮司及府縣ニ於テ雇役ノ外國人自用品其自國又ハ他國ヨリ取寄或ハ御國產ヲ其本國ヘ差送ル分トモ自今約定書中自用品無稅通關可指許旨ノ明文無之分ハ輸出入共商品同樣收稅スヘシ

但向後外國人雇入ノ節有稅ノ自用品ハ輸出入共免稅致スヘキ旨條約面ニ記載スヘカラス

第五　前條ニ揭クル外國人來着又ハ滿期歸國ノ節輸出入ノ荷物本人相當ノ旅具ヲ除クノ外商品同樣收稅スヘシ

然れとも當時政府雇入外國人に對し全然此規則を適用し得さりし事情なきにあらさるを以て往々左の如き特別の場合なきにはあらさりしたとへは

別紙（省界）之品々貴寮御雇キンドル自用品ノ由ヲ以無稅ニテ通關ノ儀御掛合ノ處右者兼而御布告ノ次第モ有之總而內外官員タリトモ稅納致候儀ニ決定致候間キンドルニ限リ無稅之儀別段正院ヨリ御達無之テハ外々ノ譬ニモ相成無稅通關難取計此段及御答候也

大阪稅關

九月六日

造幣寮御中

追テ別紙品物附ケ一冊及御返却候御落掌可有之候尙初發同人御雇入ノ定約書中等ニ右件ノ次第記載有之候儀ニ御座候ハヽ其旨御申越有之度候

其寮御雇英人キンドル當港輸入貨物稅銀左之通

一洋銀四弗七十セント　從價稅

一壹分銀一ケ六厘　定額稅

右御取立ノ上早々御差廻有之度此段申進候也

大阪稅關

九月八日

造幣寮御中

この照會に對し造幣寮は左の如く答へ遂に無稅通關を許せり

當寮雇英人キンドル自用品輸出入稅銀可差出旨當八日付ニテ御申越ノ趣致承知候然ル處同人荷物輸出入之儀ニ付別紙寫之通陸奧正五位ヨリ瓜生租稅助へ達シ有之候上ハ過日ノ稅銀及此後當分之處何等御達有之候迄ハ稅納不爲致候間此段御承知有之度依テ御答旁申進候也

造幣寮

（別紙）

造幣寮御雇首長キンドル自用品輸出入免稅ノ儀井上馨造幣寮在勤中別紙印鑑ヲ以無稅通關ノ儀約定モ有之候ニ付追而何分ノ御達有之候迄右印鑑並造幣頭或ハ其代理ヨリノ證書ヲ以掛合候上ハ當分ノ內前同人自用品ニ限リ通關可被差許候此段相達候也

明治六年九月

正五位　陸奧宗光

租税助　瓜生寅　殿

降つて七年四月神戸税關より阪神兩港間に於ける外國人自用品檢査の手續を定め從來之れか爲めに起りし不便を排除せり

第百八號

貴港へ往復ノ汽船便ヲ以外國人自用品又ハ自用ノ食物等貴港へ回送ノ節ハ品ニ寄リ免狀不差渝而ハ不都合モ有之從來免狀與ヘ居候處本關へ引移後ハ各汽船繫場ヨリ程隔リ居候故汽船出帆之際ニ莅ミ候而ハ右等ノ手續可致時間モ無之夫カ爲メ船便ヲ後レ候樣ノ事有之差閊不尠隨而ハ苦情モ差起リ辨濟ニ及ト雖モ約處口舌ヲ勞スル而已ナラス彼レヘハ不便ヲ與ヘ却テ後日ノ口吻ヲ求メ候儀ニ付自今ハ全ク自用品且食物ニ相違無之分ハ第三波止場詰合ニ於テ別紙(之ヲ缺ク)寫之通書類相渡シ其品ハ從前ノ印紙貼用船積差許シ候事ニ相決シ候間右樣御承知貴關ニ於テモ無差閊樣御取計有之府尤是迄無免狀ニテ差許候樣ノ品ハ從前ノ通取計候此段モ爲念申進置候也

四月二十八日　神戸税關

大阪・税關　御中

三十四、同上內國產提携品に關する處分　政府雇入外國人自用品に關する處置は前述の如し然るに若し外國人にして購入せる國產物にして各開港場の來往に際し端なく疑議を生せるを以て税關長より左の質議　爲せり

御雇外國人國產物類各開港場間持越候取扱方之儀ニ付伺

該官省其他御雇外國人共官用ノ爲或ハ賜暇旅行中其出先ニ於テ買需御國產物類自己ニ提携シ外國航行船便ニテ往來候節モ其佗ノ國產物品外國航行税金其仕出港へ假收致來候處元來回漕品ニ税金ラ假收スルハ其品若シ直ニ外國へ持出候時ハ漏税ト相成候ニ付之カ豫防ノ爲此規則ヲ設クラレシニ可有之候然ルニ其條御雇外國人共ハ旅行免狀ヲ所持致候共直ニ外國ニ不立越モ亦品物モ自己ニ提携スレハ他人ノ所有ニ無之モ判然致居候ニ商物回送同樣假收税ノ上取扱候ハ至當ノ處置トモ不被存候是迄御雇外國人共此規則ノ事ニ付敢テ異議ハ不申立候得共其實物品仕出港へ回着ノ上其免狀ニ裏書ハ立得ルモ之ヲ仕出港へ送リ曩キニ假納セシ税金ヲ受取ハ煩却且其手數ヲ委托スルモノ無之ニヨリ往々假納ノ税金其儘捨置候者モ有之哉ニ傳承致候就テハ該件旅行免狀ヲ所持シテ其御雇タルノ證アル外國人自己ニ於テ提携スル御國產物類ニ限リ其本人ヨリ此品何船ニテ何レノ開港場へ無相違陸揚スヘク若右仕向港へ陸揚致サルルニ於テハ此品ニ課税スル處ノ税金ハ其雇廳ヲ經テ着日ヨリ十五日內ニ送納スヘシトノ証書ヲ爲差出通關取計候ハヽ既ニ御雇ノ者ニ付不取締トノ儀モ有之間敷公私ノ爲至便ノ樣ニ相考候間右御評議簡易ノ取扱規則御取設有之候樣致度此段相伺候也

八年十月五日　租税權助　長岡義之

租税頭　松方正義　殿

右に對し租税寮より左の如く指令し國產品の提携は故障なく通關せしむへきを以てせり

伺之趣御雇外國人自己提携スル內國產物品ヲ各開港場回送之義ハ定税假收幷證書爲差出ルニ不及通關可被差許候事

租税頭　松方正義代理　租税權頭　吉原重俊

三十五、內外公使館及軍艦乘込員自用品　六年七月歐米各國へ派遣の特命全權大使及ひ隨行各員

の當用品に關し横濱税關より之れか措置を租税寮に仰き租税寮より更らに正院を經由して左の如く指令し來れり

歐米各國へ派遣之特命全權大使及隨行諸官員自料之荷物追々其港并外諸港へ來着之分取扱方伺出之趣本省ヨリ正院へ上陳相成候處御削屆難相成段御指令相成候付テハ本年第二百十號公布之通一般收税可爲致旨大藏省事務總裁參議大隈重信ヨリ被相達候條可被得其意候此段相達候事

明治六年七月二十一日

租税頭陸奥宗光代理
租税權頭　松　方　正　義

租税權頭　中島信行殿

中島横濱税關長より更に之を各税關へ回達して之れか例規を示せるに後七月三十一日租税寮より横濱税關へ左の如く達せり

第二百六十六號寫

今般特命全權大使及隨行諸官員荷物來着取扱方之儀ニ付本月二十日第百四十二號ヲ以テ相達置候趣モ有之候處右ハ取消相成自今特命全權大使及隨行官員其他各國派出交際上ニ關係候諸官員ノ向ハ特別之御詮議ヲ以無税通關被差許候旨本日更ニ御達相成候ニ付テハ各税關ニ於テ得其意處分候樣御達可申旨大藏省事務總裁參議大隈重信ヨリ下命有之候條各税關へモ通達可致候此段相達候事

但交際上關係諸官員荷物取扱方法施行之儀ハ伺ノ上相達可申候事

六年七月三十一日

松方租税權頭

中島租税權頭殿

爰に於て特命全權大使及隨行各官員の當用品は特に無税通關を許せり而して後八年十一月に至り外國公使隨行員及公使館用品は無税通關を特許し之れか通關手續に關する税關吏心得書を公布す

外國公使館用品及公使其他自用品輸出取扱之義昨七年五月中其省伺許可ノ後實地施行ハ可見合樣相達置候處今般別紙税關官吏心得書ノ通相定候條此旨各税關へ可相達候事

八年十一月九日

太政大臣　三條實美

（別紙）

外國公使館用物品通關手續ニ付税關吏心得書

一外國公使手携品ハ其品類個ヲ論セス無檢査通關之事

但公使ニ隨行スル書記官及ヒ書記生通辨官公使館付及從者ノ物品同樣之事

一外國公使館用物品又ハ公使書記官自用ノ物品ハ其旨豫メ大藏卿ノ命アルモノハ無檢査ニ通關ノ事

一前條ノ手續ヲ經スシテ外國公使又ハ公使等ノ用品タル旨ヲ以テ通關ヲ請求スル者アラハ公使館又ハ公使ノ用品ナラサルト見做シ取押置キ其旨直ニ大藏卿幷ニ外務卿へ報知シ大藏卿ノ命ヲ待テ取扱可申事

但シ包箱上公使館等ノ標記アルモノハ前條ノ手續ヲ爲スマテ取押置クト雖モ決シテ粗暴ノ取扱ナサヽルハ無論タルヘシ

一今般各國公使館用品及ヒ公使其他公使ニ隨行スル書記官書記生通辨官公使館付屬及ヒ從者自用品輸出入取扱方御定相成ニ就テハ自今領事ノ荷物ノ上有税ニ屬スル物品有之候節ハ相當ノ税金徴收可致尤右之趣關長ヨリ各領事ニ一應通知可致此旨相達候事

其他外國領事館用品に就ては翌九年一月二十三日を以て租税寮より左の如く達せり

外國領事館用品通關取扱方ノ儀追而一定ノ御規則御確定可相成候得共夫迄ノ處ハ該國公使ヨリ外務省ヘ届出候趣ヲ以テ大藏卿ヨリ下命有之候都度其旨相達候條右物品ニ限リ無檢査無税通關可被取計其他領事ヨリ直ニ税關ヘ申立候分ハ尋常ノ商物同樣相心得其有税品ハ相當ノ税金徴收可被致此旨相達候也

九年一月二十三日

吉村租税權頭代理
租税助　立田顯信

同年十二月二日長崎關長より締盟國軍艦乘込の將士幷に水火夫に屬する物品取扱方に付き租税寮の指揮を仰き是に關する例規を作れり即ち

元第六十六號

締盟各國軍艦ノ將士幷水火夫ニ屬スル物品取扱方之義ニ付伺

締盟各國軍艦ノ將士幷水火夫ニ屬スル物品ヲ積出候節ハ從來無税ニテ通關差許候處右ハ彼國ノ武官ニシテ我國駐剳ノ員ニ係ルヲ以兩國交際上ノ敬禮ニ於テ此待遇有之哉ニ被存然レハ向後モ前將士幷水火夫ニ屬スル物品ハ自己ノ提携シ或ハ他人ニ依頼スルトモ其証書ヲ差出スモノハ其等級ノ高下ト物品ノ多寡及ヒ代價ノ高低トヲ論セス都テ無税通關差許可然哉前將士商便ヲ以テ他ニ贈進スル物品ハ現ニ其人ニ附着セサルモノナレハ固ヨリ待遇スヘキ理ナク平常物品同樣收税取計可然哉

右ハ是迄御達等モ無之唯税關ノ見込ヲ以テ取扱ヒ來候樣被存候自然各港區々ニ相成候テハ交際上不都合之義ニ付一定之御達有之度此段相伺候也

九年十二月二日

租税權助　長岡義之

租税權頭　吉原重俊殿

右に對する租税寮の指令は左の如し

乙第二百十二號

伺之趣第一節ノ如キハ都テ無税通關差許可被申第二節商船便ヲ以他ニ贈遣スル物品ト雖モ將士幷ニ水火夫ニ屬スル物品タルコト判然致居候ハヽ無税通關差許候義ト可被心得候事

九年十二月八日

租税權頭　吉原重俊

後十四年七月公使館用品及公使其他自用品取扱心得書中隨行員と云へる隨行の意義に關する質議及指令は左の如し

天第八十八號

公使館用品及公使其他自用品取扱心得書中不明瞭ニ付伺

神戸税關

去ル明治八年十一月十四日第二號ヲ以而被相達候外國公使館用品及公使其他自用品通關手續ニ付税關官吏心得書第一項但書中公使ニ隨行スル書記官云々ト之有右隨行ノ文字ハ直ニ公使ト同舩或ハ同行ノ義ニテ公使ノ身邊ニ隨ヒ居候モノニ限リ候哉又者公使他處ニ遊歷滯在中同館附書記官其他ノ官吏公使ノ所在ニ至ラントスルモノ或ハ公使滯在ノ地ヨリ公使ニ先ツテ歸館スルモノ等ノ如キハ其身現ニ公使ノ身邊ニ隨行セサルモ隨員ノ名義アルモノハ但書ノ部ニ含ムモノニ候哉右隨行文字ノ意味廣狹判然致兼候條至急御解釋承知致度此段相伺候也

神戸税關長　高橋新吉

關税局長　蜂須賀茂照殿

（右指令）

伺之趣ハ公使ニ隨從同行致候モノニ限リ候義ト可被心得候事

十四年七月廿八日

關稅局長蜂須賀茂照

代理權少書記官　有　島　武

三十六、旅具檢査　大阪開港以來旅具其他旅客提携品の檢査は常に天保山若しくは波止場番所に於て之れに任し租稅寮主管以後に在りては檢査課改品係の手に於てし爾來二十三年に至れり元來外航船舶の便を藉つて川口阜頭を上下する旅客は眞に寥々にして夫の政府雇入外人と清韓來往の內外商人との少數に過ぎさりしを以て是等檢査の際に於て別に何等の支障を見さりしも後二十三年執務上の便宜より始めて之れを監視課の手に移せり今十七年十一月旅客提携品の取扱其心得方に據れは當時の狀を究むるに足る

旅客提携品取扱方心得

一外國航行船ニテ往來スル旅客ノ提携品（旅具自用、船中用、船中遺殘手土產物等ノ類）ハ內外人ノ別ナク之ヲ改メ通關ヲ許スヘシ

本件ハ提携品ニ限リ以テ自用ノ送品等ト混スヘカラス

一右旅客ハ內地開港場間通航ノ者カ或ハ外國往來ノ者カヲ預認シ其外國往來ノ者ノ提携品ハ收稅ノ有無ニ關スルヲ以テ精密ニ是ヲ改ムヘシ然リト雖モ唯宇內遊歷ノ客ト屢彼我之間ヲ往復スル者トヲ亦制別スヘシ脫稅ノ奸ヲ謀ラントスルモノ多クハ常ニ彼我ノ間ヲ往復スル者（譬ハ內商ノ支那ニ骨董ヲ買入ニ往ノ類）ニ出ツルヲ以テ最モ之ヲ注意視察スヘシ

一我國幷ニ各國公使領事書記官カ又ハ我政府ヨリ提携品無稅ノ特許ヲ得タル內外人等ノ如キハ是ヲ改ニ不及尤其名刺ヲ取置クヘシ

一提携品ヲ改ムルニ品物ノ損傷セサル樣注意スヘキハ勿論ト雖モ別シテ婦人之衣裳飾物等ハ丁寧ニ取扱ヒ且改品ハ可成速ニナシ旅客ノ難澁ヲ來サヽルヲ要ス

一外國往來旅客ノ提携品中ニ有稅ニ屬スル者アル時ハ船積陸揚共該改品人其所持主ヨリ直ニ相當ノ稅金ヲ取立第一號ノ受取證ヲ附與シ通關差許シ其收稅金第二號ノ書式ヲ以テ各改品ヨリ檢査課ヘ之ヲ送致スヘシ尤モ右ハ自用船中用手土產物等ノ些少之品ニ限ヲ以テ顯然タル商物カ或ハ（外國往來ノ旅客ト判別シ難キ時ハ船切手ノ一見ヲ乞ヒ之ヲ証認スヘシ）稅金貳拾九圓以上ノ物ハ其所持主ヲシテ當然ノ手數ヲナサシムヘシ

一提携品ハ稅金貳拾五錢ニ滿タサルハ取ルニ不及

一內地開港場間通航カ或ハ直ニ外國ヘ往クカ判然シカタク其狀恰モ外國往ノ如ク見受クル旅客該改品ハ其所持主ヨリ直ニ相當ノ稅金ヲ預リ第三號ノ預證ヲ附與シ通關差許シ其預リ金ハ第四號ノ書式ヲ以テ各改品人ヨリ之ヲ檢査課ヘ送致スヘシ亦顯然タル商物ハ假令內地開港場間通航（內國供給ノミノ製造及天然物ヲ除ク）有稅ニ屬スル者アル時ハ提携品中稅金五圓以上ノ旅客ノ物タリ共其所持主ヨリ當然ノ手數ヲナサシムヘシ

一檢査課長ハ各改品人ヨリ送致セル收稅ノ次第ヲ檢シ之レヲ合シテ每月收稅課ヘ送致スヘシ

一右事務開關中ハ改品料……閉關後ハ本關……當宿直ニ於テ之ヲ取扱其交代ノ時ニ書式無遺忘授受スヘシ

旅客提携品取扱者心得追加

一內地開港場通航旅客ノ提携品中他港稅關ノ輸入稅濟ニテ積廻シノ免狀テ附貳スル提携ニ屬スル品アルトキハ其免狀ト照應シ無相違ハ左ノ書体ニ免狀ヘ裏書ヲナシ其品通關取計ヘシ亦他港稅關ノ預リ稅免狀ヲ附貳スル品或ハ他港稅關ノ輸入稅濟ニテ積廻シ免狀ヲ附貳スル商物アルトキハ開關中當然之手數ヲサナシムヘシ尤實物ノ員數免狀ニ缺ルトキハ其箱ニ封印ヲナサシムカ或

ハ其事由ヲ附記セル書類カヲ取置後證トスヘシ

第七章　保管及藏置

イ、上　屋

三十七、上屋の設置　從來大阪運上所々屬の上屋なるものは去る明治二年正月檢査未濟の貨物保管上一時附近の古土藏一棟を襲用(第一期貨物篇二十五、上屋の項參照)せるのみなりしに後租稅寮主管の時に丁り五年九月一日を以て始めて上屋建設の議を上申して曰く

大阪運上所之儀ハ從來所屬之上家無之輸出入荷物改未濟之間ハ運上所內荷改場所へ爲積置候得共右ハ周圍ノ取締無之差向事務難施行候間別紙ノ通鐵柵ヲ以テ三方圍込假之上屋所用致シ度前段之通眼前差閊候義既ニ職人へ申付不日落成相成ヘク候間御入費早々御出方相成候樣御取計有之度別紙明細書類相添此段申候也

壬申九月朔日

陸奥租稅頭殿

松方租稅權頭殿

厚東樹臣

(別紙)

記

一金百貳拾七圓六拾四錢

一金百八拾參圓參拾錢

〆參百拾圓九拾四錢也

運上所內鐵柵取毀之材木其外職方手間料明細書別紙ノ通

六歩差渡鐵棒百三十本目方千五十五ポンド

猶以御下金ノ上夫々仕拂方請取書等ハ追而精算雛形之通取纏メ差進可申候也

之に對し租稅寮より左の如く承認し來るを以て直ちに之れか建設に着手し遂に十月二十一日を以て功を竣れり

第九號

大阪港運上所許從前之荷物改場所三方鐵柵ヲ以テ圍込假之上屋ニ所用ニ被致度見込ニ付右入費爲見積仕樣帳金高三百拾圓九拾四錢ヲ目的トシ修繕取懸リ落成ノ上出來形精算帳可被差出候此段御達申入候也

壬申十月九日

陸奥租稅頭

厚東樹臣殿

是より先運上所は上屋建設の經費に就て請求するや租稅寮より上請上の手續に相違あるの故を以て其の注意を與へ運上所は直ちに正當の順序を踏んて之れか承認を受け始めて該工事に着手せり今當時會計制度の上に於ける一端を窺知するに足るものあるを以て左に租稅寮よりせる文書を揭けて參考に資せんとす

本月六日付ヲ以テ大阪港稅關所屬ノ上屋之ニ付從前ノ荷物改場所へ周圍ノ鐵柵新規取設假ノ上屋ニ所用被致度趣ヲ以テ既ニ其旨職人へ下命シ不日落成可相成筈ニ付右費額參百餘圓御出方相成候樣可取計旨御申出有之然ル處營繕向等總テ假定額金ヲ以テ取賄ノ分ヲ御委任相成居候義ニ付御手限リニテ御處分相成可然候得共定額外別途御出方可相成分ハ最前御伺出有之土木寮ニ於テ可否檢査ノ上本省へ相伺許可ヲ經本省ヨリ指令濟後實地施行ニ取掛リ候制規ノ義ハ兼テ御承知モ可有之然ルニ是迄迚モ營繕等專斷取計後被申越候義モ有之候得共一時無餘議御取計ノ義ト宇彼是配慮致置候處尙又今般ノ如ク御取計有之候ハ如何ニモ不都合ノ義ニ有之一體阪神兩港ノ間ニ於テ專斷ノ

御處分往々有之本省へ對シ不都合ノ次第ニ付爾後篤ク御注意有之度仍テ今般御申越有之候書類御返却及ヒ候間順序相立伺方御取計可有之候此段御達申入候也

壬申九月十日

厚　東　樹　臣　殿

陸　奥　租　稅　頭

三十八、上屋規則の制定　如上上屋の設備其竣功を告けんとすると共に大阪運上所は曾て横濱運上所に於て規定せる上屋規則を斟酌し西暦千八百七十二年十二月一日より實施すへき旨を在留各國領事に通知せり時に五年十月十八日れりき(一期貨物篇參照)降つて十年十二月神戸稅關に於て神阪兩稅關上屋規則を改正し翌年一月一日より之れを實施せしむ則ち左の如し

稅關上屋規則

第　一　條

上屋ニ假入シタル貨物ノ引渡時間ハ日曜及ヒ式日ヲ除クノ外日出ヨリ日沒ヲ限リトス

第　二　條

第九條ノ物品ヲ除クノ外上屋ニ假入スル貨物ハ總テ倉庫課官吏ノ指示セシ場所ニ差置クヘシ尤二十四時(一晝一夜)ヲ限リトス

第　三　條

前條二十四時以後ハ荷主又ハ引受人倉庫課官吏ノ許可ヲ得其貨物ヲ假庫ニ移入シ猶四十八時(二晝二夜)間之ヲ差置クコト妨ケナシ但シ此時限中ハ庫租ヲ收ムルニ及ハスト雖モ若シ其貨物災害ニ罹ルコト有ラハ荷主又ハ引請人ノ損失タルヘシ

第　四　條

第二條ノ如ク二十四時間ニ上屋ヨリ引取ラサル貨物ハ稅關長第三條ノ如ク之ヲ假庫ニ移納ス可シ尤其雜費ハ勿論貨物ノ損害等ハ荷主又ハ引請人ノ引請ケトス但シ此時限以後ノ取扱ハ第五條ノ如シ

第　五　條

第三條ノ如ク四十八時間ニ假庫ヨリ引取ラサル貨物ハ稅關長更に假庫ニ輸送シ其規則ニ照應シ以テ之ヲ貯藏スヘシ但シ此雜費モ亦荷主又ハ引請人ヨリ差出スコト當然タリ

第　六　條

當港ニ陸揚セシ後七十二時(三晝三夜)間引取ルモノ無キ貨物ハ稅關長之ヲ無請求品ノ倉庫ニ移納シ一年間貯藏スヘシ尤其雜費或ハ損害ノ如キハ總テ荷主又ハ引請人ノ引請トス但シ此期限ヲ越ユルトキハ則明治二年巳巳正月十九日(一千八百六十九年三月一日)頒行シタル借庫規則第十四條ノ如ク取扱フ可シ

第　七　條

貨物陸揚以後七十二時間ハ日本政府敢テ其守衞ヲ爲サヽルニ非ラスト雖モ之ヲ借庫ニ貯藏スルニ非ルヨリハ堅固保護スルコト能ハス

第　八　條

天氣或ハ稅關長ノ肯スヘキ事故アリテ實ニ第三條ノ如ク上屋ヨリ引取リ難キ貨物ハ其時限ヲ緩フスヘシト雖モ決シテ(借庫ニ貯藏セシニ非ルヨリハ)七十二時ヨリ長ク差置クコトヲ許サス

第　九　條

燃質破裂質ノ物品又ハ建築用ノ如キ嵩高ノ物品ハ一切上屋或ハ假庫ニ入ルヽコトヲ許サス此品類ヲ陸揚スルトキハ速カニ之レヲ引取ルヘシ

第　十　條